は　じ　め　に

子供たちを取り巻く社会は、生成 AI が急速に社会に浸透し、これまでの知識偏重型の学びから、変化に主体的に対応する力がより一層求められています。また、不登校児童生徒の増加や、特定の分野に特異な才能のある子供、外国籍の子供など、子供たちの背景や特性の多様化が一段と顕著になっています。10月に、「次期学習指導要領等に向けた審議まとめ」（以下、「審議まとめ」と言う。）が示されました。基盤となる考え方として、「多様な子供たちの『深い学び』を確かなものにするために、生涯にわたって主体的に学び続け、多様な他者と協働しながら、自らの人生を舵取りすることができる、民主的で持続可能な社会の創り手をみんなで育む。」と示されています。教育の果たす役割は、ますます重要となっていることを痛感しています。

本校が特別活動の研究に取り組み、13年目となりました。今年度は、研究主題を「支え合い　高め合う　仲間づくり」と設定しました。互いを思いやる発言や行動が同学年、異学年問わず随所に見られ、温かい思いに浸るたびに、これまでの積み上げを感じます。しかしながら、自分の思いや考えを適切に表現することや相手を慮った行動をとることが難しく、特別活動で身につけさせたい力を育めていない実態があります。そこで、副題を「言葉をふやし、言葉にこだわり、思考を深める子ども」と設定し、国語科の研究にも取り組むことにしました。「審議まとめ」国語の項目（概要）に次の記載があります。

「自分の思いや考えを表現することや、目的や場面に応じたコミュニケーション等に課題がある。生成 AI の発展や社会の多様性と分断の危険性の双方が増すこれからの社会においては、自らの考えを言葉にし、論理的かつ説得的に表現し対話する力や、多様な他者の感性や情緒を理解するとともに、それらを通じて自らの思いや経験を効果的に表現する力、他者と協働して考えを深める力など、人間ならではの力の育成が必要である。」

1年4か月後に、本校は隣接校と学校統合します。児童、保護者、地域、学校が協働して、新しい学校づくりに取り組んでいるところです。先日の第1回学校統合ワークショップでは、児童は各校3人ずつ、異学年6人の班を12班つくり、「どんな学校をつくりたいか」ということを話し合いました。今の学校の良いところを伝え合い、新しい学校で取り組みたいことを考えました。私が想像していた以上に両校の児童の話ははずみ、お互い、幸せが多い、すてきな学校にしようという思いを強くしたように思います。社会の中で多様な他者とともに生きる力を育むことをめざして、日々の実践を積み重ねていきます。常に新しい学校づくりを意識し、教育課程全体を通じた言語能力の育成を一層推進すること、そして、確かな民主主義の担い手を育み、共生社会を実現する基盤としての特別活動を実現することをめざします。

試行錯誤の日々ですので、ぜひとも忌憚のないご意見をいただきたいと思います。皆様からいただいたご意見を真摯に受け止め、子供が主体となり、活躍する学校づくりを目指し、今後も研究と研修に取り組む所存です。

最後になりましたが、本校の研究を進めるにあたり、ご多用の中、本校研修会に講師として研究の指針を示してくださり、本日ご講演をいただく 國學院大學人間開発学部初等教育学科教授 杉田 洋 先生、また、国語科の研究を始めるにあたって、一つ一つ具体的にご指導いただきました神戸女子大学教育学部教授 吉川 芳則 先生、元宝塚市立小学校 富岡 淑佳 先生、そして宝塚市教育委員会の皆様、保護者、地域の皆様に深く感謝申しあげます。

令和8年（2026年）11月27日　宝塚市立光明小学校長　福本 徳子

《 目　　次 》

はじめに　1
目　　次　2
日　　程　3
会 場 図　4

1 研究の概要

令和8年度（2026年度）光明小学校の教育……5
本年度の研究について……6
特別活動全体計画……8
特別活動でつけたい資質・能力……12
本年度の研究の足跡（研究のあゆみ）……14
特別支援教育……27
人権教育……29

2 本年度 研究の取組

学級のあゆみ……31
（1 年・2 年・3 年・4 年・5 年・6 年・ふたば）

特別活動　学級活動指導案……38
全校研究会指導案（5年（3）・1年（1））
一人一授業指導案（2年（1）・3年（1）・4年（3）・6年（1）・ふたば（1））

国語科　学習指導案……55
全校研究会指導案（4年・2年)
一人一授業指導案（1年・3年・5年）
実践ウォッチ指導案（ふたば・音楽科・通級指導教室）

3 研究のふり返りとこれから

集会ごとのふり返り(子どもの育ちと課題を明確に)……80

4 全体会・講演

事後研究会・全体会・講師紹介・メモ……85

おわりに　88

令和８年度（2026 年度）宝塚市教育委員会指定公開研究会

研究主題

支え合い 高め合う 仲間づくり

～言葉をふやし、言葉にこだわり、思考を深める子ども～

◆日　程◆　令和8年(2026 年)11 月27 日（金）

受付	児童集会	移動	公開授業 第1～6学年、ふたば学級	移動	事後研究会	移動	全体会・講演会
12:45	13:00	13:20	13:45	14:30	14:45	15:30	15:45	16：50

○ 児童集会　　13:00 ～ 13:20【 体育館 】

○ 公開授業　　13:45 ～ 14:30【 各教室 】

事後研究会　14:45 ～ 15:30【 指定の教室（下表参照）】

公開授業			事後研究会
学年・組	教科・内容	授業者	
1年1組	学級活動（1）	濵田　梨乃	1年1組
2年1組	学級活動（1）	澤田　強志	
3年1組	国語科	小西　哲也	4年1組
4年1組	国語科	成迫　由起	
5年1組	学級活動（1）	小嶋　宏典	6年1組
6年1組	学級活動（1）	永樂　俊樹	
ふたば　3・4年	自立活動	一二三琢磨、池内純、栗之池陽子	学校図書館　※

※　ふたば学級の事後研究会は、申し込み人数により、3･4年の事後研究会と兼ねる場合があります。

○ 全体会　15:45 ～ 16:50

教育長あいさつ　宝塚市教育委員会　教育長　赤井　稔

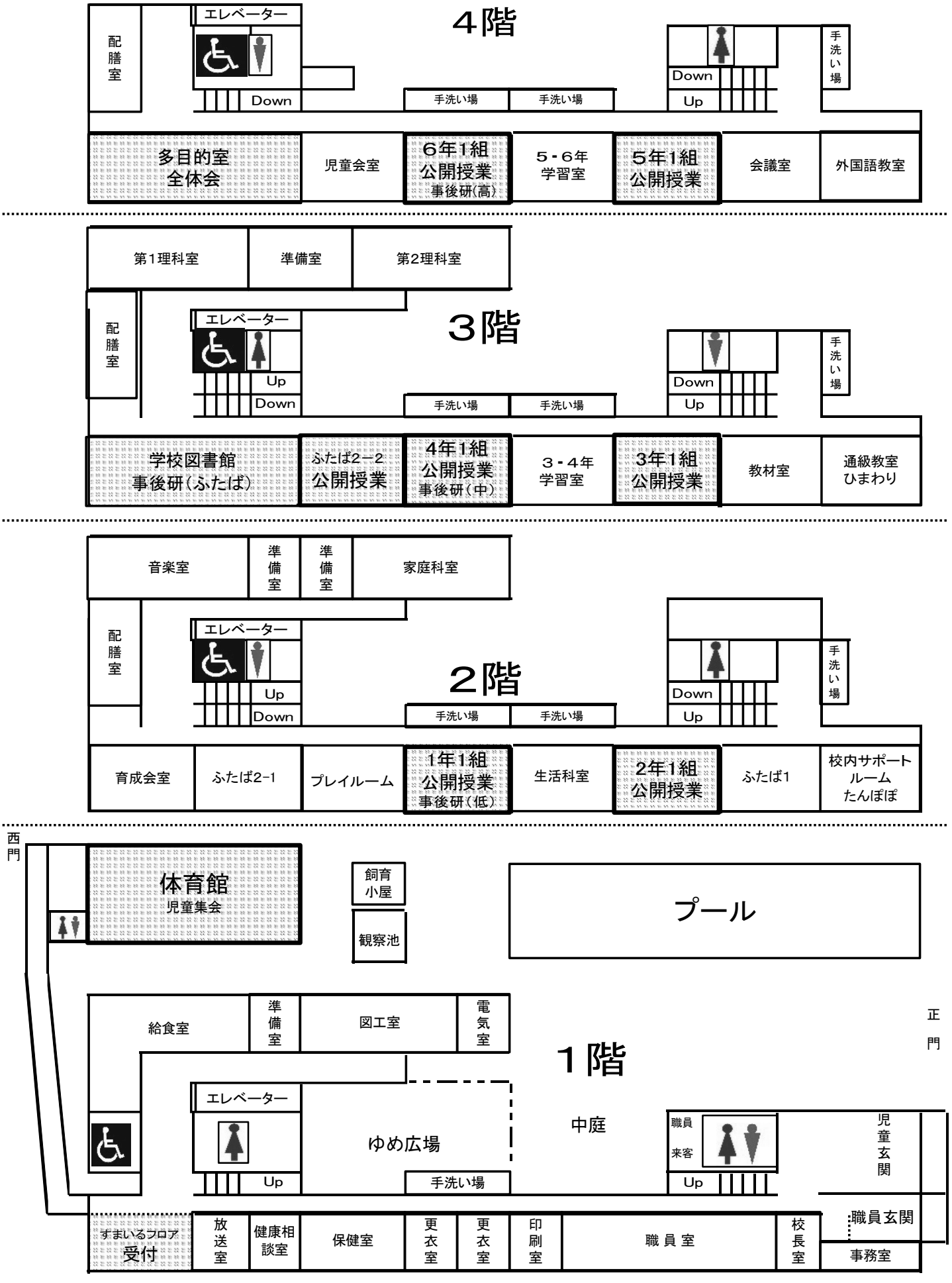
講評・講演　國學院大學人間開発学部　教授　杉田　洋 先生

演題「これからの特別活動の在り方について

～次期学習指導要領を踏まえた取組に向けて～」

閉会あいさつ　宝塚市立光明小学校　校長　福本　德子

会　場　図


4階
配膳室
エレベーター
Down
手洗い場
手洗い場
Down
Up
手洗い場
多目的室
全体会
児童会室
6年1組
公開授業
事後研(高)
5・6年
学習室
5年1組
公開授業
会議室
外国語教室
3階
第1理科室
準備室
第2理科室
配膳室
エレベーター
Up
Down
手洗い場
手洗い場
Down
Up
手洗い場
学校図書館
事後研(ふたば)
ふたば2−2
公開授業
4年1組
公開授業
事後研(中)
3・4年
学習室
3年1組
公開授業
教材室
通級教室
ひまわり
2階
音楽室
準備室
準備室
家庭科室
配膳室
エレベーター
Up
Down
手洗い場
手洗い場
Down
Up
手洗い場
育成会室
ふたば2-1
プレイルーム
1年1組
公開授業
事後研(低)
生活科室
2年1組
公開授業
ふたば1
校内サポート
ルーム
たんぽぽ
西門
体育館
児童集会
飼育
小屋
観察池
プール
給食室
準備室
図工室
電気室
1階
正門
エレベーター
Up
ゆめ広場
手洗い場
中庭
職員
来客
Up
児童玄関
職員玄関
すまいるフロア
受付
放送室
健康相談室
保健室
更衣室
更衣室
印刷室
職員室
校長室
事務室
運動場(駐車場)

Ⅰ　研究の概要



クラブ活動決め



代表委員会

令和８年度（2026 年度）　光明小学校の教育

学校教育目標

互いにかかわり合い 高め合う 光明っ子の育成

～ 自主 ・ 自律 ・ 情愛 ～

めざす子ども像

主体的に学ぶ子供　　（よく学び）
自分に責任を持つ子供　　（よく働き）
かかわりを大切にする子供　　（みんななかよし光明っ子）

めざす学校像

・一人一人が大切にされる学校
・心やすらぐ潤いのある環境の学校
・地域に愛され誇りの持てる学校

めざす教職員像

・率先垂範・師範同行の教職員
・専門性と指導力の向上に努める教職員
・子どもと共にあり、児童理解に努める教職員

基本方針

・学校と地域の特性を生かした知育・徳育・体育の調和のとれた教育課程を編成し、実践を通して充実・改善に努める。
・教育活動全領域において、児童一人一人が大切にされる教育を推進する。（「人権尊重」の視点）
・児童の主体的・能動的な学びへの意欲・態度を養い、基礎学力の定着を図る。（「主体的・対話的で深い学び」の視点）
・保護者や地域への情報発信に努めると同時に、保護者や地域の声に耳を傾け、教育効果の向上を図る。（「共に」の視点）
・教育公務員としての使命感と責任感にあふれ、研究・研修を積極的に推進し、公開すると共に専門性と実践的指導力の向上に努める。

研究主題

支え合い 高め合う 仲間づくり

～言葉をふやし、言葉にこだわり、思考を深める子ども～

本年度の研究について

1．研究主題

支え合い　高め合う　仲間づくり
～言葉をふやし、言葉にこだわり、思考を深める子ども～

2．昨年度までの取組と本年度の研究について

特別活動の研究に取り組み 13 年目となる。これまで特別活動を研究してきた結果、集会や学級会、縦割り活動による学年を超えた交流の進め方については子どもたちに定着し、円滑に行えるようになった。しかしその反面、授業や日常の場面においては自身の言葉で語ることが難しかったり、他者を慮った行動ができていなかったりと、特別活動に取り組むことによって身に付けさせたい力が、本当に本校児童に育めているのかという課題が明確になった。子どもたちが自身の言葉で語り、自分も相手も大切にする集団を作っていくためには、子どもたちの語彙力や思考力、表現力を高めることが必須であるため、国語科の研究も行う必要があるという結論に至った。

学習指導要領においても、「国語科で身につけた『話すこと・聞くことの能力』が、特別活動においてより良い生活や人間関係を築いたり、集団としての意見をまとめたりするための話合い活動に実践的に働くことになる。また、特別活動で養われることになる、より良い生活を築くために話し合ったり、言葉で表現したり、まとめたり、発表し合ったりするための資質・能力が、国語科における『話すこと・聞くことの能力』『書くことの能力』を養うための学習においても生かされることになる」と示されている。

こうした経緯から、今年度は国語科の授業研究もおこない、特別活動と両輪で子どもたちの力を育むことを目的として研究に取り組む。言葉は、あらゆる場面において、基幹力となるため、教育活動全体を通して子どもに働きかける。そのことによって、子どもの知識・技能や思考力・判断力・表現力の向上等、将来の社会生活において必要となる資質や能力の育成に取り組んでいく。こうしたことから、今年度の研究主題を「支え合い　高め合う　仲間づくり　～言葉をふやし、言葉にこだわり、思考を深める子ども～」と設定する。

めざす子ども

- ○自他の考えを尊重しながら、ともにより良いものをつくる子ども
- ○語彙をふやし、言葉にこだわる子ども
- ○根拠と理由を明確にして考えを伝え合い、思考を深める子ども
- ○主体的に学習に向かい、授業をつくる子ども

めざす教師

- ○つけたい力を明確にし、子どもの力を伸ばす教師
- ○子どもの思考を深める発問や板書を工夫する教師
- ○子どもの知的好奇心を引き出し、学びの楽しさを子どもと共有できる教師
- ○常に研究・研修に努め、共に学び合う教師

3．具体的な取組

①話す・聞く・話し合うことを軸とした活動・授業づくりと指導
- ・系統表の活用
- ・音読詩集の活用（音読会や報告会等で互いに聞き合う学習の設定）

②めあてとふり返りを価値づけた活動・授業づくり
- ・子ども自身によるふり返り
- ・教師による事後のふり返りと次の課題設定

③自分も他者も大切にした活動・授業づくり
・誰一人取り残さない集団づくり
・規律（「話し方　かきくけこ」「聞き方　かきくけこ」、声のものさし、学習のやくそく、立腰）
④あらゆる場において、言葉を選び、内容や話し方を考えて伝える力の育成
⑤自己肯定感を高める活動・授業づくりや集団づくりと評価
⑥子どもの学びを広げる教室掲示や廊下掲示（活動や学習の足跡）
⑦子どもが企画・運営する「きらきら掲示板」
児童集会、委員会活動、クラブ活動のめあてとふり返りや連絡を、児童が書いて掲示する。
⑧言葉の世界へ誘う掲示板　「言葉の扉」
⑨自主学習力を育む家庭学習の取り組み
家庭学習ノートを使い、毎日の家庭学習を促し、自主自学力をつける。
⑩学校だよりや研究だより
学習規律や学校での取り組み、家庭の役割を児童や保護者に伝える。
⑪授業の公開
・教師の授業力を高めるため、全教員が授業を公開する。
・全校研究会を行うことによって、講師を招いた学びの場を設ける。
・教科部会等で教材研究を行い、授業を公開する。

４．講師について

國學院大學	人間開発学部	教授	杉田　洋　氏
神戸女子大学	教育学部	教授	吉川　芳則　氏
宝塚市立小学校		元教諭	富岡　淑佳　氏

特別活動全体計画

1　特別活動の目標（学習指導要領より）

集団や社会の形成者としての見方・考え方を働かせ、様々な集団活動に自主的、実践的に取り組み、互いのよさや可能性を発揮しながら集団や自己の生活上の課題を解決することを通して、次のとおり資質・能力を育成することを目指す。

（1）多様な他者と協働する様々な集団活動の意義や活動を行う上で必要となることについて理解し、行動の仕方を身につけるようにする。

（2）集団や自己の生活、人間関係の課題を見いだし、解決するために話し合い、合意形成を図ったり、意思決定したりすることができるようにする。

（3）自主的、実践的な集団活動を通して身につけたことを生かして、集団や社会における生活及び人間関係をよりよく形成するとともに、自己の生き方についての考えを深め、自己実現を図ろうとする態度を養う。

2　領域

① 学級活動　　年間35時間以上(1年生は34時間以上)

内容（1）学級や学校の生活づくりへの参画

内容（2）日常の生活や学習への適応と自己の成長及び健康安全

内容（3）一人一人のキャリア形成と自己実現

②児童会活動 (代表委員会・委員会活動・児童会集会活動)

〇児童会の組織づくりと児童会活動の計画や運営

・主として４年生以上が計画や運営を行う。

・代表委員会は毎月第２火曜日の昼休みに行う。

・委員会活動は月１回ハーフ委員会を開く。（14:30～15:00）

〇異年齢集団による交流

・児童会集会活動は金曜日の８：30～8:45（30 分に集会をスタートできるように）

※児童集会がない日は、各学級で特活タイム（係活動、学級会の準備など）

４～６年生は委員会活動のために集まる場合もある。

・きらきら掃除（たてわり）は水曜日８：30 に掃除を開始。

〇学校行事への協力

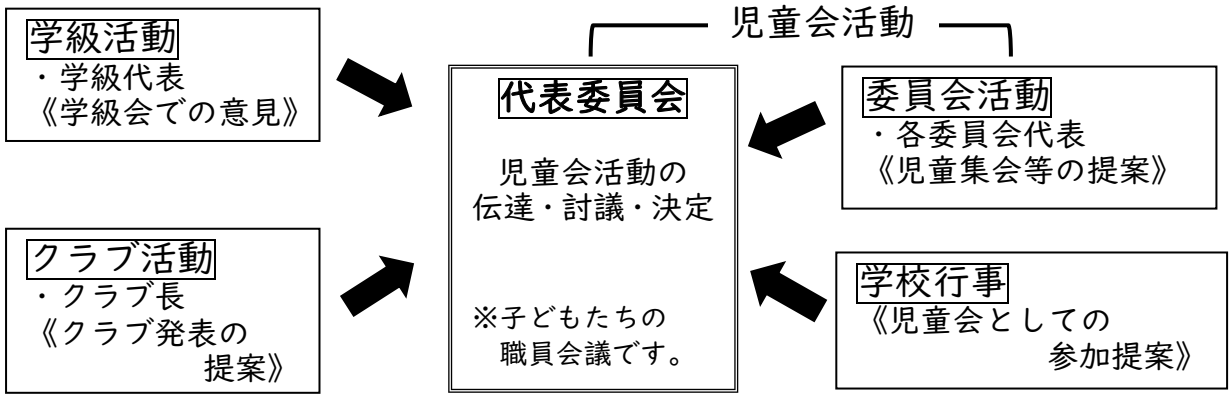
③クラブ活動　（４年生以上　年間 45 分×6 回)

〇異年齢の児童同士で協力し、共通の興味・関心を追求する。

〇活動の意義や行う上で必要となることについて理解し、子どもたちが主体的に考えて実践できるよう指導する。

④学校行事　①儀式的行事　②文化的行事　③健康安全・体育的行事④遠足・集団宿泊的行事　⑤勤労生産・奉仕的行事

3　光明小学校 特別活動の内容について



【学級活動】

①ねらい

様々な集団活動を通して、学校・学級の課題を見出し、解決のための方法や内容をみんなで話し合い、合意形成や意思決定をする中で、より良い生活や人間関係を築き、学校生活の充実と向上を図る。

②活動の具体

〇学級会

・①問題発見→②解決方法等の話合い・決定→③実践活動→④ふり返りの活動に継続して取り組む。
・議題箱による提案、代表委員会の提案などから、学校・学級の問題を発見する。
・司会グループ（司会１・副司会１・黒板記録２・ノート記録 1）の役割を、輪番制で全員が経験する。
・司会グループと提案者で計画委員会を持つ。（発達段階に応じて、教師が指導する）

〇係活動

・係活動と当番活動の違いを明確にする。
係活動･･･学級生活を豊かにするために児童の創意工夫によって自主的・実践的に取り組む活動
（手話係・かざり係・クイズ係など）
当番活動･･･学級生活が円滑に運営されていくために、学級の仕事を全員で分担し、担当する活動
（黒板係・配り係・保健係など）

【児童会活動】

代表委員会

①ねらい

全児童が楽しくより豊かに生活するために、各学級や各委員会の代表が集まり、学校目標の達成のための方法、諸問題の話合いや実践活動を行う。

②構成

アイデアたくさん委員会全員、各委員会代表、全学年のクラス代表(１～２名ずつ輪番)、
クラブ長１名、１年生担任（様子によって児童代表でも可）

③活動時間　　毎月第２火曜日昼休み

④場所　　児童会室

※学級の意見をもって代表委員会に出席し、代表委員会で決定されたことを学級へ連絡する。クラスの代表者は固定せず、輪番制にする。

※委員会などで行う集会活動は、必ず代表委員会で提案をする。

委員会活動

①ねらい

児童が協力しあって学校内の仕事を分担し、創意工夫しあって自主的に活動することを通して、より充実した学校生活を送ることができるようにする。

②構成

４年生以上の全児童が自己の特性や希望を活かして、委員会に所属する。
任期は３月の新委員会が決定するまでとする。
委員長１名､学年代表各学年１名(決定済み)｡途中転入生は希望を聞き担当の了解を得て配当する。

２月まで現委員会で活動し、２月末に現３・４・５年生で、新しい委員会の編成を行う。
３月のハーフ委員会から新しい委員会で活動を行う。６年生は所属の委員会に残り、
次年度の活動計画や目標、常時活動などを引き継ぐ。

③活動時間

・きらきらタイムや休み時間、放課後に常時活動（仕事）を行う。
・ハーフ委員会は、年間１１回、水曜５時間目終了後に３０分間行う。(14:30～15:00)
常時活動のふり返りや、児童会集会活動での発表などの話合いや準備を行う。

児童会集会活動

①ねらい

学級や学年の枠をこえて、異学年の友だちの輪を広げ、学校全体のまとまりを高める。
自発的に集会活動を行おうとする態度を育てる。

②活動時間

〇児童会集会活動　…　金曜日　8:30～8:45

※日程調整は、アイデアたくさん委員会が行う。
〇ロング児童会集会活動　…　45 分間
→１年生を迎える会・６年生を送る会・歌声コンテスト・光明ショウ店街
※準備、企画、運営はアイデアたくさん委員会が行う。
〇委員会・クラブによるミニ集会　…　20 分休み・昼休み・昼の放送など〉

③構成
全校児童　(ミニ集会においては、希望する児童)

④各委員会活動内容と担当者

委員会活動名(場所)	活動内容	担当
アイデアたくさん【計画】 (児童会室)	代表委員会の原案作成・運営　　児童会室の管理 臨時児童集会の計画・運営	永樂
みんな仲良し【集会】 （５―１）	児童集会の計画・運営 たてわり遊びの計画・運営	小嶋
本も友だち【図書】 (学校図書館)	学校図書館の紹介・貸し出し 学校図書館の整備	濵田
わくわくアナウンス【放送】 (音楽室)	始業前、給食、清掃時間の放送 集会活動等での放送	一二三 古谷
みんなもぐもぐ【給食】 (ふたば２－２)	給食のお知らせ 返却の見守りと残量調べ	栗之池
生き物ふれあい【飼育】 （３－１）	飼育小屋の世話 生き物に親しむための活動計画	小西 中村
学校ぴかぴか【環境・美化】 （４―１）	校舎内外の美化活動　　清掃用具の点検 たてわりそうじの計画・運営	成迫
元気もりもり【体育・保健】 （６－１）	運動用具の整備や整頓　　運動や遊びの紹介 保健室での処置以外の補助　　保健衛生に関する啓発	澤田 川上
お知らせ【掲示】 (ふたば２－１)	学校掲示板の活用 学級、委員会活動、クラブ活動などの情報発信	池内

【クラブ活動】
①ねらい
共通の興味・関心をもつ児童集団を組織し、自主的・自発的な活動を行うことにより、学校生活をより楽しいものにする。
②活動時間　　水曜日６校時　14:30～15:15　※45 分間×7 回
※休み時間やきらきらタイムを活用し、年１回はクラブ発表の機会をもつ。
③構成
・４、５、６年生が興味関心のあるクラブに所属し、１年間を通して活動する。
・部長（６年生１名)、副部長（４～６年生１名)、記録（４～６年生１名）を選出する。
・転入生については、希望を聞き、担当の了解を得て配当する。

④クラブ活動決定方法

（１）６年生が希望のクラブを話し合い、決定する

・様々な児童の興味を考えて、クラブ活動の種類が偏らないようにする。

（２）４、５年生に向けてクラブ紹介集会をする

・自分の得意なことや、クラブ活動の楽しさ、良さをアピールする。

・１年間の活動計画を提案する。

・４、５年生は希望のクラブを選ぶ。

※必ず４～６年生の異学年が所属するクラブ活動になっているか、人数の偏りによって活動に支障をきたすことがないかを確認する。

（３）クラブ活動を最終決定する

３　自治的な活動について

特別活動において自治的活動の範囲を明確にし、児童が勝手に決めてはいけない事に関しては、教師が適宜、指導を行うようにする。

〇安全に関すること
〇罰則に関すること
〇金銭や物品に関すること
〇学校のきまりに関すること
〇学習内容に関すること
〇学級経営に関すること　　など

【特別活動でつけたい資質・能力】（1、2、3年生版）

学校でつけたい資質・能力	学級活動	児童会活動	クラブ活動	学校行事
知識・技能	・自分の考えや疑問を自由に発言する。 ・考えを出し合い、比べ合い、より良い考えを創りあげる。 ・集会活動に向けて、役割の準備を計画的に行う。	・全校児童が共に楽しくかかわり合いながら、協力して活動することの大切さを理解する。		・めあてに向かって、計画・準備・実践する。 ・一人一人の取り組みがより良い学校づくりにつながることを理解する。
思考・判断・表現	・提案理由に沿っているかという観点で、複数の意見を比べ合う。 ・見通しをもって計画的に話合いを進める。 ・具体的に活動することも取り入れながら自他の意見や状況を理解し、多様な意見について折り合いをつけ、まとめる。	・それぞれの集会や委員会活動の目的にふさわしい活動内容や方法を考える。		・行事をより良くするために話し合う。
主体的な態度 学びに向かう姿勢	・集団の過去をふり返り、未来を見据えて自分の願いを持って取り組もうとする。 ・学級の一員という自覚を持ち、主体的・対話的に取り組もうとする。 ・活動のふり返りをもとに、次のめあてをもつ。	・集会や委員会活動で実践したことについてふり返り、次の活動に生かそうとする。 ・異年齢集団で活動したことを通して、自分の良さに気づき、学校生活で発揮しようとする。		・行事を通して、自分の成長を見つめようとする。 ・学校の一員としての自覚を高め、人とのかかわり合いやつながりを深めていこうとする。

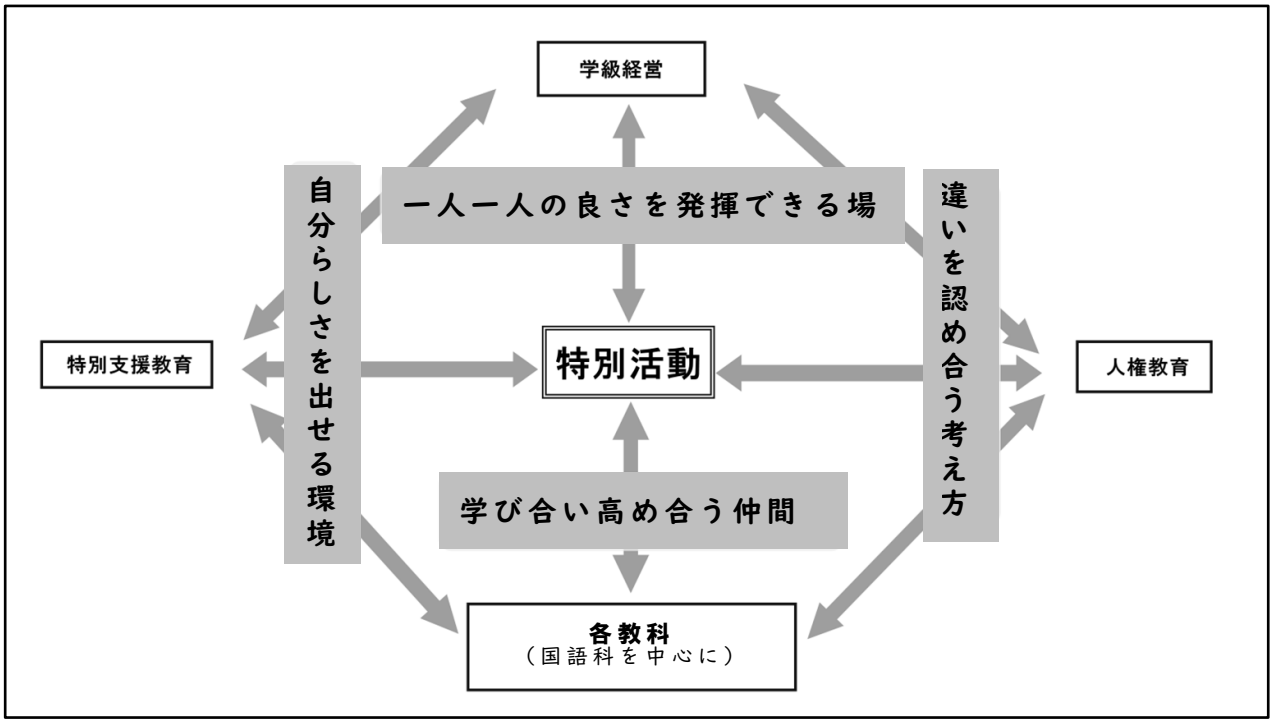
【特別活動でつけたい資質・能力】（4、5、6年生版）

学校でつけたい資質・能力	学 級 活 動	児 童 会 活 動	ク ラ ブ 活 動	学 校 行 事
知識・技能	・自分の意見について根拠を元に理由を話し、要点を捉えながら聞き合う。 ・意見を出し合い、比べ合い、みんなが納得できる考えを創りあげる。 ・議題について、お互いの意見を尊重しながら合意形成を図っていくことを理解する。	・見通しを持って運営（計画・準備・実践）している。 ・全校児童が共に楽しくかかわり合いながら、協力して活動することの意義を理解する。	・互いの発想を生かしながら、異学年の友だちと共通の興味・関心を追究する。	・行事に取り組む一員として、責任をもって活動する。 ・学校行事の意義及び活動を行う上で必要となることについて理解する。
思考・判断・表現	・観点を明確にしながら、話合いを進める。 ・自他の意見を尊重しながら、多様な意見について折り合いをつけ、納得解を見つける。	・集会に向けて、見通しをもち、準備する。	・クラブの一員として、より良い活動ができるように創意工夫する。	・学校の一員として、より良い集団活動にするために自他の良さを生かし、ともに協力し合いながら実践する。
主体的な態度 学びに向かう姿勢	・集団の過去をふり返り、未来を見据えて自分の願いを持って取り組もうとする。 ・学級の一員として、より良い話合いや集会を目指して、自分の役割を果たそうとする。 ・活動をふり返り、次の活動を改善しようとする。	・集会や委員会活動で経験したことをもとに、次の活動に生かそうとする。	・異学年に声を掛け合い、お互いの良さを認め、伝え合おうとする。 ・自分の良さに気づき、次の活動につなげようとする。	・異学年や過去の自分の姿と比べ、成長を実感しながら取り組もうとする。 ・学校の一員としての自覚を高め、人とのかかわり合いや、つながりを深めていこうとする。

本年度の研究の足跡（研究のあゆみ）

1．特別活動を軸にした取り組み

以下の図は、特別活動を軸にした時に他の領域との関係を図にしたものである。それぞれの領域で大切にしたい視点が特別活動の理念と共通していることを表している。



2．校内研究会、教科部会の予定

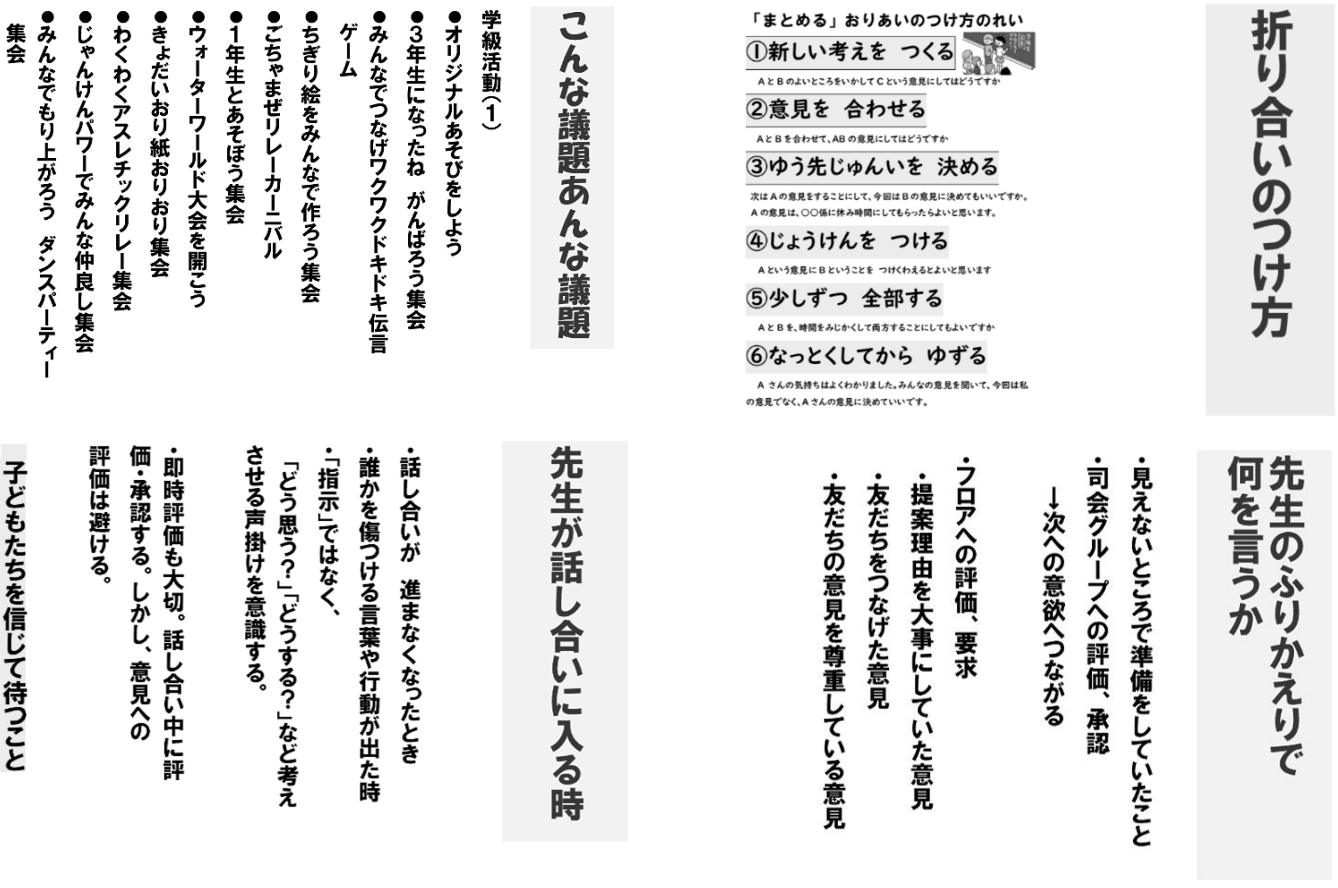
4月　7日　わくわく研修会〈学級活動と国語科〉
4月 22日　校内研究会〈子どもに身に付けさせたい力・研究テーマの検討〉
5月 11日　教科部会
5月 12日　特別活動　全校研究会　〈5年1組　学級活動(1)〉
　　事後研究会（講師：杉田先生）
5月 25日　校内研究会〈研究テーマの決定・校内推進計画について〉
6月　5日　国語科　全校研究会　〈4年1組　国語科「アップとルーズで伝える」〉
　　事後研究会（講師：吉川先生）
6月 24日　特別活動　全校研究会〈1年1組　学級活動（1)〉
　　校内研究会
　　〈各学級の取り組み、光明小でつけたい資質・能力表、事後研究会〉
6月 29日　教科部会
7月 22日　国語科　理論研究会〈文学教材の指導について〉（講師：吉川先生）
7月 23日　校内研究会〈1学期をふり返って(授業・委員会活動・集会活動など)〉
8月 26日　わくわく研修会〈2学期の学級開きについて〉（講師：富岡先生）
8月 31日　教科部会
9月 30日　校内研究会〈2学期の取り組みについて・公開研究会に向けて〉
10月　1日　校内研究会　〈2年1組　国語科「お手紙」〉（講師：富岡先生）

10月 2日　国語科　全校研究会〈2年1組　国語科「お手紙」〉
　　事後研究会（講師：吉川先生）
10月 21日　校内研究会〈1年1組　国語科「くじらぐも」〉（講師：富岡先生）
10月 26日　教科部会
10月 28日　校内研究会〈公開研究会に向けて　議題・単元検討〉
11月 4日　校内研究会〈3年1組国語科「ちいちゃんのかげおくり」〉
　　（講師：富岡先生）
11月 10日　校内研究会〈指導案検討〉（杉田先生、長期研修生によるオンライン研修）

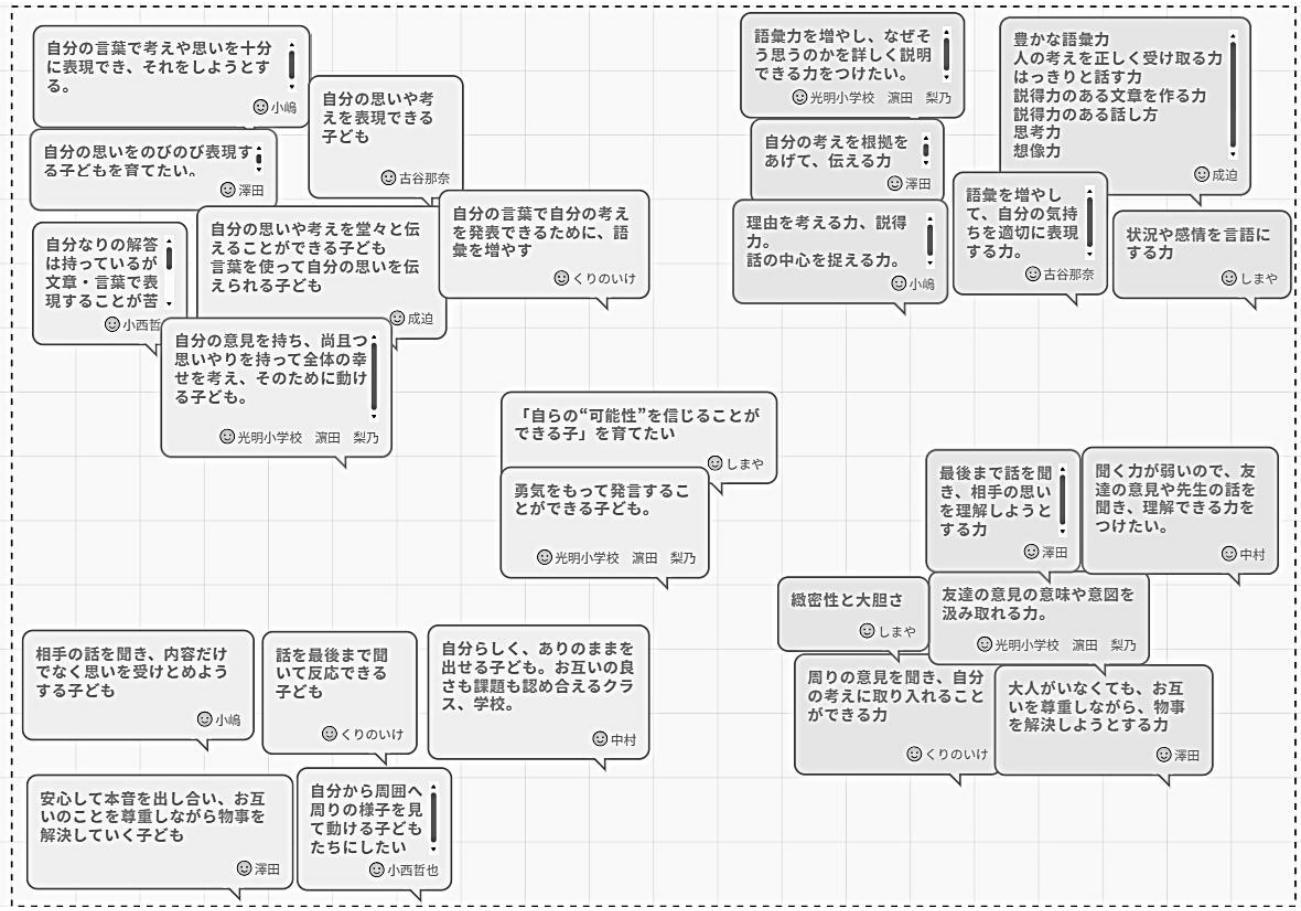
3．今年度の研究の取り組み

【わくわく研修会】

年度当初に「わくわく研修会」を実施した。本研修会の目的は2つある。1つ目は、新たに異動してきた教職員が特別活動への理解を深めるとともに、全教職員で特別活動、特に学級会の研究について共通理解を図ることである。2つ目は、国語科の研究を推進するに当たり、学習規律や国語科指導において大切にしたい視点を共有することである。特別活動の研修では、学級会オリエンテーションと模擬学級会を実施し、学級会の進め方や指導の在り方について理解を深めた。国語科の研修では、学習環境の整え方や学習規律の形成、国語科指導で大切にしたい考え方を中心に研修を行い、研究推進に向けた共通基盤づくりを図った。



【どんな子どもを育てたいか】



特別活動と国語科と両輪で研究するに当たって、研究テーマの再設定を図るために教職員で目指す子ども像を共有した。分類・整理をすると次のとおりである。

・自分の気持ち、意見を表現できる。
・他者の思いを受け止め、互いに認め合うことができる。
・豊かな語彙力を持ち、適切な言葉を用いて伝え合うことができる。
・相手の思いをしっかり聞き、受け入れることができる。

「思考を深める」ことについて協議した結果、学級会における「広げる」と「深める」の違いを意識することの重要性が確認された。「広げる」とは、子どもたちの意見をつなげながら多様な考えを共有していくことであり、「深める」とは、設定した観点に沿って考えや理由をより具体的に語り合うことである。また、国語科の学習においては、「いざなう」と「さそう」のように、言葉の使い方や意味の違いを比較しながら、伝えたい内容により適した表現を選択する過程そのものが思考の深化につながると考えた。さらに、豊かな語彙は自然に増えるものではなく、教師が意図的に指導し価値付けていくことが必要であるという意見も出された。加えて、自分の考えを交流し、他者の考えに触れながら見方や考え方を広げたり見直したりする姿も、思考を深める過程として捉えることができるということも共通理解した。

【具体性を持つ】

初回の全校研究会では、５年生担任が学級活動（3）の授業後、杉田先生から目標が理想やふわっとしたものに留まっていることが課題であるという助言をいただいた。

「勇気を持つ」「正しいことをする」だけでは具体的に何をするのかわからない。キーワードを絞り込み、「小さな声でも良いから思ったことを言う」というように、翌日から実施

できているか否かチェック可能な行動や方法まで具体的に落とし込む必要があることを確認した。
また授業の中で、児童が学級のことを考えているのか、自分自身のことを考えているのか混同される場面があったことも指摘された。
キャリア教育の視点では社会の中の自分の役割を考えつつ、最終的に自分はどう生きたいかという個人の意思決定が重要になる。なりたい自分は必ずしも他者に合わせる必要はなく、自分自身の幸せや自立に向けた目標であっても良いという視点が示された。

【個人に焦点を当てる】

特別活動の授業において、個人の学びに焦点を当てて授業をすることが提案された。しかし、個人の学びを捉えようとする際には、児童の反応に左右される面があり、教師が意図的に誘導したり、求める発言を引き出そうとしたりする見取りになってしまう危惧がある。そのため、まずは特別活動の授業において何を見取るのかという視点を明確にすることが重要である。授業者が設定したねらいに基づいて児童の姿を適切に評価できているか、さらに児童自身が自己の学びや成長を価値付けることができているかという点も、重要な評価の観点となる。
また、１時間の授業の中では必ずしも全ての児童が発言するわけではない。したがって、発言の量や回数だけで評価するのではなく、司会者、提案者、フロアの立場から話合いを支える児童など、それぞれの役割に応じて育てたい姿を設定し、その姿にどのように近付いているかを見取ることが求められる。特別活動における個人の学びは、多様な立場や関わり方の中で表出するものであり、それぞれの役割における成長を丁寧に捉える必要がある。
さらに、研究を進める上では、「個人に焦点を当てる」とは何を意味するのかを明確にする必要がある。すなわち、一時間の授業における学びや変容を見取ることを重視するのか、それとも年間を通した継続的な成長の過程を見取ることを重視するのかという視点である。特別活動における個人の学びの見取り方について検討を深めていくことが課題である。

【意見をつなげていく必要性と、提案理由を意識する重要性】

６月に実施した１年生の特別活動全校研究会事後研究会では、１年生の６月時点で、自分の考えに理由を付けて発言できる児童が多かったことが大いに評価された。一方、自分の考えを発表することはできていたが、一人一人の意見が独立しており、互いの考えをつなげながら話し合う姿ではなかった。授業では、教師が子供の発言を取り上げて「Ａさんが言っている仲良くなるってどんなこと？」と問うたことによって、子供たちが互いの意見を結び付けながら考える様子が見られた。このように問い返すことは、話し合いを深める有効な手立てであったため、まずは教師が互いの意見をつなげて考えると話し合いが深まることを子供たちに実感させることが重要であることを確認した。そして子供たちがそのようにかかわっていけるような力を育んでいくことを共有した。
また、様々な意見が出て整理をしていく際、提案理由に立ち返って考えることは１年生だけでは難しく、教師による意図的な働きかけが必要であった。Ｂさんがチームで仲良くなるしりとりについて話し合う中で「食べ物しりとりだったら、食べ物の名前が思いつかないから不安」と発言した場面でも、提案理由に沿って問い返したり、「どんな言葉なら思いつきそうか」と言葉を広げたりする支援があれば、さらに議論を深めることができたのではないかと話し合った。また同時に、１年生でなくても話し合いが進むにつれて思いが先行し、提案理由が忘れられがちになる様子も交流され、提案理由を意識させながら話し合いを進める重要性についても確認した。
今後は、子どもたちの意見を単に出し合うだけでなく、「なぜそう考えたのか」「その不安はどうすれば解決できるのか」といった問いを通して、子供の意見をつなげながら話し合いを進められるよう支援していく。また、提案理由に立ち返る力や、合意形成のために必要な考え方を、一つ一つ積み重ねながら育てていきたい。

【児童会行事、児童集会のふりかえりと共有】

今年度は新たな取組として、児童集会や児童会行事終了後に、教員によるふり返りを研究会等で行うこととした。これまで児童集会や児童会行事は、各委員会や学年の児童が中心となって企画・運営を進めており、実施後には委員会ごとにふり返りを行ってきた。しかし、児童主体で実施している集会や行事について、教員が時間を設けてふり返る機会は少なかった。しかし、子供が取り組んだことについてどうだったのかをきちんと返すことは子供の意欲につながること、また分かった改善点は即時的に子供と共有することが、子供の力を育むことにつながる。そこで、全教員で成果や課題を交流し、改善点を多面的に検討して児童への指導や助言が必要な点を明確にし、今後の活動の充実につなげることを目的に、教員によるふり返りを実施することとした。こうしたふり返りを積み重ねることで、児童の主体的な活動をより効果的に支援していく。

（例）

１年生を迎える会のふり返り

①内容について

・光明太鼓を始める前に「なぜ演奏するのか」「光明太鼓はどういうものなのか」など、一言１年生にメッセージがあっても良かった。
・光明レンジャーはとても楽しい雰囲気で子どもが堂々とやりきる姿が良かった。
・光明レンジャーが１年生から見えにくい場所でパフォーマンスしていた。誰に一番伝えるのか、相手意識を持って発表することを意識させていきたい。とても気持ちの良い発表だっただけに、残念だった。
・１年生を迎える会でレクリエーションしているのを見るのは初めてだったが、班の中で交流が生まれるので素敵な会だと感じた。
・全校で１年生を迎え入れようという雰囲気が良かった。

②子ども同士の関わり（子どもの評価したいポイント、共有したい出来事）

・６年Ａさん　１年生に声をかける姿
・３年Ｂさん　静かにしてという声かけを自分からしていた

③子どもたちの話し方、聞き方

・６年生が主体となって各学年に声をかけ、並べる姿が良かった。
・始まる前の体育館の雰囲気作りは必要と感じた。
・声掛けをしながら、"今は聞くとき"と意識できていた。
・年度初めの集会にも関わらず、自分たちで聞こうとする姿勢を作ることができていた。

④代表児童のふり返り

１年　みんなと遊べて楽しかったです。今日みんなと一緒にがんばりました。
２年　２年生になって集会が久しぶりだった。１年前を思い出して元気になった。集会をやってくれた人もみんなに楽しんでほしいなと思ってやってくれた。
３年　班の人とちょっとでも仲を深められたので良かった。
４年　仲が深まったから良かったと思いました。
５年　自分の班の１年だけでなく新しく班のメンバーといっぱい話したり、交流したりできたので、これからもこういう集会を通して仲良くなりたい。
６年　良かったところは、みんななかよし委員会が工夫をたくさん考えられているなと思ったし、１年生は元気一杯歌って踊っていたので、そこが良かったなと思います。

⑤教師（永樂先生）からのふり返り

○みんなの聞き方、拍手の送り方が良かった。目を向けて聞いていた。思いやりのある聞き方ができていた。
○新しいアイデアを生み出していくことにチャレンジしよう。
○誰かが頑張っていたら、一生懸命聞くのは当たり前。「静かにして」という声かけがなくても静かに聞ける仲間を目指そう。何のために集会をするのか、そのために自分は何を頑張ろうと思うのかを考えよう。

【ふり返りの指導について】

本校では、ふり返り活動を教育活動の重要な柱として位置付けている。それは、自分や集団の考え方や活動の様子を見つめ直し、その価値を認識することを通して、自分や友達の良さに気付くことができるからである。こうしたふり返りを継続することで、児童は自分自身や集団の成長や変化を実感できるようになる。

ふり返り活動は、学級会での話合いや集会活動、児童会活動、学校行事などの特別活動全般に加え、各教科の学習においても実践している。特に全校集会や児童集会後には、各学年の代表児童と教員が全校生の前でふり返りを発表する場を設けている。また、ふり返りは「きらきらファイル（キャリアノート）」に記録し、一つ一つの活動を点で終わらせるのではなく、年間をつなぐ学びの記録として蓄積している。これにより、自らの成長をふり返りながら自己有用感や自己肯定感を育むことを目指している。

本年度は、集会活動への参加前に「どのようなめあてをもって活動に参加するのか」を明確にする事前指導に重点を置いた。めあてを意識して活動に臨むことで、自分の考えをもちやすくなり、発言に自信のない児童もふり返りを発表しやすくなると考える。また、発言の機会が少なかった児童への声掛けや、ふり返りの表現方法についての支援を行うことで、より多くの児童が主体的に発表できる場を保障し、自分たちで行事や集会をつくり上げていくという当事者意識を持てるようにしていきたい。

【夏季　特別活動　校内研修会を受けて】

学校全体で

○委員会活動で子どもたちの良さが発揮できるように、指導していく。全員で役割分担を考え、特定の児童に負担が偏らないようにする。

○児童集会

・何のために集会をするのかという集会の目的を、各学級で確認して、心構えを作る。ただ参加するだけでなく、何を学べたか感想を持てるようにする。

・自分事として一人一人が考えを持ち、ふり返るために縦割り班の中で近くの児童とふり返りをする時間を取る。学年の代表が言う前に、グループ内でふり返りをする。

○授業の中で（各教科、各領域）

①一人一人の話す聞く時間を確保し、経験を積ませるために、ペアと小グループ、班の話合いをできるだけ授業に取り入れる。

②相手意識を持って声を出すために、音読詩集などを活用して、お腹から声を出す練習をしていく。

③話し方、聞き方のモデルを示す。
光明小学校の「話し方かきくけこ」「聞き方かきくけこ」を作成し、光明小学校の話し方、聞き方モデルを示す。相手意識を持った話し方、聞き方の定着をねらう。

各学級で

○子ども同士をつなげる言葉のモデルを示し、使えるようにしていく。どの教科でも「つなげる」ことを意識させる。
「～さんとちがって」「～さんと同じで」「～さんにつけたしで」
「～さんとここは同じですが、～はちがいます。わけは～」

○楽しみながら語彙を増やす活動に取り組む。

○学級会では、提案者の願いをできるだけ明確に言語化し、子どもたちと共有する。わからないことは質問し合い、何のためにどのような活動をしたいのかについて掘り下げて聞く。

○「こんな○年生になりたい」個人の年間目標を見直す。１学期をふり返り、学級の目指したい姿と照らし合わせて２学期の目標を考える。

4．言葉を増やし、言葉にこだわり、思考を深める子ども

本年度は、これまで研究を行ってきた「特別活動と教科等との往還」の中でも教科を国語科に設定し、児童の語彙を増やし、言葉にこだわり、まわりの人と話し合うことで深く思考ができる子どもを育てることを目指した。国語科については、教科部会を中心に実践交流や議論を重ねた。

【教科部会の資料】

教科部会　　４月

Ⅰ．第１回集会のふり返り（特別活動の視点・国語科の視点）

① 縦割り班での子どもの様子

・子ども同士の関わり（各学年の役割）

・目的に合う自己紹介

・話す・聞く

・ふり返り

② １年生を迎える会につなげる

【ねらい】

・入学した１年生と全校生が対面し、光明小学校の仲間として楽しく活動する。

・今年度最初の児童集会として、全校生が力を合わせる。

・縦割り班のメンバーの顔と名前を覚える。

【プログラム】

・ 入場　②はじめの言葉　③レクリエーション　④光明太鼓　⑤１年生から

⑥ふりかえり　⑦終わりの言葉　　⑧退場

＜各学級で＞

① 事前指導（各学年の役割・かかわり・話す聞く等）

② 事後のふり返りの内容（次につなげるふり返りを）

２．特別活動と国語科の往還　（光村図書系統表より）

３．国語科の授業づくり（吉川芳則先生の研修より）

・理論研まとめ

・「批判的に読む　とは」　三省堂　中学校教科書より

４．年間計画

・この月にこの内容や教材を学習したい

教科部会　５月

Ⅰ．１年生を迎える会のふりかえり（特別活動の視点・国語科の視点）

◇子ども同士の関わり

◇話す・聞く

◇ふり返り

◇各学級での取り組み（事前・事後指導）

◇折り鶴集会の様子

２．説明文の学習（各学年５月教材）

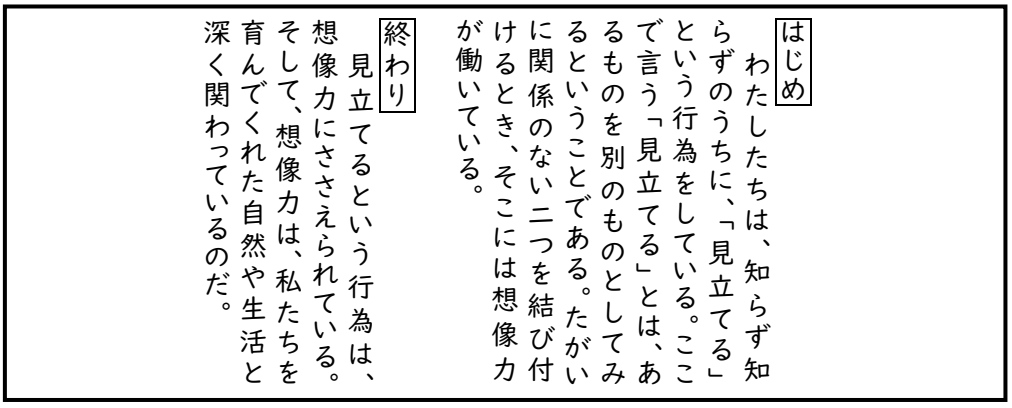
１年　「つぼみ」（６月教材）

２年　「たんぽぽのちえ」

３年　「文様」「こまを楽しむ」

４年　「思いやりのデザイン」「アップとルーズで伝える」
５年　「見立てる」「言葉の意味が分かること」
６年　「笑うから楽しい」「時計の時間と心の時間」

① 光村図書の特徴　「あなたは、どう考えるか」　自分の考えをもつ
②要旨のまとめ方
・はじめと終わりに着目する。（頭括型・尾括型・双括型）
・題名に使われている言葉に着目する。※色分けして○で囲む。
・繰り返される言葉に着目する。
・強調された語尾を見つける。　「～だ。」「～なのだ。」「～である。」



③ 「見立てる」「言葉の意味が分かること」（５年）
要旨に対する自分の考え（フォトカードで筆者の主張と自分の考えを区別する。）
※筆者がどんな人かを知る。身近に感じ、主張を受け取る。
※筆者や作者の紹介は、指導書に載っています。
野口廣…「日本あやとり協会」の設立・運営に尽力し、世界のあやとり文化を日本に紹介した。現在、「国際あやとり協会」顧問として、世界のあやとりの普及活動を続ける。
今泉忠明…動物学者。専門は哺乳動物学。哺乳類の分類、生態、行動についての調査を進める。

３．家庭学習ノートの取り組み
・進め方
・内容（めあて・日付・時間・振り返りを丁寧に）
・内容の質を上げる
・塾や習い事に行かない児童にとって大切な学習の機会
・夏休み中の育成会児童の学習

４．多読の取り組み
多読を取り入れた単元計画（並行読書）
並行読書マトリックス表

５．年間計画　　この月にこの内容や教材を学習したい
２年生（２学期「お手紙」）

教科部会　　６月
Ⅰ　クラブ活動決め集会のふりかえり（特別活動の視点・国語科の視点）
◇子ども同士の関わり
◇話す・聞く
◇ふり返り
◇各学級での取り組み（事前・事後指導）

2　平和集会のふり返り（特別活動の視点・国語科の視点）
◇話す・聞く
◇ふり返り
◇各学級での取り組み（事前・事後指導）

3　読書の取り組みについて　　「本は友達」（7月教材）

1年	昔話を選んで読む（2学期） 【むかしばなしをよもう「おかゆのおなべ」】
2年	お気に入りの本を紹介する 【お気に入りの本をしょうかいしよう「ミリーのすてきなぼうし」】
3年	さまざまな種類の本を読む 【本で知ったことをクイズにしよう「鳥になったきょうりゅうの話」】
4年	本の読み方について考える 【本のポップや帯をつくろう「神様の階段」】
5年	作家に着目して読み広げる 【作家で広げるわたしたちの読書「モモ」】
6年	読書を通して自分の考えを広げ深める 【私と本「星空を届けたい」】

4　2学期の予定
　9月　2年生「お手紙」

教科部会　8月
1．2年生　全校研究授業「お手紙」　指導案検討

2．光村図書デジタル教科書の活用について
【デジタル教科書　3種類】
　・指導者用　　・学習者用　　・学習者用＋教材
【活用の仕方】

① 「道具」





② 「学ぶ」



必要な部分のみ、他学年のものも見られます。

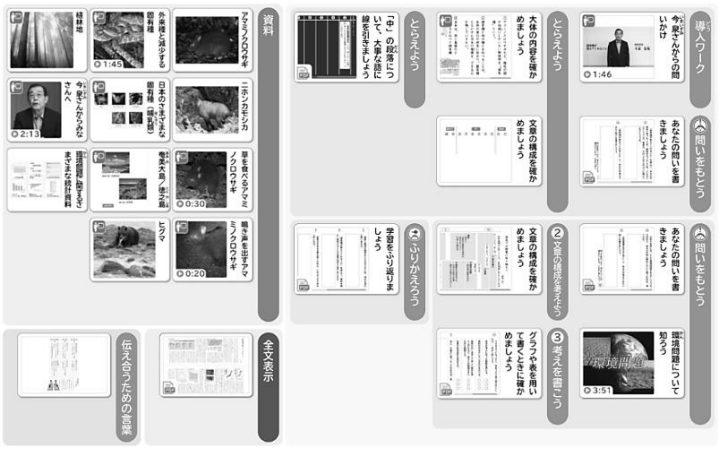
◇漢字　

漢字の読み・筆順等　の練習に　（速さや問題の選択可能）

◇ワーク　

筆者による動画・写真・黒板等

筆者のお話や説明文に出てくる動物等の動画が見られるので、読みを深める手助けになります。



③ Ｔサポート等の機能



◇ワークシート
◇漢字プリントメーカー（宿題やテスト用に必要な部分のみ作成可能）
◇指導案
◇漢字力だめし
◇全文表示

教科書で学習した必要な部分のみを選んでプリントやテストを作成することができ、大変便利です。

④挿絵　　必要な挿絵の印刷が可



デジタル教科書には、便利な機能がたくさんあります。
全学年のものを系統的に示してくれるので、子どもが、前学年の学びをふり返りながら学習することができます。
単元ごとに内容を調べて、活用してみてください。

教科部会 10月

1.「『鳥獣戯画』を読む」より「書く」指導について
①筆者（高畑勲さん）を知る。
②「『鳥獣戯画』を読む」を読んで高畑さんの書き方の工夫を見つける。

工夫を見つける視点
・「論の展開の仕方」
・「表現の工夫」
・「絵の示し方の工夫」 等書き方や提示の仕方の工夫

③鳥獣戯画　甲乙丙丁巻を見て、自分が選んだ場面の解説文を書く。
甲巻…実在する動物
乙巻…実在する動物と空想上の動物
丙巻…人間の遊びや勝負事・動物の擬人画
丁巻…人間の勝負事や行事

○鳥獣戯画のレプリカ（甲・乙）を見て、自分が着目した部分について200字程度で解説文を書く。
○絵の中の「どの部分」を取り上げ、何に着目し、どのような評価をするか考えながら見る。
・どの部分…蛙・兎・猿などの動物、草木、水等。
・何に着目するか…形・大きさ・色・動き・格好・表情・筆さばき・濃淡・線の太さ等
・どのような評価をするか…見事だ、素晴らしい、おもしろいなど
○事実と感想（評価）を明確にして書かせる。
○筆者の書き方の工夫について読み取ったことを生かし、200字程度で解説文を書かせる。
○「言葉の宝箱」も活用する。　学級で考えた評価語彙の活用

◇下の絵を見て、評価語彙を出し合う。→(過去の実践で)児童が考えた評価語彙を見る。
例）◎絵全体に対して　・迫力がある
・勢いが感じられる
・絵の世界に入りこむ　等
◎色　・色が想像できる　等
◎たとえ　・まるで～～のようだ
◎伝わってくること　・丁寧に描かれた中に激しさが伝わる
◇200字程度で解説文を書く。（評価語彙を入れ、工夫して）

【夏季　国語科　理論研修会】（講師：吉川先生）

1．指導の基本

学年を超えた共通の基盤を積み上げることが大切である。
特に「読むこと」と「書くこと」は切り離さず、互いに補完し合う関係として捉える。

「書くために読む」と「読むために書く」

●**書くために読む**：特定の目的（例：各場面にタイトルをつける、人物の台詞を想像する）を持って本文を読み直す活動。これにより、漫然とした読書から、細部を注視する精読へと変化する。
●**読むために書く**：理解を深めるために、線引き、丸囲み、視写、あるいは語間に自分の解釈を書き込む活動。

場面の構造化とタイトル付け

作品を場面ごとに区切り、直感的にタイトルを付ける活動は、児童の読解の方向性を確認する上で有効である。
●**タイトルの分類**：作戦名に注目したタイトル（例：「うなぎつり針作戦」）、人物の呼称に注目したタイトル（例：「がんの英雄」）、あるいは呼びかけ型など、多様な表現を許容することで、児童の関心を高める。
●**再構成のプロセス**：読解が進んだ後に再度タイトルを検討させることで、作品に対する理解の変化を自覚させる。

2．教材の構造分析：視点と描写

作品を深く読み解くための鍵として、「語り手」と「描写の種類」の２点が挙げられる。

語り手による視点の限定

光村図書に掲載されている本作は、冒頭に「前書き」部分があり、聞き手としての「私」が登場する。そのため、物語本編は三人称で進行する。（他の教科書会社には「前書き」が掲載されていない場合が ある。その場合、子どもが「私」を大造じいさんだと理解することになる。世界観が大きく異なる。）

●**大造じいさんへの寄り添い**：語り手は大造じいさんの心情や思考（「いまいましく思っていました」等）を語るが、対象人物である「残雪」の内面は直接語られない。

●**指導上の留意点**：叙述にない残雪の心情を問うことは、文学的な正確さを欠く恐れがある。残雪については、その「行動」や「様子」の描写から、大造じいさんがどのように感じたか、という視点で分析していく。

描写からイメージするには

以下の４つの描写を区別し、児童が頭の中で具体的な像（イメージ）を描けるように指導する。言葉から具体的にイメージする力を育てる。イメージを語ることが出来ないのは、表現力の弱さ。友だちと読み方を交流して、様々な読み方を知ることで、より大造じいさんをより深く捉えることが出来る。

描写の種類	内容	指導のポイント
行動描写	動作や行為を表す	どのような動きをしているか具体化させる
様子描写	表情や状態、副詞的な表現	「にっこりと」「ぐったりと」等のニュアンスを検討する
心情描写	直接的な感情表現	「わくわく」「強い心を打たれ」等の背景を探る
象徴（情景）描写	景色や色彩によるメタファー	「真っ赤に燃えて」「青く澄んだ空」が示す内面的な意味

3．クライマックス場面の精読　～残雪と大造じいさんの関係性の変化に着目できるように～

物語の終盤、ハヤブサとの闘いから残雪が解放される場面は、本作のクライマックスである。ここでは、言葉の一つ一つが持つ重みを理解することが求められる。

残雪の描写と「威厳」

残雪が死の間際に見せる態度は、単なるがんの習性を超えた「英雄」としての描写がなされている。

●**叙述の分析**：「残りの力を振り絞って」「ぐっと長い首を持ち上げた」「睨みつけた」といった行動描写から、残雪が保とうとした「統領としての威厳」を読み取る。

●**語彙の深掘り**：「ぐったり」という言葉一つに対しても、「元気がなさそう」「起き上がれない」「息も絶え絶え」といった類義語を検討することで、イメージを明確化させる。

大造じいさんの変容

初めは罠で残雪を捕らえようとしていた大造じいさんが、最終的に残雪を「英雄」と認め、残雪を空に放つに至る心理的変化を追う。

●**行動の解釈**：銃を下ろす、手を伸ばすといった動作を、児童が「片手か両手か」「どのようなスピードか」まで想像を広げることで、じいさんの敬意や戸惑いを具体化する。

●**内面的な対決**：「ただの鳥に対しているような気がしませんでした」という一節から、じいさんが残雪を対等な「宿敵」あるいは「尊敬すべき存在」へと認識を改めたことに気づかせる。

4．現代の教育現場における課題と展望

●**映像メディアの限界**：DVD 等の映像は一つの完成された解釈を提示してしまう。これに対し、文学は文字という「静止した情報」の間を、自らの想像力で埋める作業が必要である。

●**学校教育の役割**：国語科の授業は、多様なイメージを交流させ、他者の読みを参考にしながら自分なりの像を作り上げる場である。

●**表現力の育成**：心情を問う際に「どんな気持ちか」と問うと、できる子は答えられるがそうでない子は難しい。いきなり心情を問うのではなく、行動や様子の描写からイメージし、「心の中で何と呟いたか（吹き出し作成）」といった具体的な言語化を促すことで、より実感的な理解へと導く。

5．重要な知見・考察

●**色彩の役割**：本作には「赤（真っ赤に燃えて、紅に染めて）」「青（青く澄んだ空）」「白（白い羽毛、白い花）」といった色彩表現が多用されており、これらが大造じいさんの情熱や決意、あるいは残雪の清廉さを象徴している。

●**比較による精読**：「真っ赤に燃えて」を「真っ赤になって」に置き換えてみるなど、語の微細な違いを比較させることで、作者がその言葉を選んだ意図（内面の高ぶり等）に気づかせることができる。

●**評価への活用**：叙述に即してイメージを再構成し、キーワードを指定して 200 字程度の文章にまとめさせる活動は、全国学力・学習状況調査等の問題形式にも対応する、実戦的な表現力育成につながる。

特別支援教育

【特別支援教育と特別活動】

特別支援教育の考え方



・担任の「気づき」が全ての出発点となる。子供の多くは、自身の困り感をうまく表現できないことが多いため、学力面や生活面のどこでつまずいているのかを身近な存在である担任が気づくことが重要である。
・そのため、教師が多様な視点で子供を見立てる力が必要となる。
・教科学習だけではなく、子どもの成長において、社会のルールを理解し社会を生き抜くスキルを身につけることが不可欠であることも、特別な支援が必要な子供たちの特徴と言えよう。
・そのため本校では、担任一人で抱え込まない協力体制やシステム作りを大切にしている。複数の視点できめ細かなアセスメントをすることで、表面化している行動だけではなくその背景を読み取り、背景に応じた学習を展開する。

コミュニケーション能力の向上に向けて

コミュニケーション能力の向上を目指した学習は、子どものつまずきがどこにあるのか、それらがどのように絡んでいるのかを把握することから始まる。その上で、子どもたちに何をどのように獲得させるのかという目標と方法を明確にし、評価基準を設定することが大切である。それに加え、コミュニケーションは楽しく学ぶことで向上するものであり、子どもに話したいという意欲を持たせることが効果を高める。そのために、かかわる大人は「よい聞き手」となることが重要であることは言う間でもない。大人のコミュニケーション感度の高さが求められるということである。

多くの特別支援教育において、このようなコミュニケーション能力を高める学びは、ソーシャルスキルトレーニングとして実施されることが多い。しかし本校は特別活動に取り組んでいることから、子供が仲間と相談をすること、小さな意見でも軽んじない風土が学級や学校にある。これは、特別支援教育を必要とする子供たちにとって、大きな強みである。

リフレーミングを取り入れる



特別支援教育では、児童の特性や発達段階を考慮し、ニーズに合った指導法を考えたり教材を準備したりしていかなければならない。

日々の指導をふり返ってみると、教師主導で授業を進めていることが多い。発達に課題を抱えている児童が主体的に学び、学校生活を送っていくために、教師自身の見方を変えることも必要である。例えば、作業がゆっくりな児童には「丁寧にしているね」「努力しているね」という声かけをし、納得いくまでさせることが成長を促す場合がある。また一斉指導でなかなか指示が入らない児童がいた場合は、教師の指導の工夫が求められる。このような視点で、授業に取り入れた内容は以下のとおりである。

・小さなことを褒める。
・即時評価（タイミングよく）
・互いの存在を認め合う集団づくり
・児童の発達に見合った授業づくり

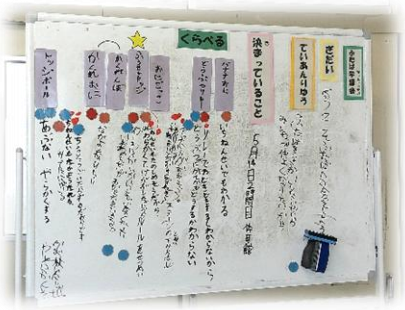
＋

・小さいスパンで進め参加させる。
・ねらいを自分たちのものにする。
・授業のゴールを見える化する
・ペアトーク→発言→賞賛
・さりげない支援
（特別支援の子への配慮を全員に）

以上の取り組みから見えてきた特別支援学級の児童の姿は以下のとおりである。

【支持的風土の中で見られる特別支援学級（ふたば）の児童への関わり】

一人一人が大切にされる風土



・一人の意見をみんなで聞き、何が言いたいのか理解しようとする。
・ふたばの子が委員会活動で役割が担えるよう、できることをみんなで考える。
・ふたばの子が個別学習でがんばっていることをみんなで共有する。
・学校行事に向けての練習を、ふたばの仲間で一緒に取り組む。

活躍の場が保障される風土

・ふたばの子ならではの発想が、係活動で展開される。
・ふたばの子も児童集会で活躍する。（司会・始めの言葉・終わりの言葉・ふり返りなど）
・ふたばの集会を全校児童に呼びかける。

【児童の成長の姿】



・ふたばの会で、話合い活動をすることができる。
　低学年の意見を大切にする高学年の姿。
　積極的に司会の仕事を果たす姿。
　自分の考えを伝えようと板書で説明する姿。

・話合い活動で決まったことを実践することができる。
　楽しんで集会活動に参加することができる。
　役割を果たすことができる。
　自分たちの取り組みを全校生に呼びかけることができる。

・児童会集会や委員会活動、クラブ活動に参加することができる。
　楽しんで集会活動に参加することができる。
　役割を果たすことができる。
　全校生の前でふり返りを言うことができる。

・教科学習では、自分の持っている力を発揮することができる。
　自分の考えを積極的に説明しようとする姿。
　様々な表現活動（作文・俳句など）で、自由に表現しようとする姿。
　友だちの意見に耳を傾ける姿。

・学校行事に向けて努力することができる。
　進んで練習することができる。
　準備に熱心に取り組むことができる。

人権教育

人権は、「人々が生存と自由を確保し、それぞれの幸福を追求する権利」※1と定義されている。人権尊重の理念を児童にわかりやすい言葉で表すと「自分の大切さとともに他の人の大切さを認める」ということができる。※2「特別活動を軸にした取り組み」（P.14 ）にある「違いを認め合う考え方」につながっていく考え方である。違いを認めるとは、一人一人が大切にしていることを聞き合い、尊重し合うことである。特別活動への取り組みの中で、児童の聞き合い、尊重し合う意識が高まってきていると感じている。

学級活動、特に学級活動(1)では、意見を出し合ったり比べ合ったりしながら話し合い、意見の違いや多様性を認め合い、折り合いをつけて合意形成していく。お互いの意見の良さを活かしながら決めていくことを大切にしている。わからないまま参加している児童がいる場合は立ち止まって、みんなで確認していく。誰一人取り残さないことを意識することが人権意識の高まりにつながっていく。

児童会活動やクラブ活動、学校行事では、異学年と交流することで相手の立場に立って考えることの大切さに気付くことができる。上級生は下級生を思いやって取り組み方を考え、下級生は上級生の姿を見て自分もあのような上級生になりたいなと自分の目指す姿をイメージすることができる。

※1「人権擁護推進審議会答申（平成 11 年)」文部科学省

※2「人権教育の指導方法等の在り方について［第３次とりまとめ]」文部科学省

○児童の姿から

集会、委員会活動やクラブ活動での異学年交流の場では、高学年が中心となって、下級生をリードしている。集中して参加できない児童がいても、誰かが必ず温かく声を掛け、その児童がつらくならない形で優しく参加を促している。そのような高学年の姿を見て、次の学年が同じように接しようとしている。こうして、困っている児童、つらい思いをしている児童を放っておかない校風を創りあげてきている。

しかし、その反面、日常の中で、同じ学級の友だちに対して、心を傷つけるような言動をすることや、仲間外れをしたりすることが、しばしばある。誰であっても人権が脅かされるようなことはあってはならない。低学年から、「自分を大切にすること」「友だちを大切にすること」とはどのようなことなのか、教師が、いじめにつながる芽を見逃さないで機会あるごとに立ち止まらせ、児童とともに考え一緒に解決していくことを積み上げていく必要がある。「豊かな人権感覚を身につけ、未来を切り拓く子どもの育成」を目指していくためには、まず教師が誰一人取り残さない意識を持つことを忘れないようにしたい。

「人権・同和教育推進計画　～令和８年度（2026 年度）～」から抜粋

学校教育目標

互いにかかわり合い　高め合う　光明っ子の育成

～自主・自律・情愛～

人権・同和教育目標

豊かな人権感覚を身につけ、未来を切り拓く子どもの育成

○　地域社会に生きる一人として、相手の気持ちや立場を尊重し、自分で考え判断し、行動できる子ども

○　違いを認め合い、共に生きていこうとする子ども

○　身の回りの不合理や矛盾に気づき、解消に向けて主体的に行動できる子ども

取り組みの重点

（2）人間尊重の精神を基盤として、確かな人権意識と人間関係を育てる。

①道徳の授業を通して、差別や偏見の誤りに気づかせるとともに、それらを解消するための心情を養い、道徳的実践力を培う。また、自分らしさを大切に、他者を認め、互いの考えを尊重しあう中で自尊感情を育て、豊かな人間関係を築くことにより、人間としてのよりよい生き方に気づかせる。

○　人権学習…共感をもった授業を通して、差別を許さない、差別は許せないという意識や自覚を根付かせていく。固定観念にとらわれず、偏見に縛られず、物事を多面的に見る力を養う。実体験や聞き取り、参加体験型授業を取り入れながら、様々な人権課題に取り組む。

・同和（部落問題）	・障がい者福祉	・高齢者福祉	・平和・国際理解（多文化共生）
・男女共生	・命、健康	・ジェンダー	

○　仲間づくり…豊かな人間関係が築けるよう、違いを認め合う関係づくりを目指す。様々な個性を持つ人との出会いや交流を通して、他者との違いに気づき、相手のよさや長所に目を向けられるようにする。相手の気持ちに寄り添い、共に力を合わせて課題解決を目指すことで、自他を大切にする仲間づくりをしていく。

②各教科の学習を大切に、特別活動及び全領域で関連をもって取り組む。基礎基本の充実を図り、体験的な活動を重視する中で、学ぶ楽しさやわかる喜びを味わう。さらに、仲間と共に豊かな人間関係を育みながら自己表現力を培う。

今年度重点を置いて取り組んだこと

昨年度に人権・同和参観を「道徳（人権）参観 懇談」という名称にした。保護者と児童が共に考える場面をできるだけ取り入れ、地域で人権について考える授業とした。夏季休業中の道徳（人権）参観研修会では、講師の春川先生にご指導していただき、各学年の授業内容について共通理解をした。

【今年度取り扱った資料】

第１学年「だれのをさきにしようかな」　　第４学年「くらんど人権文化センター」
第２学年「およげないりすさん」　　第５学年「町の石ひ」
第３学年「橋」　　第６学年「百日稼ぎ」

【夏の研修会で共通理解した事柄】

(1)子どもと教職員が互いの命と人権を守る (子どもと教職員・子ども同士・教職員同士)

(2)不安を取り除き、安心・希望・元気の学級・学校にしていく

(3)自他を大切にした授業づくり・学級づくり　「9 つのキーポイント」を教職員が力を合わせて実践する。

キーポイント１　人権教育の４つの柱（人権としての教育、人権についての教育、人権のための教育、人権を大切にした教育）を認識する

キーポイント２　１人の中に２人(共感すべきところと要求すべきところ)を見る

キーポイント３　ルーティン化と良い学習環境で子どもの人権を守る

キーポイント４　人権を大切にした学習規律を子どもと創る

キーポイント５　「指導的評価活動(良さをほめて)」で学習規律を定着させる

キーポイント６　「学習の流れ」を掲示し、見通しと安心の UD の授業をする

キーポイント７　「ペア・グループの活用」で、主体的・対話的な学びを創る

キーポイント８　「板書計画」を立て、反応予想・ピックアップを見通す

キーポイント９　人権を大切にした「保護者対応」を実践する

２　本年度
研究の取組



学級のあゆみ





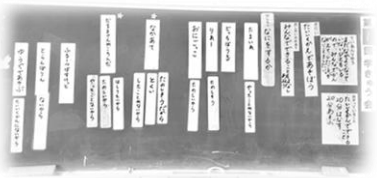
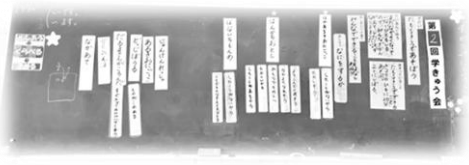
１年１組　学級活動・国語科学習

学級目標　『勇気をもって、チャレンジ！』

【１学期】

入学当初の子供たちは、自分の意見を持って全体の前で発表したり、最後まで自分の言葉で言い切ったりすることに難しさが見られた。そこで、まずは日常の基本となる話し方や聞き方の丁寧な指導に徹底して取り組んできた。特に国語科の指導では、毎日の音読を通して大きなお腹からの発声を心がけさせるとともに、正しい姿勢や口の開き方にも着目しながら継続して指導を行ってきた。

１学期の初めに行った、「教室でできる遊びを考えよう」「体育館でできる遊びを考えよう」「多目的室でできる遊びを考えよう」という議題での学級会では、子供たちなりに進んで意見を出し合い、友達の意見に耳を傾ける様子が見られた。「この場所ならどのような遊びができるか」「みんなが仲良くなるためにはどうすればよいか」といった活動の目的や視点をしっかりと焦点化しながら話し合う姿が見られた。しかし、集会では、チーム分けをしていなくてその場で困ってしまったり、分け方が見た目で分からず混乱してしまったりと、集会が始まってからその場で話し合うこともあった。その都度、「次はチームをきちんと決めてから集会をしよう。」「見て分かるように赤白帽子をかぶろう。」などとふり返りをし、次の集会に繋がるようにした。


６月末の学級会では、「チームでしよう！しりとり集会」という議題の学級会をした。しりとり集会の話し合いでは、提案理由を意識した意見は様々出たものの、友達の意見に繋げて自分の意見を言うことが難しく、話し合いの繋がりがあまり見られなかった。また、話し合いの内容が少し難しくなったことで、以前より手を挙げる児童が少なかった。ふり返りでは、次の学級会では、友達の意見を聞き、それと自分の意見を比べたり、それに対して質問をしたりしながら自分の意見を発表できるよう指導した。その後の集会では、前回の反省を踏まえ、事前にチームを考え、時間設定等をルール説明に組み込んで取り組むことができた。しかし、細かいルールまで決められていない部分があり、そこは教師が中に入り、その場で話し合いの時間を設けたので、次回の集会に向けての課題が明確になった。



国語科「大きなかぶ」では、音読劇に取り組んだ。動作化するところや読み方を工夫するところ、衣装に関して、役割ごとや班ごとの中で意見を交流する時間を設け、自分たちでどんな劇にするかを考えさせ、話し合わせた。少人数で話し合い、自分の意見を発言する機会をたくさん作るようにした。



【２学期】

国語科「くじらぐも」では、１学期に引き続き音読学習に力を入れた。「おおきなかぶ」のように単元の最後にまとめとして劇をするのではなく、今回は毎時間の場面ごとに音読劇に取り組んだ。グループのメンバーを毎回変えることで、様々な友達と話し合ったり意見を交換したりしながら音読劇を発表し、学級全体で前に立って表現する機会を増やすことができた。学級会では、クラスの仲が深まってきたことから、「さらに盛り上がり、楽しい遊びを通して絆を深めたい」という提案理由のもと、「仮装パーティー集会」を行った。集会の実施にあたり児童からは、「せっかく仮装するのでクラス内だけでなく学校全体を歩きたい」という意見が出たため、各階を巡って折り紙で作ったお菓子を交換し合う活動や、教室での宝探しゲームを実施した。お菓子交換は大いに盛り上がり、宝探しではチームで協力して取り組むことで児童同士の絆をさらに深めることができた。一方で、「なぜ仮装をするのか」「仮装をして行う価値がある活動か」という本質的な目的についての深まりのある話し合いには至らなかった。



今後の話合いでは、それをすることによって、なぜ提案者の思いを汲むことができるのか、めあてが達成できるのかというところに焦点を当てて話合いを進めたい。

２年１組　学級活動・国語科学習

学級目標 『きょうりょく！ちょうせん！めざせ　なかよしマックス２年生』

　学級活動では、自分の意見をみんなに伝えること、仲間の思いをしっかり受け止められるように聞くことを大切にし、「まとめる」で、できるだけ多くの人の思いを大切にして合意形成していくこと、合意形成するには様々な方法があることを伝えてきた。しかし「まとめる」では、自分たちで決めることが難しく、合意形成の場面では、教師の助けが必要な場面がある。少しずつ自分たちで決める力を育てていきたい。仲間に思いを届け、仲間の思いを受け止めるための話す、聞く力について国語科を中心に鍛えていく。

【1 学期】

４月　学級が楽しくなるかかりをきめよう

教師が司会となり、学級会の進め方を確かめながら話し合った。

５月　みんなでつくろう　オリジナルおにごっこしゅう会

司会グループの児童と教師が一緒に進行した。苦手な人に楽しんでもらいたい、転入生に名前を覚えてもらいたいという願いからの提案であった。おにごっこの基本的なルールは決めておき、名前を覚えてもらうために「どんなくふうをするのか」について話し合った。タッチされたら自己紹介をするという工夫を考え、実践した。

学級目標をきめよう

学級の課題とどんな学級にしたいかを全員に発表させ、意見を分類整理することで学級としての目指す姿を共有した。全員の願いが「協力」「挑戦」「仲良し」という言葉に集約することで合意形成を図り、「きょうりょく！ちょうせん！めざせ　なかよしマックス２年生」に決まった。友だちと力を合わせて取り組むことをがんばり自分から行動するのが苦手だから挑戦していくことを大事にして、ただのなかよしではなく、なかよしマックスになれることを目指す。

６月　たのしくやろう　なかよしドッチボールしゅう会

投げるのが苦手な人が多いから、みんながえがおになれるドッチボールをして楽しみたいという願いからの提案であった。「えがおになれる＝もう１回やりたい」と捉え、何のためにするのか目的がはっきりした。集会では投げていない子を探したり、苦手な子にボールを譲ったりする姿が見られ、「もう１回やりたいと思えたから大成功した。」とふり返る児童もいた。

７月　一学きのおわりにみんなであそぼうしゅう会

全員が意見を持つことをねらい、「何をするか」について話し合った。

国語科の学習

朝の会のスピーチ

２文で話す練習している。「聞き手を意識した話し方」と「目と耳と心で聴く」を継続して指導している。質問を考えながら聞くことを意識させている。

ふり返り

観点（学んだこと、改善したいこと、次に活かしたいこと）を示して、自分の変容や友だちの良さに気づけるようにした。観点にそって具体的に書いている児童のふり返りを紹介することで、書く量が増え、友だちの良さや自分の成長に目を向けることができるようになってきた。

【2 学期】

９月　２学きのかかりをきめよう



１学期に活動できていなかった係があり、学級のために活躍できる係を考えることにした。提案理由にある「活躍できる」という言葉に着目して意見を比べながら発言できた児童がいた。提案理由をより具体的にすることで、自分にとって、みんなにとって、より良い意見について考えられるようにしていきたい。

10 月　じゃんけん大会をしよう（ミニ集会）

教師が司会を務め、話合いながら集会を実践するミニ集会の形で行った。提案者からじゃんけん大会のイメージを引き出し、仲を深めるためにどんな工夫をすればよいかについて、じゃんけんをした人と好きな物を言い合う、勝った人は好きな物、負けた人は苦手な物を伝えるなど、相手のことをより多く知ることができる工夫を考えることができた。提案者のイメージの共有とより多くの人の意見を活かしながら合意形成することの大切さをみんなで確かめることができた。

お手紙（国語科）

アーノルド・ローベルの「ふたりは～」シリーズを読み、お話紹介カード作成を学習のまとめに設定し、２人の関係を読み深めることを中心に読解を進めた。「大急ぎ」「親友」「窓をのぞく」などの言葉から登場人物の心情を想像することを積み重ね、自分の感想や気づきを友だちに伝え合った。

３年１組　学級活動・国語科学習

学級目標『超ウルトラスーパー３年生』

３年生は、司会グループを中心に話合いを進められるように計画委員会で十分に話し合うこと、より多くの人の意見が生かされるように合意形成することを目指す。集会を通してどのような学級をつくっていくのかを話合いと集会の前に確かめ、前回の課題を次の学級会で解決できるようにつながりを意識して議題を選定する。

【1 学期】

4 月　学級目標をきめよう



児童の安心感を基盤とした学級づくりを目指し、学級目標の設定と５つの具体行動に取り組もうとする気持ちを高めた。担任の司会のもと、学級の現状と課題を整理し、「どんな学級にしたいか」を議論する中で、児童の願いが「安心」という概念に集約された。「安心」という言葉には、ただ居心地が良いだけでなく、学級のみんなで協力や成長するということも発言された。その実現に向けた具体的な指標として ５ つの約束「くつをそろえる」「自分からあいさつ」「しずかに移動」「声の出し方」「友だちを大切に」を設定した。

5 月　国語科学習　「こまを楽しむ」

「こまを楽しむ」は、三段構成が明確であり事例が並列に配置されている。そのため、一人一人の発見や問いを学級全体に提示し、整理・比較する「学級での学び」を展開する上で非常に適した教材である。そのため、個々の児童が文章に書かれた情報を読み取るだけでなく、文章の全体構造や筆者の工夫を学級全体で意見交流しながら見つけ、共に読み解く学びをおこなった。

個人が読み取ったことを思考ツール（マトリクス表）に集約し、「どこに共通点があるか」「なぜこの順番で書かれているのか」を全体で質問し合って考えた。意見交流を通して、一人では気付きにくい筆者の表現の工夫や文章全体の魅力に学級全体で到達する学習を目指した。仲間が読み取った言葉を比べながら考えると、「どの段落も同じパターン（つくり×楽しみ）で書かれている」という構造的な特徴に気付くことができた。また、「事例の順番を入れ替えたらどうなるか」と学級全体に問い、小グループや全体での議論を促した。こうした取組により、児童が「友達の発言によって自分の読みが深まった」と実感できる学びが実現した。

7 月　１学期がんばったね！集会



自分たちで工夫した遊びを通して、学級のきずなを深め、２学期へ向けて「みんなでがんばろう」という意欲をもたせるために本議題を選定した。

１ 学期の学習や生活を学期末にふり返り、学級全員で成長を実感した。単なるお楽しみ会ではなく、各教科の授業内容を遊びのルールに組み込むことで、「こんなこともできるようになった」「みんなで熱心に勉強したな」という学びの価値に気付くことができた。

【2 学期】

9 月　１学期のかかりを見直して、学級が楽しくなるかかりを考えよう

１ 学期に係を決めて活動を開始したものの、児童が自発的に動く場面は少なく、担任からの声かけや促しによって活動が進むという受働的な姿が多く見られた。２学期は「係の決め方」を見直すと同時に、活動を視覚化して自主的に進められる「計画ボード」を導入した。自分たちで目的を明確にし、見通しを持って活動を進める手立てを講じることで、主体的な意識を高めることができた。 決め方の工夫によりスタート段階から目的意識が生まれ、１ 学期に見られた、担任の促しを待つ姿勢が大きく改善された。自ら計画ボードに予定を書き込み、見通しを持って行動する姿が日常的に見られるようになった。学級を良くするという共通理解のもとで係が発足したため、係内での協力はもちろん、他の係との連携など、協働的なかかわりが増えた。今後は、活動の実行にとどまらず、内容の工夫や質の向上に目を向けられるような評価・フィードバックの工夫をおこなう。

４年１組　学級活動・国語科学習

【１学期】

４月　朝の音読で口形に気を付け、はっきりと話そう

口形に気を付け、大きな声で堂々と話すことを目標に、朝の会に「朝の音読」を取り入れ、主に詩の音読を行った。全員で読む、ペアで読む、班で読む等、形態を工夫し、声を出すことに慣れることから始めた。１学期末には、声を出すことにも慣れ、少しずつではあるが、声を出せる児童が増えてきた。

４月　こんな４年生になりたい

委員会活動が始まり、高学年としての役割が増え、意識を高めた新学期であった。一人一人に「こんな４年生になりたい」という目標を持たせた。また、４月の学習と生活の目標を決め、一人一人が自分の目標を常に意識しながら学習に取り組めるようにした。

５月　４月の自分をふり返って

４月に立てた目標を一人一人がふり返り、次の自分につなげられるようにした。委員会活動に意欲的に取り組んだ児童、学習に前向きになった児童等、それぞれに伸びた部分は違うが、少しずつではあるが、力をつけてきた様子が伝わった。職員研修で特別活動における児童交流をした際には、進んでカレンダー作りをする児童の姿、委員会活動で作ったクイズを意欲的に紹介しようとする児童の姿、話し合い活動で意見を出す児童の姿等、具体的な児童の頑張りや変化の交流ができた。一方、活動に参加できていない児童の様子を聞き、２学期以降の課題も明確になった。

５・６月　集会に参加した後に感想を伝える

１学期はたくさんの集会があった。集会に参加した後のふり返りの時間に、手を挙げて自分の考えを伝えようとする児童が少ないことが課題だと感じた。集会に参加しながら、必ず自分の考えを持つことや考えながら活動をすることを伝え、集会後には、学級でふり返りの時間を設け、一人一人がその時間に感じたことや考えたこと、次の集会につなげたいこと等をふり返り、それを共有するようにした。

５月　国語科学習　「アップとルーズで伝える」

筆者の主張を読み取り、主張に対する自分の考えを書く学習を設定した。本単元では、段落相互の関係や書き方の工夫に着目しながら問いに対する答えや筆者の主張を読む力、筆者の主張に対する自分の考えを書く力をつけることをねらいとした。説得力を持たせるために、対比を用いることの効果、文章と写真を対応させた書きぶりや、説明の順序性について考えること、双括型の文章構成等、筆者の書き方の工夫も考えさせた。筆者の主張に対する自分の考えを書く力を育てるために、まず、主張に対して、納得や共感をしたのか、疑問をもったのか等、自分の立場を明確にさせた。納得や共感、疑問点について、その理由を明確にしながら自分の考えを分かりやすく書くようにした。本単元では、批判的読みを学習の中に取り入れ、７段落の必要性について考えさせた。授業の中では、自分の考えをもち、それをペアや班で交流し、自分の考えを広げ深める話合い活動を取り入れた。本単元では、批判的読みという新たな説明文の読み方を学習したので、２学期以降の説明文の読みにつなげていく。また、語彙を増やす取り組みも仕組んだ。国語科でつけた力を、学級活動等の話合い活動に活かしていきたい。

【２学期】１０月・１１月　学校統合 最高学年６年生に向けて､４年生の私のめあて

１年半後の学校統合を見据え、４年生の自分が何をしていくべきか、学級のめあてと、自分のめあてを一人一人に持たせていくことから始めた。「学校統合に向けて、４年生でどんな学級を作りたいのか」を話合わせ、そのめあてに向けて自分のめあてを決めさせた。その際、１学期に行った「学級活動や児童会活動のふり返りのアンケート」「言葉に関するアンケート」のふり返りを各自が行い、自分自身と学級を見つめさせた。みんなで学校を作るためには、現在、光明小学校で行っている集会への参加の仕方を見直させた。例えば、受け身になって集会に参加しているのではないか、自分事としてふり返りをしているのか、みんなのことを考えて集会の中で自分の役割を考えて行動することができているか等、細かい点をふり返らせるようにした。委員会活動への参加の仕方、掃除や当番活動への取り組み、授業に向かう姿勢等、具体的に自分自身を見つめることが大切だと考えた。アンケート結果を客観的に見つめ、分析することで、自分や学級の課題を明確にすること、保護者や教師から見た４年生の良さや課題等、客観的な資料も自分たちを見つめる大切な材料にした。多くの情報をもとに自分自身を見つめ、学校統合に向け、今の自分に必要な力を考え、目標を立てるようにした。

５年１組　学級活動・国語科学習

学級目標　　『勇気 100%　考動する５年生』

【1 学期】

４月　５年生になって

５年生になり、「今の自分」の良さや課題を見つけ、５年生として「なりたい自分」を決めて、取り組んでいくことを意思決定し、１ 年間目標をもって過ごせるように考えた。高学年になり学級だけではなく、少人数で行う委員会活動でも責任を持って取り組む機会が増えてくる。学級や学校という集団の中で自分の良さを生かすために何を意識するかを明確にする良い機会となった。

自然学校のリーダーと仲良くなろう集会

自然学校で共に活動するリーダーと絆を深め、より充実した自然学校にしたいという思いから話し合った集会である。簡単な遊びの中で自己紹介をするのではなく、「名前を呼ぶ機会を増やしたい」という思いで話合いを重ねた。その結果、自分たちの名前をリーダーが一生懸命覚えようとする様子を見て、仲良くなれそうだという思いをもった。一方で、話し合いの最初の段階では既存の遊びの枠にとどまることが多く、自分たちで内容をより良くするまでに時間がかかり、多様な意見が出にくいという課題が残った。

５月　自然学校思い出集会

お世話になったリーダーへ感謝を伝えたいという思いから、自然学校の最終日に話合いをし、集会を行った。４月の集会と同様、当初は話合いを深めることが難しかった。話合いを継続する中で「思い出の場所はリーダー毎に違うから、施設の探検を取り入れよう」「リーダーから特定のキーワードを引き出すゲームをしよう」という具体策が出された。集団での対話によって発想は豊かになりつつあったが、互いの意見をつなげたりさらに深く議論を進めたりする点には、なお課題が見られた。

６月　みんなで協力わいわいクラフト集会

自然学校を経て、仲間と協力して取り組むことをより一層意識してできるようになった。困っている人やどうしたら良いか迷っている人にはすぐに手を差し伸べることができる。一方で一人一人の発想力や考えを合わせることはできていなかった。そこでみんなの発想力を生かして、一つの物をつくりあげたいという思いから話合いをした。本当に作ることができるのか、うまくいかないのではないかと心配な意見が多く出た。１つ１つ具体的に考えて、解決しながら話合いを進めることができた。集会では、「想像の動物」を面白い発想で作り上げた。

国語科学習　「言葉の意味が分かること」

筆者の主張を読み取り、主張に対する自分の考え(納得か、疑問があるか)を書く学習を設定した。そのためには、要旨を捉える必要があり、筆者の主張を読み取る力が必要になる。筆者が一番伝えたいことを読み取り、それを受けて、自分の考えを書くことに取り組んだ。感想を書くだけではなく、筆者の考えのどこに納得したのか、どのような点に疑問を感じたのか明確にし、筆者の考えとつなげて自分の考えを書くことで、学級会でも友達の考えにつなげて意見を伝えられるようにしていった。

７月　１学期をふり返ろう集会

１ 学期は自然学校をはじめ、多くの行事にみんなで取り組んだ。自分たちの頑張りや取り組みをよりたくさん想起して１ 学期を終えたいという思いで話し合った。様々なアイデアが出たが、イメージが共有できず意見が中々まとまらなかった。実際にやってみたり、質問したりしながら意見をまとめていった。みんなで俳句を詠んで思い出し、たくさんの思い出のキーワードから「一番楽しかったこと」や「一番大変だったこと」を選んで班で語り合った。同じ行事でも人によって受け止め方が違い、様々な思いをふり返る集会になった。しかし、一部の発表者によって話合いが進むことが多かった。それぞれの形で話合いに参加しみんなでより良い集会をつくることには、課題がある。

【2 学期】

９月　国語科学習「どちらを選びますか」

２つの立場に分かれて、それぞれが意見を主張し、質疑応答をしたことを受けて意見を述べる討論を行った。相手の主張と違いを明確にして話したり、相手の意見をより理解するために質問したりすることで、互いの意見を深めながら話すことができた。

10 月　２学期誕生日お祝い集会

中々お祝いができていなかった誕生日の人たちをお祝いしたいという思いから話し合った。より良いお祝いの仕方を考え、質問したり、つけ足したりしながら、意見をつなげてみんなの考えや思いを聞きながら話合いを進めることができた。集会では、それぞれが工夫しながら贈り物を作った。

6年1組　学級活動・国語科学習

本学級では、学級目標「ピンチはチャ・チャ・チャ（チャンス・チャレンジ・チャンピオン）」を学級経営の中核に据え、学級活動（1）における話合い活動の充実を目指してきた。互いの良さや違いを認め合い、安心して自分の考えを表現できる支持的風土の醸成を大切にしながら、自分たちの生活上の課題を自分たちで解決しようとする自治的能力の育成に取り組んでいる。

本年度は、意見を単に比較して選択するのではなく、互いの意見をつなげながら新たな考えを創り出す「創造型」の話合いを目指してきた。その出発点として大切にしたのが、国語科における「聞く」という視点である。相手の話をただ聞くだけでなく、相手が安心して本音や思いを出せる関係をつくり、発言の背景にある考えや願いまで受け止めることを重視した。安心して話せる関係があってこそ、互いの意見をつなげ、考えを深めることができると考えた。

そこで、「つなげる」ための技術として、「広げる」と「深める」の2つの視点を児童と共有した。「広げる」は、友だちの意見に対して自分の考えを次々と出していく「意見の壁あて」であり、多様な意見に触れることで考えの選択肢を増やす段階である。一方、「深める」は、質問や具体化、理由の掘り下げなどを通して互いの考えを発展させる「意見のキャッチボール」である。相手の発言を受け止め、自分の考えを加えたり、疑問を投げかけたりすることで、意見をつなぎ、新たな考えを創り出すことを目指している。こうした取組を通して、人間関係形成を図るとともに、互いの考えを尊重しながら折り合いを付ける合意形成の力を育んでいる。

1学期は、議題「どんなクラブ活動を作るか考えよう」に取り組んだ。実際に参加する4・5年生の立場に立ち、どのようなクラブ活動が必要かを考えることで、自分たちの希望だけでなく、相手の思いや願いを想像する他者意識を大切にした。また、活動を行うために何を決める必要があるのかを出し合い、話合いの柱を自分たちで設定することにも取り組んだ。

2学期は、議題「体育館で安心・安全 めっちゃかくれんぼ集会」「1年生とみんなでわいわい おにごっこ集会」に取り組んだ。これまで経験してきた遊びをそのまま行うのではなく、活動の目的や参加する相手に応じてルールや遊び方を工夫し、新たな活動を創り出すことを目指した。「めっちゃかくれんぼ集会」では、体育館で安全に楽しむことに加え、最後まで勝敗が分からない工夫として、チーム対抗のポイント制を考案した。隠れていたチームだけでなく、見つけたチームにもポイントが入る仕組みにすることで、どのチームにも勝つチャンスが生まれるルールを創り出した。参加する全員が楽しめるよう、活動の目的に応じて既存の遊びを発展させる姿が見られた。

「1年生とみんなでわいわい おにごっこ集会」では、1年生と6年生がペアになり、互いの仲を深めることを目指した。氷鬼を取り入れ、6年生が1年生を、1年生が6年生を助けるルールを考えた。さらに、助ける際に相手のことをより深く知るため、名刺やサインを交換してはどうかという意見も出された。相手の思いや願いを想像し、互いを知るための工夫を考えることは、他者意識を高め、人間関係形成の力を育むことにつながった。

一方、学級会の進め方には課題があった。児童は学級会に苦手意識をもっており、その理由として、45分間で話合いが終わらないことや、司会の進行が難しいことなどが挙げられた。そこで、全員が安心して参加し、互いの意見をつなげられるよう、進め方を見直した。当初は司会を置かず、フロアにいる副司会2人が話合いをファシリテートする形を試みた。しかし、話合い全体の流れを把握し、意見をつなげながら進行することは難しかった。そこで、司会と副司会の役割を一体化し、2人が協力して進行する形へと改善した。児童の実態に応じて話合いの方法そのものを見直すことも、自治的能力の育成につながると考えた。

これらの実践を通して、児童は自分の意見を出すだけでなく、友だちの発言を受け止め、考えを広げたり深めたりすることの大切さに気付き始めている。また、活動の目的や参加する相手を意識して話し合うことは、社会参画の意識を高め、自分たちの学級や学校生活をより良くしようとする姿につながっている。一方で、45分間で話合いをまとめることや、互いの意見を十分に深く受け止めて合意形成を図ることには、引き続き課題がある。今後も、国語科の「聞く」学習との関連を図りながら、相手が安心して本音を伝えられる支持的風土を基盤に、一人一人が参画し、互いの意見をつなげながら、より良い学級生活を創り出す学級会を目指していきたい。

ふたば　学級活動




【1 学期】

4・5 月　**ようこそふたばへの会**

今年度は 1 年生 1 名、6 年生 2 名の新しい仲間が増え、ふたば学級はみんなで 21 人となった。高学年にとっては毎年恒例の集会となっているが、「今年も新しい友達にふたば学級のことを紹介したい」「新しく仲間入りした友達と仲良くなりたい」という思いからこの議題が生まれた。みんなで楽しんで仲良くなるためにはどんな集会にしたら良いのか 2 年生以上の学年で話し合い、「風船バレー」「だるまさんがころんだ」「こおりおに」の 3 つのゲームをすることにした。低学年の友達が風船に触りやすくなる工夫を考えたり、走るのが苦手な友達がこおりおにを楽しむことができる工夫を考えたり、自分が楽しいだけではなく、みんなが楽しい時間を過ごすためにはどんなルールが良いのかについて、話し合うことができた。



この集会をすることがみんな待ち遠しく、わくわくしながら当日は体育館に集合した。高学年の児童は司会やルール説明をわかりやすく進めることができ、低学年の児童はゲームを楽しみながら集中して話を聞く様子も伺えた。最後に高学年の児童から「低学年の友達が楽しんでくれてうれしかった。」というふり返りもあった。



6・7 月　**みんなの名前を覚えよう　ドッジボール集会**

ふたば学級の人数も多くなり、全員で活動することが少なくなってしまっている。そのため友達の名前を覚えていない児童も多いので、みんなの名前を覚えて、さらに仲を深めようという思いから議題を設定した。



一人の意見からみんなの意見へと広がり、チーム分けも高学年を中心にして話し合って決めることができた。名前を覚えるための工夫を考えるのは難しかったが、みんなの仲を深めることができたのは良かった。

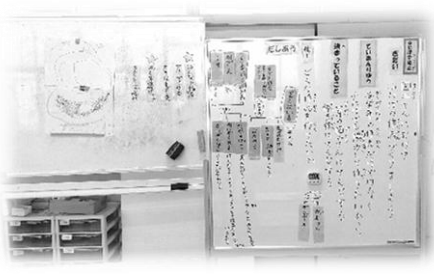
【2 学期】

9 月～　**図工展にむけてふたばの作品作りをしよう**

1 月に開催される光明小学校にとって最後の図工展に向けて、「ぼうけん宝島」をテーマにふたば学級ではどんな作品を作りたいのか話し合った。「宝島を作りたい。」「宝箱を作りたい。」「海賊帽子を作りたい。」など、児童からは様々な意見が出された。それぞれの児童のイメージを具体化するために実際にお宝を作って友達に見せたり、宝島の地図を描いて説明したり、どうすれば友達に自分の思いが伝わるのか考えながら発表する姿が見られた。



まだ図工展に向けて時間があるので、個人で作るのか、グループで作るのか、何を作るのか、みんなで話し合いながら思い出に残る作品を作らせていきたい。


特別活動
学級活動指導案

全校研究会　５年１組　１年１組

一人一授業　２年１組　３年１組
４年１組　６年１組
ふたば（特別支援学級）



【全校研究会】

第５学年１組　学級活動(３)指導案

2026 年５月１２日(火)5 校時
児童数 28 名
指導者　小嶋　宏典

１　題材　　５年生になって
（ア　現在や将来に希望や目標をもって生きる意欲や態度の形成)

２　題材選定の理由

○ 本学級の児童は、互いの個性を理解しており、困っている友達がいると助けることができる。共に活動するときは、協力して取り組み、遊ぶときは、みんなで楽しく遊ぶことができる。学級に対して良い印象を持っている児童が多い。一方で、課題として、忘れ物が多かったり、時間に遅れたりすることがある。また、発言が偏ったり、正しいことを伝えても、納得してもらえなかったりする。学級の集団としてよい人間関係が形成されているが、自分自身の良さや課題を客観的に見て、集団の一員として生かそうとしたり、改善しようとしたりする児童は多くはない。

○　本題材は、「今の自分」のよさや課題を客観的に見出し、５年生として「なりたい自分」を見定め、「今の自分」が取り組んでいくことを意思決定することにより、今年度、さらにはその先の将来に向けて希望や目標をもって生きようとする態度が育成されると考え、設定したものである。また、高学年になり学級だけではなく、少人数で行う委員会活動でも責任を持って取り組む機会が増えてくる。学級や学校といった所属する集団の中で自分の良さを生かすことができる場面はどこか、見つめ直す良い機会となると考える。

○　指導にあたっては、事前にアンケートを行い、今の学級の良さや課題について共有をする。客観的にそれぞれが見た学級の課題から自分が一年間意識して取り組むことを意思決定していく。また、学校教育目標や担任の願いについても確認し、なりたい自分について考える。より様々な視点で考えられるように友達の意見を共有し、それも踏まえて自分が意識して取り組むことを意思決定できるようにしていく。曖昧な目標にならないように実現できる目標になっているか、できたかどうかを確かめられる目標になっているかを確認し実行する意欲を高められるようにする。最後にお互いが意思決定したことを共有することで、お互いの頑張りを認め合い、高め合えるようにしていく。実施期間が長いため、事後の活動では、１か月に１回程度ふり返りの場面を設定し、どの程度達成できているかを確認しながら、継続して意識できる目標にしていく。

３　目指す子どもの姿

・自分に合った目標を立て、自己の良さを生かす姿
・意思決定したことに粘り強く取り組み、努力する姿

４　評価規準

より良い生活を築くための 知識・技能	集団や社会の形成者としての 思考・判断・表現	主体的に生活や人間関係を より良くしようとする態度
学校や学級といった所属している集団の中で、自己の良さを生かしながら、自己実現を図るための行動を理解している。	学校や学級の課題、願いを認識し、友達の考えも取り入れながら自分にできることを見つけて意思決定し、実践している。	今後の生活に見通しを持ち、より良い学校、学級づくりを目指して主体的に行動しようとしている。

５　事前の活動

日時	児童の活動	指導上の留意点・支援
４月 10 日 （金） きらきらタイム	それぞれの児童から見た「今の学級の様子」、「もっとよくしていきたいところ」についてアンケートに答える。	アンケートに答えることで、今までの学校、学級の生活について具体的にふり返り、今後の見通しをもてるようにする。
４月 16 日(木) 特別活動	アンケートの内容を学級で共有する。	アンケートの内容を共有することで、学級の課題を客観的に確認できるようにする。

6　本時のねらい

これからの学級や学校生活に希望や目標をもち、自分なりのめあてをもって学校生活をおくることができるようにする。

7　教師の指導計画

児童の活動	指導上の留意点・支援	目指す児童の姿 【評価の観点】（評価方法）
つかむ アンケートの結果から、課題をつかむ。 ・明るく、元気に過ごせている。 ・仲良く協力することができている。 ・自分で忘れ物がないようにしたい。 ・時間を見て行動できていないことがある。 ・もっとみんなの声が聞きたい。 ・正しいことが伝わるようにしたい。	つかむ ・アンケート結果や前時で共有したことをもとに学級の良さや課題を共有して、それぞれが課題意識をもてるようにする。	【主】アンケート結果や友達の発言と、自分のふり返りを比べて、課題をつかもうとしている。（観察）
さぐる どんな学級､学校を目指したいか考える。 ・時間を大切にできる。 ・誰でも勇気を出して、同じくらい発言ができる。 ・委員会や縦割り班で、自分で考えて行動している。	さぐる 「なりたい自分」を考える見通しとなるように、所属する集団の目標を共有できるようにする。	
見つける どんな５年生になっていたいか考える ・自分で時間を確認して行動できる５年生になりたい。 ・自分から発表できる 5 年生になりたい。 ・正しいことを相手に伝えられるようにする。 ・友達の話をよく聞けるようにする。	見つける ・グループや全体で交流しながら、多くの考えが出るようにする。 ・具体的な取組方法が出せるよう助言する。 ・出た意見を板書で分類整理し、自己決定につながるようにする。	【思・判・表】 なりたい自分の姿について具体的に考え、話し合っている。 （発言・ワークシート）
決める 自分にできることを決める。 ・何が大切かを考えて、今やることをきめる。 ・声をかけてもらう前に自分で時計を見て行動する。 ・低学年のお手本になるために。自分から考えて行動したり､発言したりする。	決める ・継続して取り組める方法かどうか、考えるよう助言する。 ・意思決定したことを交流し、目標を定めた児童を称賛する。	【知・技】 より良い学級、学校生活になるために自分の目標を設定し、自分にできることを理解している。 （ワークシート）
教師の話を聞く。	広い視野で考え、自己決定したことを価値づける。	
授業をふり返る。	今後どのような思いを持って学級、学校で生活をするのか意思表示を引き出し、意欲を高める。	【主】 今後どのような願いを持って取り組むのか具体的に考えようとしている。 （発言）

8　事後の活動

日時	児童の活動	指導上の留意点・支援	目指す児童の姿 【評価の観点】（評価方法）
5 月 29 日(金) 6 月 26 日(金) 7 月 10 日(金) きらきらタイム	自分の立てた目標や実践について振り返る。	事後に実践を振り返る機会を設定し、継続した実践になるようにしたり、必要に応じて、新たにめあてを立て取り組んだりすることができるように助言する。	意思決定した目標に粘り強く取り組み、これからの自分に必要なことを適切に判断しながら、進んで実践している。

第５学年 特別活動 全校研究会 事後研究会記録

１．授業者より

学級活動３を行った。
学年の始めなので、自分の目標をたてた。学級、学校の一員としての目標を意識した。
前時に共有もしていた。もともとつながりはできている。子どもたち同士は良い関係ができている。
学級活動１を中心に取り組んできたが、学級活動３でどんなことを取り組んでいったらよいのか。
できていない→どう取り組んでいくのか
妥当な目標だったのか。

２．討議

●子どもの姿について

・グループの話合いでは、子どもたちが生き生きしていた。自然と話ができている。
・子どもたちは、友達の理由を聞こうとしていた。
・思いはあるが、意識して取り組むことを具体的に書けている子とそうでない子がいた。
キーワードを絞っても良かったかもしれない。
・具体的な自分の姿を考えながら発表できていた。
・グループでの話し合いで変容した児童もいた。
「面白くて元気」→「一つ一つ目標をクリアしていく」
・子どもたちのうなずき、つぶやきに注目した。
・「勇気を出してみんなに「いいね」と言う」ことを目標に掲げていた子が、「もう言えているよ」と周りの子に言われていた。自分の感じる自分の課題と、周囲から見た場合の差をどう扱っていけば良いか。
・課題と良さがあるが、どちらに注目するか子どもによって違っていた。
・自分の思いについてずっと考えていた子もいれば、キーワードに着目している子もいた。
・主体的な５年生であるが、なりたい自分はもうすでにクリアしていると思う。この５年生だからこそ、自分たちもリーダーになれるような目標を立てさせたい。もう一つ上の学級を目指す。

●授業について

・児童が意見を出した後、授業者は「なぜ」を大事にしていたが、すぐに聞くことができていなかった。すぐに聞けると良かった。
・丁寧に授業を進められていた。子どもたちも理解していた。
・分かりづらい発言を教師が聞き返していたのが、良かった。

●特別活動のスキル、進め方について

・中学でも学級活動３をよく行っている。
・「つかむ」「さぐる」「みつける」は、色々な授業で使える。
・意見の分類をする。出したものを短冊に書いて分けると板書が分かりやすくなる。
・学級会での板書の方法　縦書きか横書きか。今後検討していく。
・「みんなで考えたことを自分の目標にしていく」ので良いのではないか。
・自分の考えを共有した後、子どもの意見は変わった方が良いのか変わらなくても良いのか？変容したら深まっていることになるのか。
・子どもの変容をどう捉えるのか、今後の課題にしたい。
・今の時点で考えた「自分の目標」なので、長い目で見て、年間を通して変容すれば良いのではないか。

３．全校の授業を参観した長期研修生より

（２年生）　当事者意識と納得を意識した授業だった。
おにごっこをしながら学級会をしていたのが斬新だった。
（６年生）　「活動内容」が多く語られていた。
合意にかかわった発言が多かった。子どもたちで進められていた。
（３年生）　子どもたち同士の会話が自然だった。
ペアから全体へ広がっていた。

（１年生）　子どもたちの発言の中でも、理由のあった発言を分類した。
　　みんなのことを考えた発言が多かった。
　　発言のつながり率が高い。ふり返りもつながっていた。
（４年生）　国語科の授業。人物像にせまる内容だった。
　　ことばの宝箱を用い、語彙を広げていた。→学級会にも生きる内容だと感じた。
（ふたば）　みんなのことを考えた発言が多かった。
　　１年生のことを考えている。

４．杉田先生より
先日まで、ヨルダンに行っていた。ヨルダンは戦闘激しい中だが、日本式の特活をはじめている。
エジプトでも、１１年間特活を進めている。世界に広がっている。
子どもたちは、「学級会は何のためにやっているのか」答えられる。
「みんなにとって良いものを決めたい」という気持ちがある。
イスラムに書かれていることが特活につながっている面もある。集団の中で生きている。

学活２，３は欧米向き。異年齢交流をおこなって６年生がふり返る中で、学活２，３の力をつけていく。
日本は「集団」と「個人」の狭間にある。
学校という場は、本来子ども主権になっていない。多様な子どもたちが、しんどくなる。
３５万人の不登校児童をどうするのか。
そうした中で、困っている隣りの子を大切にするのが学級づくりである。
一部の子どもだけが楽しい学習から、障害のある子も楽しめる一体的な教育を目指す。
学級活動（１）では、民主的で持続可能な社会の創り手を育む。
学級活動（２）（３）は、自らの人生を舵取りする力を育む。
特に学級活動（３）は、「なぜ学ぶのか」「生きることは何か」を問う学び。キャリアパスポートも使う。
良いクラスになるための私になっているのか問いつつ、「自分のために生きる」という意識を育む。
世の中に出た時、どんなことができる子どもにしたいのかという大人の願いも反映しつつ、なりたい自分は自分で決める。自分らしい自分を追求する学びとしていく。
そういう取り組みを通して、みんながんばれるようにしているのが、光明小。

「言語能力を伸ばす」も研究するそうだが、それで特活の力も伸びるのかは、分からない。
そのように考えた／思った理由を語らせる。思いを伝えさせることが大事。
そうしていくと自ずから、どの教科でもセンテンスが長く話せるようになる。
教科等で身に付けた力（自立、意思決定、相手意識・公平、合意と協議）を特別活動で活かす。
学校目標、学級目標は「子」のためにある。　個人の目標は、方法まで自分で決めさせる。
失敗しても良い。失敗から学ぶ。
文科省が言っている「深い学び」とは、そうした学び方を教えること。
学びに向かう集団をどう作っていくか。
集団づくりと言っても、個人に視点が当たっているかが大事。
３人ぐらいで授業が回っているようではダメ。全員が参加しているという意識を持たせる。
参加しているというのは、喋らない子が絶対喋るようにすることとは違う。それは難しい。
話し合いは、競争ではない。競い合うことが目的ではない。

【全校研究会】

第１学年１組　学級活動（１）指導案

2026 年 6 月 24 日（水）3 校時
児童数 25 名
指導者　濵田　梨乃

１　議題　　チームでしよう！しりとり集会
（ア　学級や学校における生活上の諸問題の解決）

２　議題選定の理由

〇本学級の児童は、学級会での話合い活動に対して非常に意欲的であり、互いの意見を聴き合いながら合意形成を図ろうとする姿が見られる。また、話合いの中で疑問や違和感を抱いた際には、物怖じせずに声を上げ、よりよい方向へ修正しようとする主体性も育ってきている。

一方で、これまでの経験や知っていることの枠組みに捉われがちであり、自分なりの新しい発想や斬新なアイデアを思い付いていても、今まで取り組んだことがないことへの不安や表現への迷いから、全体の前で積極的に発信することには苦手意識を感じている様子が見られる。

〇本議題は、「ひらがなを全部習ったので、みんなでしりとりをして、もっと仲良くなりたい」という児童の願いから生まれたものである。本来は個人で競い合う要素の強いしりとりであるが、「みんなで仲良くなりたい」という思いを具現化するため、チームで協力してできる方法を考えていく。

児童には、新しい発想を生み出すことが苦手という実態があるので、馴染みのある遊びを通して「これまでにやったことがないしりとり」を主体的に考えていく経験が大切である。自分たちの手で新しいルールやアイデアを創り出す面白さを味わい、仲間と協力することの大切さを実感できる活動にしたいと考える。

〇話合い活動では、児童が司会進行を行い、自分たちの力で多様な意見を生かして合意形成をしていくことを目指す。１年生なので、司会グループが全体をまとめるのは難しいが、司会グループが「どうしてそう思いますか」と意見の理由を問いかけたり、「今はどんな話し合いになっているかな」と現在の状況を確認したりできるよう、適宜寄り添いながら見守っていく。

話合いが難航する場面では、指導者が「これまでにやったことのない新しいしりとりのアイデア」という本時の核心に立ち戻れるように介入する。児童の意見を丁寧に引き出し、児童の言葉によって話合いがまとめられていくよう、助言や価値付けを行う。

具体的には、意見を比較検討する場面で「みんなで協力できるのはどれだろう」「仲良くなれるしりとりはどれかな」と問いかけたり、板書を視覚的に整理したりすることで、一部の意見だけでなく、全員が納得できる意見で合意形成できるように支援する。この活動を通し、他者の思いを尊重しながら、集団としてより良い人間関係を築いていくことを目指す。

３　目指す子どもの姿

・「色々な言葉を知ることができる」「チームで仲良くなる」という柱に沿って話し合う姿
・今までしたことない新しいアイディアを出そうとする姿

４　評価規準

より良い生活を築くための 知識・技能	集団や社会の形成者としての 思考・判断・表現	主体的に生活や人間関係を より良くしようとする態度
みんなが仲良くなれるしりとりを考え、自分の意見を言ったり、友だちの考えを聞いたりして、考えをまとめている。	どんなしりとりにすればみんなが仲良くなれるかを考え、みんなの意見を生かしながら合意形成を図り、仲良く助け合って実践している。	友だちの意見を聞いて考え、チームで仲良くなるには、どのようなしりとりにするべきか自己の考えを持ち、役割を意識して集団活動に取り組もうとしている。

５　事前の活動

日時	児童の活動　（☆全員　★計画委員会）	指導上の留意点・支援
６月１５日 きらきらタイム	☆議題を選定し、決定する。	「この活動でどんな学級にしたいか」という視点をもって選定する。
６月１８日 休み時間	★活動計画（提案理由・めあて・司会グループの役割）を作成する。	提案理由やめあてを、分かりやすく具体的に設定するよう助言する。
６月２２日 きらきらタイム	☆議題と提案理由を確認して学級会ノートに自分の意見を書き、司会グループに提出する。	意見が具体的になるよう助言する。
６月２３日 休み時間	★意見を分類し、比べる段階で出される論点を予想し、話合いの見通しを立てる。	意見を分類・整理し、板書計画を立て順序立てて話し合えるよう司会グループに助言する。

6　本時のねらい

・「チームで仲良くなれる活動」「言葉を知ることができる」の観点を持って、みんなで何をするかを考えることができる。

7　児童の活動計画（別紙）

8　教師の指導計画

話合いの順序	指導上の留意点	目指す児童の姿 【評価の観点】（評価方法）
話合いのめあてを確認する。 決まっていることを確認する。	司会グループと確認しながら、予め板書しておく。	
話合いをする 柱１　チームで仲良くなれるしりとりを考えよう 出し合う ・ジェスチャーしりとり ・絵しりとり ・リズムしりとり ・ボールしりとり ・変顔しりとり ・だるましりとり ・ことばしりとり ・テーマしりとり 比べる ・チームで仲良くなれる ・話し合いができる まとめる 決まったことを確認する。 柱２　役割を決める ・司会、はじめの言葉 終わりの言葉、タイマー、準備 決まったことを確認する。	比べる ・短冊で整理しながら、チームで仲良くなれるしりとりを考えられるよう支援する。 ・実演することで具体的に集会が想像できるようにする。 まとめる ・出た意見が自分たちの力でできるかを全員で確認し、合意形成を図る。	【主】 ・自分の考えを積極的に発言しようとしている。（フロアの発表） 【知・技】 ・柱や提案理由に沿って、意見を比べて、より良いものを考えている。（観察・フロアの発表） 【思・判・表】 ・実際の集会のイメージを持って話を聞いている。（観察）
教師の話を聞く。	・提案理由に沿って話していた児童や、自分の意見を進んで言えていた児童、友達の意見をよく聞いていた児童を評価する。 ・司会グループの良かった点を具体的に伝え、次の話合いへの意欲を高める。	
話合いをふり返る。 ①司会グループ ②フロア	・自分が話合いの中で頑張ったことや友だちの意見の良さを書くように助言する。	【主】 自分や友だちの良さについてふり返ろうとしている。（ふり返りの内容）

9　事後の活動

日時	児童の活動	指導上の留意点・支援	目指す児童の姿 【評価の観点】（評価方法）
６月３０日(火) 学級会	集会活動	役割やり遂げることができるよう支援する。	【主】進んで自分の役割を果たそうとしている。（ふり返りの発表）

第１学年　特別活動　全校研究会　事後研究会記録

１．授業者から

子どもたちは緊張していた。参観とは違う。顔が固まっていた。手が挙げづらい雰囲気があった。Ａさんのルールに関する質問で、戸惑っていた。分かっているが答えられない様子。そこでも手を挙げる勇気や言語力を鍛えたい。言い切る力がまだ弱いと感じた。学級会ノートに書いていることと違うことに話が展開し、他人に流されてしまっていたと感じた。自信を持って言えるようにしたい。今日は担任が提案理由に戻したが、以前は自分たちで提案理由に戻れたので、提案者がどのような願いを持っているのか常に考えられるようにしたい。話合いの全体ではないが、ぶれている所があった。一方、８個の意見を比べることは難しいと思ったが、子ども達なりに「合体する」など新しい意見を出そうとしたことが良かった。

２．全体討議

討議の柱「児童は提案者の思いに寄り添うことができたか」

・しっかり発言できていた。
・１年生のこの段階で、理由とともに発言できる子が多いことは力がついていると感じた。入学後地道に鍛えてきた結果だろう。
・１年生の段階で、発表する基礎をきちんと作っていることが良い。
・はじめの挨拶を言った子は、４月と比べて声がはっきりと出るようになっていた。
・Ｂさんもまっすぐに手を挙げて言えた。Ｃさんも最後のふり返りで挙手していた。
・担任が一人ひとりをよく見ている。
・しりとりという題材と、チームが良かった。比べ易い。
・活動を入れながら学級会のスタートができていた。低学年だからこそ、良いのでは。
・発言する際には、結論→理由という順序で話せるように教えて欲しい。
・「みんな、なかよく」と言う意見が出ていたところが良かった。
・司会者のＤさんが、必ず理由を聞ききるこだわりが良かった。
・「理由は何ですか？」など、司会者の話型として集団が覚えていけるとよい。
・提案理由に戻ることは１年生の子供だけでは難しいが、一つ一つ鍛えていって欲しい。
・Ｅさんの「食べ物が思いつかないから不安だ。」と言う意見は、提案理由に沿って揺さぶったら不安を軽減するアイデアが出たのではないか。教師が、どのように言葉を増やしていくかを踏み込んで発言しても良かった。
・Ｆさんが「しりとりの「こつ」が分かった」と発言していた。こつについて尋ねると良かった。
・意見を合体する時、選択肢を用意していたが、どの意見を取り入れようとしていたのか知りたい。
・合意が取れればいいが、決まった意見に他意見を付け加えることは気になった。
・自分なら、子供同士のつながりが欲しいと思った。不安だという意見を、自分からしたいという意見にしていけるようにしたい。提案理由を考える場面で、Ｇさんに「仲良くなるって、どんなこと？」と聞くことで、子供の意見を繋げたのではないか。
・子供たちが話し合って決めた意見を最後に合体していた。１度決めた意見を合体するのは良くない。その場合は、新しい意見として出せば良かった。
・Ｈさんを最後に誉めるなど、的確な評価が子供の成長に繋がる。
・今日の授業は、子供→教師の順でふり返りをしていたが、指導案にあるように、教師のふり返りを言って、どのような視点で話し合いをふり返るのか示してから、子どもにふり返りさせた方が良かったかなと感じた。
・授業開始のタイミングに、全教師が揃っていないことは残念だった。

第２学年１組　学級活動（1）指導案

2026 年 6 月 17 日（水）5 校時
児童数 26 名
指導者　澤田　強志

1　議題　楽しくやろう！なかよしドッチボール集会をしよう
（ア　学級や学校における生活上の諸問題の解決）

2　議題選定の理由

○本学級の児童は、1 年生から学級会の話合いを通して、やりたいことを話し合って決めていく経験を丁寧に積み重ねているため、学級会に積極的な児童が多い。自信を持って発表する児童が多いが、話を聞いても理解に時間がかかり、自分の考えを持つのが難しい児童もいる。そのため学級会では、一部の児童の発言で話合いが進んだり、何を話し合っているかわからないまま話合いが進んだりして、集会の時にすべきことがわからない児童がいた。そこでまず「友だちや先生の話を最後まで聞くことが、相手を大切にすることになる。」と伝え、目と耳と心で話を聴くこと、話す時は相手を見て話すことを指導してきた。また教科の授業を通して、自分の意見を持ち、友だちと話し合う機会をできるだけ取るようにしてきた。特に自分から「わからない。」と発言できた場合には大いに褒め、わからないと言えることに価値づけをして、本音で話せる関係づくりに努めてきた。

○本議題は「みんなでルールを考えたら、ドッチボールが苦手な人も笑顔になれる。だからオリジナルドッチボールをしたい。」という思いから選定された。ドッチボールが苦手な人が楽しいと思うには、どうしたら良いかと問い、もう一回やりたいと思えたら「楽しめた。」と言えるのではないかという考えにまとまった。柱は「どんなルールにするか」とした。自分だけが楽しむのではなく、学級全体、特にドッチボールに前向きでない友だちのことを想定しながら話し合うことで、お互いを思いやることを価値づけることができる。学級のみんなが楽しむためには、ルールをどう工夫するか話し合う価値のある議題である。

○話合い活動では、話合いは一部の児童で進めるものではなく、みんなが当事者として考え、お互いの意見を尊重しながら、みんなで決めるものだと指導してきた。前回の学級会では、集会のルールを理解できていない児童がいたため、わからないことを解決しながら話合いを進めるように促すことで、全員が自分事として考えられるようにしていきたい。児童らはどんなルールが良いのか考えるために、様々な種類のドッチボールを事前に体験した。話合いでは、実演などを通してルールについてイメージを共有しながら進行させるようにする。合意形成の際には、ボールを投げるのが苦手な人の立場に立って考え、どうしたらもう一度やりたくなるかという観点に立ち返り、考えられるよう助言していく。自分の思いだけでなく、学級の仲間に対して思いを馳せながら、より良いルールを考えられるようにしていきたい。司会グループとは、全員が話合いの内容について理解しているか確認しながら進行すること、発言していない人にも声をかけ、みんなで安心して話し合える雰囲気をつくっていくことを事前に確認しておくと同時に、話合い中もそのことを意識できるようにする。

3.　目指す子どもの姿

・ボールを投げるのが苦手な人の気持ちに寄り添い、話し合う姿
・友だちの意見を本気で聞き、わからないことを解決しながら話合いを進めようとする姿

4　評価規準

よりよい生活を築くための 知識・技能	集団や社会の形成者としての 思考・判断・表現	主体的に生活や人間関係をより良く しようとする態度
「どんなルールにするか」で出し合った意見を苦手な人が楽しめるという観点で比べることを理解している。	ボールを投げるのが苦手な人が楽しめるようにルールを考え、意見を活かし合いながら合意形成を図り、実践している。	自分の意見を発信したり、分からないことを共有したりしながら、集会の実現に向けて協働して取り組もうとしている。

5　事前の活動

日時	児童の活動　（☆全員　★計画委員会）	指導上の留意点・支援
6 月 8 日 きらきらタイム	★議題を決定する。 ★提案者と計画委員会で提案理由を整理する。	・提案者の提案理由をホワイトボードに整理していくことで共有できるようにする。
6 月 12～15 日 休み時間	★場所、日程、大まかなやり方を決めておく。 ★柱を考える。	・マインドマップを使い、話し合うべきことと決めておくべきことを確かめるようにする。

6月16日 学級会	☆★話合いで「出し合う」を先に進め、分からないことを解決する。	・学級会の進め方について確かめながら進行を任せる。 ・学級会の意義や目的について共有しておく。

6　本時のねらい

〇ボールを投げるのが苦手な人の思いに寄り添い、友だちの意見を活かしながら、もう一度やりたくなるルールを考えることができる。

7　児童の活動計画（別紙）

8　教師の指導計画

話合いの順序	指導上の留意点	目指す児童の姿 【評価の観点】（評価方法）
話合いのめあてを確認する 決まっていることを確認する	司会グループと確認しながら、予め短冊を仲間分けし、話し合う観点をしぼっておく。	
話合いをする 柱１「どんなルールにするか」 ・投げていない人を優先する。 ・得意な人は、利き手の反対の腕で投げる。 ・２回当たったらアウトになる。 ・得意な人と苦手な人が半分ずつ分かれてチームになる。 くらべる ・質問する。 ・賛成理由と反対理由を述べる。 ・解決策を考える。 まとめる 柱２　「やくわり」 決まったことの確認	・事前に計画委員会が分類、整理した短冊を見ておくように伝えておく。 くらべる ・わからないことは、質問するように促す。 ・提案理由に沿って発言するよう助言する。 ・提案理由に沿って賛成理由を述べ、よさを比べるよう声をかける。 ・短くまとめられるように黒板記録に助言する。 まとめる ・まとめ方を教えて、例示する。 ・決まったことに対して納得できるかフロアに確認し、全員の意思表示を待つように助言する。 事前に司会グループで必要な役割を考えておき提案できるようにしておく。 どのようにして決まったか、分かるように発言するよう助言する。	【主】 友だちの意見を真剣に聞き、分からないことや疑問を出し合い、解決しようとしている。（司会・フロア発表） 【知・理】 ・ボールを投げるのが苦手な人が楽しめるという観点で賛成理由や反対意見を述べている。（司会、フロア発表） 【思・判・表】 ・出し合った意見について、観点に沿って話し合い、合意形成を図っている。 （フロア発表）
教師の話を聞く	・提案理由に沿って話していた児童や新しくアイデアを出した児童、話合いの流れを大きく変えた児童の発言を取り上げ、評価する。 ・司会グループに具体的に良かった点を全員の前で紹介することで、次の実践活動への意欲を高める。	
話合いをふり返る	話合いで自分が努力したこと、友だちの意見の良さ、学級全体の良さを書くように助言する。	【主】友だちのがんばりや良さを次の話合いに活かそうとしている。（ふり返り）

9　事後の活動

日時	児童の活動（☆全員★計画委員会）	指導上の留意点・支援	目指す児童の姿 【評価の観点】（評価方法）
6月22日	☆柱２役わり　について話し合う。 役割の準備		【知識・技能】提案理由を根拠にして、話し合っている。（観察・学級会ノート）
6月24日	☆集会活動。	話合いで決まったことを確認して集会に臨むようにする。	【主体的に取り組む態度】 友だちと積極的に関わりながら、実践しようとしている。（観察）

第３学年１組　学級活動(1)指導案

2026 年 7 月 14 日（火）4 校時
児童数 38 名
指導者　小西　哲也

1　議題　　1 学期がんばったね会をひらこう
（ア　学級や学校における生活上の諸問題の解決）

2　議題選定の理由

〇本学級の児童は、全体的に明るく前向きであり、何事にも物怖じせずのびのびと挑戦する強さを持っている。学級目標である「超ウルトラスーパー３年生」の達成に向けて、これまでに「くつをそろえる」「自分からあいさつ」「しずかに移動」「声の出し方」「友だちを大切に」という５つの約束を意識して過ごしてきた。日頃の活動からも、一人一人が独自の視点やこだわりといった個性をのびのびと発揮し、自分の考えや意見を積極的に言えるようになってきた。一方で、それぞれの個性が豊かであり、自分の意見を堂々と主張できる反面、友達の異なる意見に耳を傾け、互いの良さを生かしながら集団としての考えをまとめていく力には、まだ弱さが見られる。本議題の活動を通して、これまでの５つの意識（特に「友だちを大切に」や場面に応じた「声の出し方」）をさらに高め、互いの意見を尊重し合いながら、集団として一つの方向性へと考えを深め、まとめていく力を育てていきたい。

〇もうすぐ 1 学期が終了するにあたり、1 学期の学習や生活をふり返り、学級全員に成長を実感させたい。単なるお楽しみ会ではなく、各教科の授業内容を遊びのルールに組み込むことで、「こんなこともできるようになった」「みんなで熱心に勉強したな」という学びの価値づけを行う。自分たちで工夫した遊びを通して、学級のきずなを深め、２学期へ向けて「みんなでがんばろう」という意欲をもたせるために本議題を選定した。

〇話合い活動では、たくさんの提案が出た段階で、子供たちが感情的に意見をぶつけ合うのを防ぐため、本時の提案理由に立ち返るための視点を共有し、客観的に意見を吟味できるようにする。

- **視点①（目的）**：３年生の 1 学期のふり返り（授業内容）になっているか。
- **視点②（対象）**：運動やクイズの得意・苦手に関わらず、学級全員が楽しめるか。
- **視点③（条件）**：準備や本番の時間、場所のきまりを守って実現できるか。

3　目指す子供の姿

・学級にとってより良いものを考え、全員で話し合って決めようとする姿
・友だちの考えを聞き、少数意見も大事にしながら話合いを進めようとする姿

4　評価規準

より良い生活を築くための 知識・技能	集団や社会の形成者としての 思考・判断・表現	主体的に生活や人間関係を より良くしようとする態度
学級全員が楽しめる「がんばったね会」にするために、提案を整理する方法（仲間分けやメリット・デメリットの検討）や、互いの意見を組み合わせる方法（折り合い）について理解することができる。話合いの中でそれらを用いて意見を絞り込んだり、決まった活動に向けて自分の役割を果たしたりすることができる。	学級全員が納得し、1 学期の成長を実感できる「がんばったね会」にするために、出された意見の良さや問題点について「提案理由」や「みんなが楽しめるか」という視点から多面的に考えている。互いに折り合いをつけながら学級のきまり（集団の意思）をまとめようと工夫して発言したり表現したりしている。	学級全員の 1 学期の成長を互いに認め合える「がんばったね会」にしたいという願いを持ち、自分の意見だけにこだわらずに多様な意見を認め合おうとしている。決定した活動に向け、自分の役割を責任をもって主体的に果たそうとしたりしている。

5　事前の活動

日時	児童の活動（☆全員　★計画委員会）	指導上の留意点・支援
7 月 1 日	☆自分の考えを学級会ノートに書き、司会グループに提出する。	提案理由に沿った観点を共有した上で活動の具体的なイメージや細案を書くよう助言する。
7 月 13 日 休み時間	★どのように話し合いを進めていくかを確認。	提案理由に沿った観点を進行できるように確認していく。

6　児童の活動計画（別紙）

7　本時のねらい

○1 学期の学習や思い出を振り返り、学級全員が納得して楽しめる遊びの工夫について、進んで意見を出し合おうことができる。

○出された様々な提案の良さや問題点を「3 つの視点（目的・対象・条件)」に照らし合わせて比べ、互いに折り合いをつけながら、集団としての決まりやルールを工夫してまとめることができる。

8　教師の指導計画

話合いの順序	指導上の留意点・支援	目指す児童の姿 【評価の観点】
話合いのめあてを確認する。 決まっていることを確認する。	・「何のために話し合うのか」という目的意識を全員で共有し、ブレない軸をつくる。	
話合いをする 柱１　活動内容を考えよう。 出し合う 提案（アイデア）の発表と整理 ・事前に考えた内容・意見を発表し合う。 比べる ・似た意見を「仲間分け（グルーピング)」する。 **メリット・デメリットの検討** ・それぞれの仲間（意見）の「良いところ」と「心配なところ」を出し合う まとめる 司会がまとめる。 **折り合いと決定** ・心配なところを解決するルールを足したり、意見を組み合わせたりして１つにまとめる。 決まったことの確認	 出し合う ・黒板（板書）を使って、視覚的に意見を整理する。 ・「私の意見と○○さんの意見は、ゲームの種類が同じだね」といった、共通点に気づく知識・技能を見取る。 ・単なる多数決に逃げず、それぞれの意見の価値を比べさせる。 ・「A か B か」ではなく「A と B を合わせて C にする」という第 3 の案（折り合い）を主体的に導き出す態度を価値づけ、承認する。	 【主】具体的に想像できない意見に対しては、聞き返して確認しようとしている。（司会） 【思・判・表】出し合った意見について、観点に沿って話し合っている。 （フロア発表） 【知・技】 話し合ったことが活かされるような結論を提案している。（司会） 補足や訂正等の意思表示している。（フロア発表）
教師の話を聞く	学級全体のことを視野に入れ、具体的に理由付けした発言について価値づける。 多くの意見を引き出し、整理しながら話合いを進行した司会グループを称賛する。	
話合いをふり返る ①司会グループ ②フロア	・決定した活動への見通しを持たせ、「自分たちの手で決めた」という達成感と人間関係の向上を図る。	【主】自分または学級が考えた過程をふり返ろうとしている。 (ノート・発表)

9　事後の活動

日時	児童の活動	指導上の留意点・支援	目指す児童の姿 【評価の観点】
７月１６日	決定したことの準備	時間の見通しをもって進んで活動できるように促す。	【主】主体的に自分の役割を理解し行動しようとしている。
７月１７日	集会活動	学級みんなで考えたことをふり返り、実行するように声をかけてから始める。	【主】学級で考えたことをふり返り楽しもうとしている。

第4学年1組 学級活動（3）指導案

2026 年 10 月27日（火） 5校時
児童数 27名
指導者　成迫 由起

1 **題材**　学校統合 最高学年6年生に向けて、4年生の私のめあて
（イ 社会参画意識の醸成や働くことの意義の理解）

2 題材選定の理由

○ 本学級の児童は、3年生までの関わりの中で、互いの個性を理解して学習や生活をしている。友達が発言できずにいると寄り添い、何を伝えたいのか相手の気持ちを尊重しながら聞き取る姿が見られる。一方、発言する児童が限られており、全員が自分の思いや考えを伝えることはできていない。友達の発言を聞いていなかったり、自分事として捉えず、話合いに参加していなかったりする児童も多い。みんなで意見を出し合い、みんなで作りあげるという意識は弱い。そこで、1 学期から各教科の学習の中で、ペアで話した後には、必ず手を挙げて発言すること、分かったら発言することを伝えてきた。発言する人に体を向けて話を聞くこと、聞いた話の中でキーワードを探すこと等を行ってきた。また、朝の音読の時間を設け、はっきりと大きな声を出す練習も行ってきた。各委員会の集会や1年生を迎える会等の集会が開かれる際には、事前に目的や集会の内容を確認し、集会のどの場面で自分に何ができるのかということを考えさせるようにした。集会後には、学級でふり返りを行い、次の集会につなげるようにした。集会や縦割り掃除等では、自分の役割を意識させて活動をさせるようにした。しかし、主体的に活動ができていない児童は多い。

○今回、1年半後の学校統合に向け、自分自身が最高学年として学校を作るリーダーになることを自覚し、そのために4年生の今、自分が何をすべきか、どんな姿を目指すかということを一人一人が考え、行動・実現していくことが必要だと考え、本題材を設定した。まず、2学期の始業式で校長より学校統合の説明があり、3編の詩と出会った。3編の詩の中から自分の気持ちに合う詩を選び、今の自分の気持ちを作文にした。学校統合についての具体的な話が初めてであったため、その時に感じたことを文章にする時間となったが、その時点で既に、自分たちが最高学年としての大切な役割を担うということは理解していた。また、新しい学校の第1回卒業生になることも楽しみにしている。今後、学校統合の内容について具体的に決まっていく中で、子どもたちが、どんな学校を作っていきたいのか、何を大切にして学校生活を送っていきたいのか、そのために今、自分はどんな力をつけていくべきかということを考えさせたい。

○指導にあたっては、1年半後を見据え、4年生の自分が何をしていくべきか、学級のめあてと、自分のめあてを一人一人に持たせていくことから始める。「学校統合に向けて、4年生でどんな学級を作りたいのか」を話合わせる。その際、1学期に行った「学級活動や児童会活動のふり返りのアンケート」「言葉に関するアンケート」のふり返りを各自が行い、自分自身と学級を見つめさせたい。みんなで学校を作るためには、現在、光明小学校で行っている集会への参加の仕方を見直させたい。例えば、受け身になって集会に参加しているのではないか、自分事としてふり返りをしているのか、みんなのことを考えて集会の中で自分の役割を考えて行動することができているか等、細かい点をふり返らせたい。委員会活動への参加の仕方、掃除や当番活動への取り組み、授業に向かう姿勢等、具体的に自分自身を見つめることが大切だと考える。アンケート結果を客観的に見つめ、分析することで、自分や学級の課題を明確にすること、保護者や教師から見た4年生の良さや課題等、客観的な資料も自分たちを見つめる大切な材料にしていきたい。

3 目指す子どもの姿

・学級での話合いやアンケート結果、大人による客観的な評価をもとに、自分自身のめあてを決め、実践する姿
・意思決定したことに対して、日々の学習や生活の中で前向きに取り組み、工夫や努力をする姿

4 評価規準

より良い生活を築くための 知識・技能	集団や社会の形成者としての 思考・判断・表現	主体的に生活や人間関係を より良くしようとする態度
学校統合時に最高学年になることを自覚し、今後の学習や生活に見通しをもちながら、そのために必要となる力を理解している。	学級での話合いや、アンケート結果等客観的な資料をもとに、4年生での自分の目標を具体的に自己決定している。	学校を作る一員として自覚をもち、目標に向け、自分の良さを生かし、友達と協働しながら目標に向け行動しようとしている。

5 事前の活動

児童の活動	指導上の留意点	目指す児童の姿と評価
・「特別活動ふり返りのアンケート」「言葉に関するアンケート」に記入する。 ・学校統合の話を聞き、自分の思いを作文にする。 ・どんな学級を作りたいのか話合う。 ・アンケート結果についてふり返る。 ・保護者や教師へのインタビューを行い自分たちの姿を客観視する。	・2種類のアンケートをふり返ることで、今の自分の成果と課題について具体的に見つめさせる。 ・学級会での話合いでは、実態を踏まえ、具体的に目標を決めさせる。 ・保護者、教師へのインタビューは、今の4年生について、力をつけている面、課題について聞き取らせる。	・現在の自分たちの姿を客観的にふり返り、自分たちの良さを生かして、4年生での自分たちの目指す姿を考えることができている。

6 本時のねらい

・学級会での話合い、アンケート結果、教師や保護者へのインタビュー内容の交流を踏まえ、4年生がつけている力と課題を整理し、学校統合に向けて、今の自分のめあてを考え、意思決定することができる。

7 本時の指導計画

児童の活動	指導上の留意点・支援	目指す児童の姿 【評価の観点】(評価方法)
つかむ **本時の学習の流れとめあてを確認する。** **自分たちのアンケート結果をふり返る。** 〇前時までに気づいた自分たちの課題についてふり返らせる。 【特別活動のアンケート】 ・自分の考えを進んで発言できていない。 ・友達の発表を自分の考えと比べて聞いていない。 ・みんなで決めたことを守れていない。 ・自分から進んで話合いや集会に参加していない。 ・次に頑張りたいことを見つけていない。 【言葉に関するアンケート】 ・正しく伝えられていないと思う人がいる。 ・話すのは好きだが、書くことが好きな人は少ない。 さぐる **教師へのインタビュー結果を報告する。** 〇グループごとにインタビューをしたことを報告する。 見つける **教師へのインタビューの結果報告を聞き、今後つけていくべき力を考え、交流する。** 〇先生方へのインタビュー結果から、つけている力と課題の共通点を探し、整理する。 決める **自分の目標を決める。** 〇本時までの学習を踏まえ、学校生活での自分のめあてを具体的に書く。	つかむ ・本時のめあて「学級会での話合い、アンケート結果、家の方へのインタビュー、先生方へのインタビューの報告をもとに、自分自身をふり返り、めあてを決める」を確認し、学習のゴールをつかませる。 ・学級会での話合い、アンケート結果を確認させ、本時の意思決定に生かせるようにする。 さぐる ・各グループが行った、教師へのインタビューのまとめについて、共通点を見つけながら聞くよう促す。活動3「見つける」で意見が出せるような聞き方をするよう伝える。 見つける ・各グループからの報告を確認し、共通点を整理する中で、自分の課題を見つけながら活動をさせる。 ・出た意見を板書で分類整理し、自己決定につながるようにする。 決める ・「学校統合に向けて」という視点を常にもたせて考えさせる。 ・アンケート結果、インタビューの内容、保護者へのインタビュー、自分自身の実態を重ねて「私は」という視点で考えさせる。 ・2種類のアンケート、教師や保護者へのインタビュー、本時に話し合ったことをもとにしためあてになっているか確認させる。 ・継続して取り組めるめあてかどうか、考えるよう助言する。 ・意思決定したことを交流することで、自分だけでなく、友達のめあても把握させる。	【主】 学校を作る一員としての自覚をもち、本時の学習内容を踏まえて、自分の目標を考えようとしている。 【思・判・表】 学級での話合い、アンケートやインタビュー結果等の資料をもとに、4年生での自分の目標を具体的に自己決定している。 (ワークシート) 【知・技】 学校統合時に最高学年になることを自覚し、今後の学習や生活に見通しをもちながら、そのために必要となる力を理解している。
教師の話を聞く。	アンケートやインタビュー、学級会での話合い等を生かし、広い範囲で考えて自己決定したことを価値づける。	
授業をふり返る。	今後、学習や生活、委員会活動や縦割り活動等の場面において、どのような思いで学習や活動をするのか、意思表示を引き出し、意欲を高める。	

8 事後の活動

日時	児童の活動	指導上の留意点・支援	目指す児童の姿 【評価の観点】(評価方法)
10月27日 ～	自己決定した目標に向けて工夫して取り組む。	取り組みをふり返る機会を設定し、継続して取り組むことができるよう見通しを持たせる。 個々の取り組みに対して評価を行う。	【思・判・表】決めたことについて工夫して実践している。(観察) 【主】自己決定した目標に向け、実践しようとしている。実践したことをふり返ろうとしている。(観察・ワークシート)

第６学年１組　学級活動（１）指導案

2026 年 10 月 26 日（月）５校時
児童数　33 名
指導者　永樂　俊樹

１　議題　　みんなで　わいわい　おにごっこ　集会
（ア　学級や学校における生活上の諸問題の解決）

２　議題選定の理由

○本学級の児童は、与えられた課題や役割に対して最後まで取り組み、行事などでは仲間と協力しながら活動を進めることができる。一方で、自分の関心があることに意識が向きやすく、周囲の状況や相手の思いに目を向け、自ら必要な行動を考えることには課題がある。また、教師や友だちから言われたことには取り組めるものの、自分たちで課題を見つけ、より良い方法を考えて行動する力は十分ではない。話合い活動においても、自分の考えを出すことにとどまり、友だちの意見に疑問を投げかけたり、考えをつなげたりして、新たな考えを生み出すことに課題がある。意見を出すだけの「壁あて」の話合いから、互いの考えを受け止め、問い返しや具体的な提案を通して考えを深める「意見のキャッチボール」へと高めていきたい。

本議題は、１年生とのおにごっこ集会を通して、相手の立場に立って考えるとともに、友だちとの意見のキャッチボールを通して新たな遊びを創り出すことをねらいとして設定した。６年生にとって楽しい遊びであっても、１年生にとってはルールが分かりにくかったり、安心して参加できなかったりすることも考えられる。そのため、自分たちの経験や好みだけで内容を決めるのではなく、「１年生はどう感じるだろう」「どうすればみんなが楽しめるだろう」という相手の立場に立った視点を大切にしたい。話合いの柱を「１年生も６年生も楽しめるおにごっこにするために、どんなルールや工夫を取り入れるか」とし、２～３つのルールを決めることを目指す。その際、単に意見を出し合って選ぶのではなく、友だちの意見に問いかけたり、具体的な場面を想像したりしながら考えを深め、複数のアイデアを組み合わせることで、新たなおにごっこを創り出したい。

話合い活動では、提案理由を常に意識し、目的に沿って意見を深めることを大切にする。意見を広げる段階では、一人一人が安心して自由にアイデアを出せるようにする。意見を深める段階では、友だちの意見を並べて比べるだけでなく、疑問や問いかけを通して具体的な改善策を考える「意見のキャッチボール」を促したい。例えば、「つかまった人を助けられるルールにしたい」という意見に対して、「どうすれば助けられるのか」「１年生にも分かりやすくするには、どんな工夫が必要か」と問いかけ、友だちのアイデアを生かした新たなルールが生まれるようにする。その際、教師がすぐに答えを示すのではなく、児童同士のやり取りを見守り、必要に応じて提案理由に立ち返る問いかけを行う。また、全員が話合いに参加し、自分の考えを伝えたり、友だちの意見を受け止めたりできるよう、支持的な風土づくりにも努めたい。

実践後には、集会の楽しさだけでなく、自分たちの工夫が１年生にとってどのような意味をもったのか、友だちとの話合いで考えがどのように深まったのかをふり返らせたい。これらの経験を通して、相手のために考えて行動することの大切さと、友だちと考えをつなぎ、深めることで新たな価値を生み出せることを実感させたい。そして、互いの良さを生かしながら、主体的に集団づくりにかかわる態度を育てていきたい。

３　目指す子供の姿

１年生も６年生も楽しめるおにごっこにするために、１年生の立場に立って課題意識をもち、具体的な場面を想像しながら根拠を示して意見を出したり、友だちの提案に疑問を投げかけたり、アイデアを組み合わせたりしながら、新たなルールや工夫を生み出し、合意形成を図ろうとする姿。

４　評価規準

より良い生活を築くための 知識・技能	集団や社会の形成者としての 思考・判断・表現	主体的に生活や人間かか係を よりよくしようとする態度
１年生も６年生も楽しめるおにごっこにするために、相手の立場に立って考え、友だちの意見を掘り下げたり、具体化したりしながら、考えを深めることを理解している。	１年生も６年生も楽しめるように、具体的な場面を想像して意見を出したり、友だちの意見に質問や提案をしたり、アイデアを組み合わせたりしながら、ルールや工夫を決めている。	１年生も６年生も楽しめるおにごっこ集会の実現に向けて、１年生の気持ちや立場を考えながら、友だちと協力して話合いや集会の準備に取り組もうとしている。

5　事前の活動

日時	児童の活動（☆全員　★計画委員会）	指導上の留意点・支援
10月21日 休み時間	☆普通のルールであるおにごっこをしてみる。	・課題を見つけ、次に活かすことができるように助言する。
10月22日 休み時間	★おにごっこ集会をより楽しくするために、今の遊び方をふり返り、みんなが楽しめる工夫について課題を共有する。	それぞれの経験をもとに課題を共有することができるように支援する。

6　児童の活動計画（別紙）

7　本時のねらい

・相手の意見を共有し、具体的な遊び方をイメージしながら話合いを深め、みんなが楽しめるおにごっこのルールに合意形成を図ることができる。

8.　教師の指導計画

話合いの順序	指導上の留意点・支援	目指す児童の姿 【評価の観点】(評価方法)
話合いのめあてを確認する。 決まっていることを確認する。	話合いについて、一人一人のめあても確認する。	
話合いをする 柱１　　どんな、ルールと 工夫でするか。 出し合いながら、深める ・かくれ鬼にする。 → 体育館のどこに隠れるのか。安全な場所はあるのか。 ・ボール当て鬼にする。 → 体育館で安全に遊ぶには、どんなボールを使い、どこまでを範囲にするのか。 ・増え鬼にする。 → 鬼が増えすぎないようにするにはどうすればよいか。 ・氷鬼にする。 まとめる 柱２　役割 決まったことの確認	出し合いながら、深める ・友だちの考えを聞き、具体的なルールやイメージを共有し、クラスにとってより価値のあるものにまとめるよう助言する。 ・互いの意見につながりが生まれるよう、相手の意見を受けて質問したり、考えを付け加えたりすることを促す。 ・全員が話合いに参加できるよう、発言しやすい雰囲気をつくり、質問や意見を出すよう促す。 まとめる ・司会のまとめに対して合意できないことがないかフロアに確認し、全員の意思表示を待ち、合意形成をする。 ・どのようにして決まったかをまとめて発言するように助言する。	【主】話合いの観点が、全員に分かるように話合いを進めようとしている。（司会） 【思・判・表】それぞれの考えの良さ、問題点を受け止めて、自分の考えを深め広めている。（フロア発表） 【知・技】 話し合ったことが活かされるような結論を提案している。　（司会）
話合いをふり返る ①司会グループ ②フロア	より良いものを考えたか、多くの意見で合意形成につなげることができたかについて、ふり返るよう助言する。	【主】自分や友だちの良さを見つけ、自分のめあてをふり返ろうとしている。　(ノート)
教師の話を聞く	学級全体のことを視野に入れ、具体的に理由づけした発言について価値づける。意見を引き出し、整理しながら話合いを進行した司会グループを称賛する。	

9　事後の活動

日時	児童の活動	指導上の留意点・支援	目指す児童の姿 【評価の観点】(評価方法)
11月2日	集会でのかかわりを生かし、休み時間などにも１年生と進んでかかわる。	集会後も１年生とのかかわりを見守り、相手を思いやる行動を価値付ける。	１年生の気持ちを考え、日常生活でも進んでかかわろうとしている。

ふたば（知的　自閉・情緒）学級　学級活動（1）指導案

2026 年 10 月 5 日（月）1 校時

児童数　21 名

第 1 学年　1 名　　第 2 学年　3 名　　第 3 学年　4 名

第 4 学年　2 名　　第 5 学年　5 名　　第 6 学年　6 名

指導者　一二三　琢磨　　池内　純　　栗之池　陽子

1　議題　　ふたばぼうけん宝島の作品をつくろう

（ア　学級や学校における生活上の諸問題の解決）

2　議題選定の理由

○　本学級の児童は、自分が思っていることを素直に表現できる児童、自分の思いがあっても伝えるのが恥ずかしい児童、集団の中に入って話合いがしにくい児童など様々な児童がいる。まずは自分の思っていることをみんなの前で発言できるよう、少人数での話合い活動に取り組んできた。話合い活動を進めていくとだんだんと自分の意見を伝えられる児童が増えてきた。その経験が交流学級での話合い活動や集会活動に生かされてきている。1 学期の初めには、毎年恒例となっている「ようこそふたばへの会をしよう」というふたば学級に新しく入級した友達と仲良く過ごす集会を開いた。新しく入級した友達にも楽しんでもらおうと各自が自分の役割を果たしていた。また、高学年は低学年に優しく接することもできている。特別支援学級在籍児童数も 3 学級で 21 名となり、全員がそろって同じ観点で意見を出し合い、比べ合うところに難しさを感じている。そのため、議題によって学年をしぼって話合い活動に取り組んでいるが、全員の思いが大切にされるような話合いになるよう積み重ねているところである。

○　本議題は、光明小学校としては最後の開催となる図工展に向けて、ふたば学級として作りたい作品についてみんなで話し合っていきたいという思いから選定されたものである。交流学級でも作品作りに取り組むが、ふたば学級という異学年の友達と制作する楽しさにも気づくことができる議題であると考える。みんなでどんな作品を作りたいのか、どんなことが工夫できるのかについて考えることで、思考に広がりが生まれると期待している。

○　話合い活動では、「ぼうけん宝島」をテーマに自分たちが作りたい作品はどのようなものか全員で共有することができた。提案理由を理解し、自分たちが作りたい作品を考えさせる。具体的にどんな作品を作りたいのか設計図を描いてみたり、画用紙や箱を使って作品を作ってみたりしながら、何が必要なのか考えさせることで意見を出しやすくする。友達の意見も参考にしながら活動することで、創作する楽しさも感じてほしい。自分の意見を通すだけではなく、友達の意見も取り入れてより良い作品ができるように支援していく。

3　目指す子供の姿

○　自分の意見をわかりやすく伝えたり、友達の意見を聞いたりする姿

○　作品作りについて具体的な場面を想像して、自分たちにできることを見つける姿

4　評価規準

より良い生活を築くための 知識・技能	集団や社会の形成者としての 思考・判断・表現	主体的に生活や人間関係を より良くしようとする態度
みんなが協力して活動するための工夫について話し合うことを理解している。	なかよく活動する方法を具体的に考え、自分たちにできることを決めている。	決まったことを生かしながら、協働して作品作りに取り組もうとしている。

5　事前の活動

日時	児童の活動（全員で行う）	指導上の留意点・支援
9 月 7 日 ふたばの会	☆議題を選定する。 ☆活動計画を立てる。	何を、何のために話し合うのかを全員で確認し、見通しが持てるようにする。
9 月 14 日 ふたばの会	☆みんなで制作できる内容について考える。	具体的な内容について意見が出せるように助言する。

6　児童の活動計画（別紙）

7　本時のねらい

〇図工展で作りたい作品について具体的に考えることができる。

〇意見を交流し、自分たちにできる工夫を決めることができる。

8　教師の指導計画

話合いの順序	指導上の留意点・支援	目指す児童の姿 【評価の観点】（評価方法）
話合いのめあてを確認する。 決まっていることを確認する。		
話合いをする 柱　ぼうけん宝島をテーマにどんな作品を作りたいか 出し合う ・たからばこ ・かいぞくせん ・火山 ・海 深める ・材料は何がいるか考える。 ・個人で作るかグループで作るか考える。 ・必要な役割を決める。 まとめる 決まったことを確認する	出し合う ・「ぼうけん宝島」をイメージしながら作品作りを考えさせる。 深める ・具体的な作品作りが想像できるよう、絵や図で伝える方法もあることを助言する。 ・これまでの経験を思い出し、そこからどんな工夫ができるか考えるように声をかける。 まとめる ・出た意見が自分たちにできるか、確認するよう促す。	【知・技】 ・柱に沿って、自分の考えを具体的に伝えている。（発言の様子） 【思・判・表】 ・実際の作品作りを想像しながら、考えている。（観察） ・全員が話合いの内容を理解しているか、確認しながら進行している。（進行の仕方）
教師の話を聞く	・自分の考えを具体的に伝えたり、質問したりしたことについて評価する。 ・全員で話合いを進めようとした司会グループについて具体的に賞賛する。	
話合いをふり返る	・作品作りに対する思いが出せるように支援する。	【主】 意欲的に自分の役割に臨もうとしている。

9　事後の活動

日時	児童の活動	指導上の留意点・支援	目指す児童の姿 【評価の観点】（評価方法）
１０月～ ふたばの会	具体的な活動内容を話合い、作品作りをする。	主体的に制作したり、工夫して制作したりできるようにする。	【主】合意形成したことをもとに、進んで制作しようとしている。 （観察・計画内容）
１月　図工展	みんなで協力して作品を仕上げる。	話合いで決まったことを確認して作品作りに取り組ませる。	【思考・判断・表現】 協力して活動したり、友達の良さを見つけたりしながら制作している。 （観察）

国語科学習指導案
実践ウォッチ指導案

全校研究会　４年１組　２年１組

一人一授業　１年１組　３年１組
５年１組
ふたば（特別支援学級）
音楽科　　通級指導教室



【全校研究会】

第4学年1組 国語科学習指導案

指導者 成迫 由起

1. 日時　2026 年 6 月 5 日 金曜日　第 5 校時

2. 単元名 対比して読もう。 筆者の考えに対してわたしはこう考える。

教材名 「思いやりのデザイン」「アップとルーズで伝える」

3. 授業づくりの視点

（1）教材分析

本単元は、第一教材「思いやりのデザイン」と第二教材「アップとルーズで伝える」から成る。第二教材「アップとルーズで伝える」は、第一教材で学んだことを生かして読むことができる。2つの説明文は、具体的な例を挙げながら筆者の考えを述べている点と、事例を対比させながら説明することで、筆者の主張をより分かりやすくしているという点でよく似ている。また、図や写真を示し、文章と対応させながら読むことで、文章に説得力をもたせている。2つとも、双括型の文章で、初めと終わりに筆者の主張が重ねて書かれている。

「思いやりのデザイン」は、練習教材として、はじめ・中・終わりの構成が分かりやすく読みやすい教材である。はじめに話題提示と筆者の考え、中に例、終わりは「このように」から始まり、再び筆者の考えが書かれた双括型の文章である。中の部分は、A・B2つの案内図の説明が対比して書かれている。案内図Aの中でも、分かりやすい点と分かりづらい点が対比して書かれている。

「アップとルーズで伝える」は、アップとルーズの定義やその長所と短所について、具体的な映像の写真を示しながら、分かりやすく述べられている。児童にとって身近なスポーツの映像写真を例に説明しているので、興味を持って読み進めることができる。本教材は、はじめの部分で、テレビのアップとルーズの特徴を対比させて提示し、その違いについて、問いかけている。中の部分では、その答えとして、アップとルーズで「伝えられること」と「伝えられないこと」を逆説の接続語を使って対比的に説明し、違いを明確にしている。その後、テレビ映像の類比として新聞の写真を取り上げることで情報に対する見方を広げている。終わりの部分では、送り手は伝えたいことに合わせて、アップとルーズを選んだり組み合わせたりする必要があると述べている。最後に、子どもたちへのメッセージとして、クラスの友達に何かを伝える際、「アップ」と「ルーズ」があることを思い出すことで、自分が伝えたいことをより分かりやすく受け手に届けることができると締めくくっている。以前の教材文とは、終わり部分が大きく書き替えられており、人に何かを伝える際に大切にするという視点を持たせ、児童が自分のこととして考えられるよう、筆者のメッセージが強く書かれたまとめとなっている。

（2）児童の実態

本学級の児童は、4月に物語文「白いぼうし」を学習している。物語文の学習では、人物の行動や会話から人物像を捉える学習をした。人物像を捉える際には、本文に書かれていることを根拠にし、理由付けをして自分の考えを伝えるという学習をした。自分の考えを伝える際には、根拠、理由とともに伝えるという学習経験をした。また、言葉の意味を考え、言葉を広げることも大切にした。「はっとする」「たくし上げる」とは、どんなことか、他の言葉で表現するとしたら、どんな言葉が相応しいか、また、「はっとする」を使って1文を作る等、言葉にこだわるという経験をした。

説明文の学習は、4年生になって初めてするため、説明文の特徴や読み方の学習をしてから、本教材の学習に入った。「アップとルーズで伝える」では、対比させて読む学習をするため、似たような書きぶりである1年生教材「どうぶつの赤ちゃん」を与え、対比させて読むという学習をふり返った。また、「どうぶつの赤ちゃん」には、終わり部分が書かれていないため、まとめとなる終わり部分を、自分が筆者になって書くという経験もした。

児童の実態として、学期はじめに3つの課題を感じた。1つ目は、聞く力の弱さだ。教師が話をしている時に、黙って聞くこと、顔を上げることが難しい。まずは、黙って聞くこと、顔を上げることから始め、次に話し手に体を向けて聞くこと、聞き手に体を向けて話すことへと繋げた。2つ目は、ペア学習で互いに考えを伝え聞き合うことの弱さだ。自分の考えを伝えようとする勢いは弱い。相手の考えを聞いて自分の考えを広げることにも弱さを感じる。3つ目は、声を出すことに課題を感じる。口形に気を付け、はっきりと大きな声で最後まで話す弱さを感じる。学習の基本となる力をつけていく必要がある。1方、教わったことを素直に聞き、吸収する力をもつ児童は多い。友だちと1緒に考えることでたくさんの考えが出てくること、友だちと1緒に音読をすると大きな声が出て楽しいこと、新たなことを教わるとそれ

を活用しようとする気持ちも感じられる。1 学期は、まず、聞き合う、はっきりと話す、丁寧に取り組む等、学習の基本となることを1つ1つおさえながら、言葉を増やし、言葉にこだわり、自分の思考を深めることを大切にする学習を重ねていきたい。

(3)指導にあたって

本単元では、筆者の主張を読み取り、主張に対する自分の考えを書く学習を設定している。主張を支える例や説明を読む際、対比させて読むことと、文章と写真を対応させて読むことで、本単元のねらいである、段落相互の関係を考えながら文章の内容を的確にとらえて筆者の主張を読み取り、自分の考えを書く力をつけたいと考える。

本単元では、主に次の2つの力をつけることをねらいとしている。

まず、1つ目は、段落相互の関係や書き方の工夫に着目しながら問いに対する答えや筆者の主張を読む力である。

本教材は、題名である「アップ」と「ルーズ」自体が対比されている。「アップ」について説明されている段落と「ルーズ」について説明されている段落が対比関係にあること、また、同じ段落の中でも、「伝わること」と「伝わらないこと」について接続語を用い、対比して書かれている。対比を用いて説明することで、2つの違いがより1層明確になり、読み手に分かりやすいという効果があることにも気づかせていく。また、説得力を持たせるために、文章と写真を対応させた書きぶりや、説明の順序性について考えること、双括型の文章構成等、筆者の書き方の工夫も考えさせる。初めと終わりに書かれた筆者の主張を読む際には、「題名に使われる言葉」「繰り返される言葉」「強調された語尾」に着目させながら正しく主張を読み取らせていく。本教材では、「アップ」「ルーズ」「伝える」「選んだり組み合わせたり」「～のです。」という言葉に着目させて筆者の主張を読み取らせる。また、終わり部分には、筆者からのメッセージが強く書かれているので、筆者のメッセージは、生活の場面のどんな所でどのように生かされるのかということにも触れたい。

2つ目は、筆者の主張に対する自分の考えを書く力である。まず、主張に対して、納得や共感をしたのか、疑問をもったのか等、自分の立場を明確にさせる。納得や共感、疑問点について、その理由を明確にしながら自分の考えを分かりやすく書く力を育てたい。筆者の主張と自分の考えを分けて考えることが難しい児童が多くいることが予想されるため、今回は、フォトカードを使って書かせる。フォトカードとは、筆者の顔写真から出た吹き出しには筆者の主張を、自分の顔写真から出た吹き出しには、自分の考えを書かせるカードである。筆者と自分の写真を貼ることで、視覚的に違いを捉え、主張と考えを書きやすくする効果がある。筆者の主張と自分の考えを分けて書くこと、主述を正しくして書くこと、理由を明確にして書くことをねらいにして書かせたい。

4. 単元目標と評価

<table>
<tr><td>単元目標</td><td colspan="2">○考えとそれを支える理由や事例、全体と中心など情報と情報との関係について理解することができる。【知(2)ア】
○段落相互の関係に着目しながら、考えとそれを支える理由や事例との関係などについて、叙述を基に捉えることができる。【思C(1)ア】
○接続する語句の役割、段落の役割について理解することができる。【知(1)カ】
○文章を読んで理解したことに基づいて、感想や考えをもつことができる。【思C(1)オ】</td></tr>
<tr><td rowspan="2">評価規準</td><td>知識・技能</td><td>・接続する語句の役割、段落の役割について理解している。【(1)カ】
・考えとそれを支える理由や事例、全体と中心など情報と情報との関係について理解している。【(2)ア】</td></tr>
<tr><td>思考力
判断力</td><td>書くこと</td><td>・筆者の主張に対して、納得か疑問を持ったか、立場を明確にして考えを書いている。</td></tr>
</table>

	表現力等	読むこと	・段落相互の関係に着目しながら、考えとそれを支える理由や事例との関係などについて、叙述を基に捉えている。【C(1)ア】 ・文章を読んで理解したことに基づいて、感想や考えを持っている。【C(1)オ】
	主体的に学習に向かう力		粘り強く、考えとそれを支える理由や事例との関係について、叙述を基に捉え、学習の見通しをもって、自分の考えを伝え合おうとしている。

5. 単元構想（全12時間）

構想の柱	単元の流れ	指導上の留意点	評価
筆者の主張を捉え、それに対する自分の考えをまとめる	**〈みつける・みとおす〉4時間** ・筆者の考えを捉えて、自分の考えをもつという単元の見通しをもち、「思いやりのデザイン」を読む。 ・初めと終わりを読み、筆者の主張を捉える。 ・「中」の部分を対比しながら読む。 ・筆者の主張に対する自分の考えを書く。	○題名読み後、はじめ・中・終わりの構成、説明の大体を捉えさせる。 ○初めと終わりに着目させ、双括型の文章構成を捉えさせる。隠れた問いを考えさせる。 ○題名、繰り返される言葉、強調される語尾に線を引き、主張を捉えさせる。 ○図と文章の関連を考えながら、本文を例に何と何を対比させているか、読ませる。 ○筆者の主張と自分の考えの違いを捉えやすくするため、写真を入れたフォトカードに書かせる。	・題名に着目して説明の内容を考えている。 ・題名、繰り返される言葉、語尾に着目し、主張を捉えている。 ・図と文章を対応させ、線で繋いでいる。 ・3と4段落、段落内での対比に気づいてまとめている。 ・自分の立場を明確にして考えを書いている。
	〈ふかめる・ひろげる〉 7時間 ・「アップとルーズで伝える」を読み、説明の大体を捉える。 ・はじめと終わりに着目し、筆者の主張を捉える。 ・写真と文章を対応させながら読む。 ・アップとルーズを対比しながら中の部分を読む。 ・筆者の文章の書き方について検討する。(2時間)【本時6/7時間】 ・筆者の主張に対する自分の考えを書き、交流する。	○題名読み後、初め・中・終わりの構成、説明の大体を捉えさせる。 ○双括型の文章構成を確認し、題名・繰り返される言葉・語尾に着目して主張を捉えさせる。 ○写真と文章を線で繋がせ、写真のどの部分の説明をしているのかを明確にさせる。 ○アップとルーズを対比して説明している段落を確認し、接続語に着目しながら違いを明確にさせる。	・題名に着目して説明の内容を考えている。 ・題名、繰り返される言葉、語尾に着目し、主張を捉えている。 ・写真と文章を対応させ、線で繋いでいる。 ・4と5段落、段落内での対比に気づいてまとめている。

		○段落同士の対比、段落内での対比に気づかせ、内容を正しく捉えられるようにする。 ○対比、順序性、写真と文章の対応等、読者に考えがより伝わるよう工夫して書いていることをおさえる。 ○筆者の文章の書き方について検討する際は、自分の立場を明確にさせ、理由を具体的に書かせる。 ○自分の考えを書く際は、納得や共感、疑問等、自分の立場を明確にし、理由とともに書かせる。	・対比、順序性、写真と文章の対応等、筆者の書き方の工夫を考えている。 ・自分の立場を明確にして考えを書いている。
	〈ふりかえる〉1時間 ・8段落について以前の教科書の8段落と比較して読む。 ・情報「考えと例」を読み、例を挙げた文章を書く。	○なぜ、中谷さんは、8段落を書き替えたのかと問う。より具体的に、そしてメッセージ性が強くなっていることをおさえる。 ○伝えたいこととその例との結び付きを考えて書かせる。	・より具体的にそしてメッセージ性が強まっていることに気づいている。 ・教科の例文をもとに、例を挙げて文章を書いている。

6. 本時の学習（〈ふかめる・ひろげる〉 9／12 時間）

（1）本時の目標

・アップとルーズは、それぞれにできることとできないことがあり、自分が伝えたいことに合わせてアップとルーズを選んだり、組み合わせたりする必要があるという筆者の主張を踏まえ、問題点を書く必要性について自分の考えを書くことができる。

・自分の立場を明確にし、自分の言葉で考えを伝えることができる。

（2）本時の展開

学習活動	指導上の留意点	評価
1. 前時の学習の確認をする。 【アップ】 細かい部分の様子がよく分かるが、うつされていない多くの部分のことは分からない。 【ルーズ】 広い範囲の様子がよく分かるが、各選手の顔つきや視線、それらから感じられる気持ちまでは分からない。	○4・5段落を読み、アップとルーズのそれぞれの「分かること」「分からないこと」をふり返らせる。 ○アップとルーズの対比、アップの中でも、「分かること」「分からないこと」を書き、対比していることをふり返る。	・アップ、ルーズそれぞれに「分かること」「分からないこと」をふり返り、伝えている。
2. なぜ、中谷さんは、アップとルーズの良い点と問題点の両方を書いたのか考え、交流する。	○それぞれの良い点だけを書けば、十分に伝わるのであって、わざわざ悪い点まで書かなくてもよいのではないかと投げかける。悪い点は必要かと問う。 ○教師の投げかけに対して、必要か必要でないか立	・必要か必要でないか立場を明確にして、自分の考えを書いている。

1人→ペア→全体	場を明確させる。自分の価値判断を大切にして、考えを書かせる。	
なぜ、中谷さんは、アップとルーズの良い点と問題点の両方を書いたのか考えよう。		
【必要】 ・両方を書くことで、どちらを使うか選ぶことができるから。 ・問題点を書かないと、問題がないのではないかと勘違いするから。 ・説明文は事実を伝えなければいかないから。 ・自分が送り手になった時に、よりよい方を選んで使えるようにするため。 ・中谷さんは、8段落でメッセージを送っていて、伝えたいことを分かりやすく伝えるためにアップとルーズを選んだり組み合わせたりすると言っているから。 【必要でない】 ・良い点だけが分かれば、それを生かして選ぶことができるから。 ・良い点だけを書くと、文章がすっきりして分かりやすいから。	○考えを書く際には、根拠となる部分を教材文から見つけながら考えさせる。 ○ペアで意見を交流する際には、自分の考えと同じか違うかという点を明確にしながら聞き分けさせる。 ○同じような考えが続く際には、今まで出た言葉と違う言葉を使って伝えるよう促す。	・立場を明確にし、自分の考えを伝えている。 ・友達の考えと同じか違うかを聞き分けながら交流をしている。
3． 問題点の働き（役割）をまとめる。	○意見交流を通して、アップとルーズの問題点を書くことは、どんな働きがあると思うか最終的に自分の考えを書かせる。「働き」が難しい場合は、「役割」として考えさせる。 ○説得力、2つ目の例、主張をより分かりやすく伝えるため等、筆者が自分の主張をより分かりやすく伝えるためにという視点で書いているかを評価する。	・自分の主張をより分かりやすく伝えるという視点で考えをまとめている。

討議の柱

言葉を増やし、言葉にこだわり、思考を深める子どもを育てるために、わざわざ悪い点まで書かなくてもよいのではないかと、その必要性を投げかける発問と、その後の教師の授業展開は、子どもたちにとって効果的であったか。

第4学年 国語科 全校研究会　授業事後研究会記録

1．学校長より

・吉川先生のご紹介

・特別活動を研究して13年目、もう一度言葉について学ぶ。

・昨年度末の研修会で吉川先生に指導いただいて以降、言葉にひたむきに向き合う子どもを育てようと、根拠・理由を言うことを求めてきた。また教師が教科書を持ち、教科書の文字を指でなぞりながら読み深める姿を子供に見せることも実践しているところである。

2．授業者より

・3回書く活動を入れていた。最初にまず何が書かれていたのかを捉え、ペアで話をして交流する。
次に進もうか迷ったけれど、最後の1回は入らなかった。子どもたちの学習の進み具合を考えると難しかった。
理由を書くことが難しかった。
「本文に戻って読みましょう」と言うとさらに難しい子がいたので今日は言わないようにした。
書くことに課題を感じる。何を書けば良いのかわからない子が6、7名。
筆者の書きぶりの工夫までいきたかったけれど、4月から説明文の読み方を学習するので精一杯でそこまでいけていない。クリティカルに読むのは初めての経験だと思う。前の教科書では8段落はもっと簡潔だったが、今はメッセージ性が強くなっているので、そこを読み取らせたい。
要旨について書くとなると難しいと思うので、みんなに何か伝えたいときどうしたら良いのかを考えていく。
子どもたちが、ほかの子と意見をつなげるというのはまだまだできていないのでこれからの課題。

【質疑応答】

Q：前時について、書いてあることがわからなかったというのはどういう感じか？

授業者 A：全く違う例を出したり、ずれている、かけはなれたことを書いてある子がいた。
そのことへの支援や指導も難しい。

3．グループ交流

＜グループⅠ＞

・基本的な声の出し方が光っている子がいた。先生が鍛えているのがわかる。

・友達が言うことを聞こうとする姿勢が、他学級と比べると多い感じがする。全校で大事にしていきたい。

・A さんの意見は教科書の内容から離れていることなのでばっさり切るか、教科書ではどこにそのことがあるか問うてもよかった。

・自分の立場を名札で貼る手立ては、効果的だった。意見が変わった子はどこで変わったかを知りたかった。

・書く力がついてきているなと感じた。低学年では何を書くかわからない子が多い。

＜グループⅡ＞

・挨拶の仕方、声の大きさ、ノートの書き方など、日々の指導の成果が表れている。

・「7段落を書かなくてもよい」⇒あなたはどう思う？・・・「自分は」で考えたのでは？
筆者にとって必要かどうかを問うのがよかったのではないか

・学校全体で取り組むこと・・・自分の言葉で伝えること。書くのが難しい低学力の子たちをどうするか。
・切り替えのところで、いろいろな言い換えをしたり、例を出したりして、言葉の力がついていく。

<グループⅢ>

・丁寧に取り組むことを徹底させているのが伝わる。
・「確認読み」のあと、写真の例は本当に必要なのか?と問えばよかったのではないか。

<グループⅣ>

・学習規律、学習に対する姿勢、文字の丁寧さなど子どもに良い変化が見えているのはさすが。
・子どもたちは教科書に書いていることは正しいと思っているため、批判的に読むことは子どもたちにとって新鮮だったと思う。
・キーワードに〇をつける活動だが、教科書に書かれているすべての言葉が大事だと思っている子もいるので、ほとんど〇を付けている子もいた。「この言葉が一番大事」と思って辞書で調べている子もいたので、語彙が少ない子をどう育てていくか。そこからどう深めていくかがこれからの課題。
辞書を使って正しい言葉の理解ができると良い。

<授業者より>

・キーワードは、「何度も出てくる言葉、題名、初めて出てくる言葉」と教えていたが、確かにたくさん出てきたので、そこに順序をつけても良いかなと感じた。
・言葉の言い換えをする時は、自分で考えてから辞書で調べるようにしている。

4. 吉川先生より

・1学期初めのまだ学級づくり期間に、先生の授業を見せていただけるのを楽しみにしていた。
素晴らしい授業の裏には、それまで徹底的に教え込んで教え込んで鍛えているプロセスがある。
今日の授業から何を学び取るのか、それぞれ考えてほしい。

<指導案について>

・「本時の目標」はやや長いが、「何を読み取るのか」を具体的に書けているのが良い。そのことを曖昧にせず、明確に書く。
・「指導上の留意点」も詳しく書いてほしい。本時で留意しなければならないことを書く。どの授業でも使える一般的な言葉では書かない。本時の目標を達成するための手立てを詳しく書く。
・国語科の評価規準では「主体的に学習に取り組む態度」　×主体的に学習に向かう力

<授業から感じたこと>

話す

・理由を書いたあとに、ペアで話す場面があった。
この時、子供に書いたものを読ませないでほしい。自分の言葉で話す。話し合い。書いたことは書いた時の、つまり過去の考え。書いたら終わり。

書く

・筆者の考えに〇をする活動は、しんどい子もできる「書く活動」。
・「書く」活動にも、様々ある。読むために書く、書き込む、書きだす、線を書く・・・多彩に多様に「書く」を使う。
短く書く、長く書くなどを子どもたちの実態に応じて使い分ける。メモをとる力もそう。メモをとるスキルは特別活動でも鍛えられる。特活から国語に逆流してもよい力。

読む

・「読む」活動にも様々ある。

・「確認読み」・・・7段落までは何が書いてあったのかを問うたことは良かった。
一方で「どんなことが書いてある?」という発問では選びにくかった。
7段落だけ独立して考えても分かりにくい。
文章全体と部分の関係性を捉えられるようにしたい。
全体を捉えることはもちろん、部分として何を書いているのかを読み取らせる。
ただし、子供たちにとって、読みながら何を書いているのかを同時に確認するのは難しい。
先生が読むのを聞きながら線を引くなどの作業をするのが良い。
(子どもの実態によるが) 音読をさせると、ただ「読むことに集中してしまう」傾向にあることを分かっておく。

・「批判的読み」・・・①なぜ筆者は~したのか?問う　②私は~~と考える　の2種類ある。
指導案と板書では、発問が違った。
①なぜ筆者は?の方を読めるようになってほしい。
②の私は・・の方が簡単。
本当は①と②を行き来するので、それができるようになってほしい。
「必要か必要ではないか」を問うのではなく、「7段落があるのとないのでは、何が違うのか?」「なければどう不都合か?」を問う。
7段落を抜いた分を音読しても良い。

・切りかえる
選ぶ
組み合わせる
を伝えたいことに合わせて選んでいる。

これは、新聞も動画も一緒。しかし新聞の場合は「目的にいちばん合うもの」を選んでおり、動画は「目的に応じて」選んでいるという違いがある。
子供達にも、「言葉は似ているけど、どう違うか」を分からせていく。
そして「でも全てつながっている」ことにも気付かせられるようにする。

【全校研究会】

第2学年1組 国語科学習指導案

指導者 澤田 強志

1. 日時　2026年10月2日（金曜日）　第5校時

2. 単元名 ふたりのお話を しょうかいしよう 広がれ読書のわ
教材名 「お手紙」

3. 授業づくりの視点

（1）教材分析

本教材は、友だちの不幸せをいっしょに悲しむ、やさしい「かえるくん」と、手紙なんて来ないと悲しみ、いじけている「がまくん」の心のつながりを描いた作品である。特別な事件が起こるわけでもなく、4日遅れの、しかも内容が分かっている「お手紙」を二人が仲良く待ち続ける姿から友だち同士の心のつながりを読み取り、想像することができる。また「ふしあわせ」「かなしい時間なんだ」「しあわせな気持ちで」など心情をわかりやすい言葉で表現しているため、低学年の児童にとっても心情の変化が捉えやすい作品である。アーノルド・ローベルの作品には、「お手紙」以外にもがまくんとかえるくんが登場するお話がある。同じ登場人物が出てくるので、児童は親しみを持ちながらお話を読むことができ、読書を広げるきっかけになることが期待される。

（2）児童の実態

本学級の児童は、待ち時間や休み時間に読書したり、教師が紹介した絵本を読んだりなど、進んで読書する児童が多い。1学期「スイミー」の学習において物語の世界を楽しみながら学習に取り組み、さらにレオ・レオニの他作品にも触れることで、同じ作者の作品を読む楽しさを感じ始めている。一方で、物語ではなく、図鑑などを読むのが好きで、なかなか読書の幅が広がらない児童もいる。授業で扱う教材に関わるお話や本を紹介し、学級文庫に用意しておくことで気軽に読書に取り組む環境を整えている。より多くの本に触れ、読書の幅を広げようと取り組んでいるところである。

授業では、言葉から人物の気持ちを想像することや、自分が読み取ったことや考えたことを文章に書いて表現することに難しさが見られる。まず、自分の思いを表現豊かに伝えられるようになってほしいと考え、適切な言葉を選んだり、語彙を広げたりする学習や活動を積極的に取り入れている。「どうぶつ園のじゅうい」の学習では、「そっと」「大いそぎで」など形容詞に着目させ、そこから筆者である獣医がどのような思いで治療しているのかに迫り、動物の健康を守り、動物の命を守りたいことに気づいていた。「やっと」を別の言葉で言い換えるとどんな言葉があるかなと問いかけ、「とうとう」「ついに」が同じ意味であることに気づいた。言葉に親しみ、語彙を増やす遊びにも取り組んでいる。

これまで、学習のめあてに対する学びや分かったこと、自分や友達の頑張りなど観点を示しながら、ふり返りを書く指導を重ねてきた。それでも考えを根拠と結び付けて表現する力はまだ十分に身に付けられていない。本単元では、登場人物の言葉や行動から思いや気持ちを想像し、根拠をもとに理由を述べ、語彙を増やしながら自分の考えを表現する力を培うことをねらう。物語の構成を捉え、登場人物の心情の変化を読み取る力を身に付けることで、一年を通して、物語から想像を膨らませ、読書を楽しめるように取り組んでいるところである。

（3）指導にあたって

本単元では、「もっと本を読みたい」「本が好き」と感じる児童を増やすことをねらいとして、単元の初めからアーノルド・ローベルの作品の並行読書を行う。また、第3次では言語活動として、自分の好きな「ふたりは～」作品（がまくんとかえるくんシリーズ）を紹介するカードを作成し、友達と紹介し合う活動を設定している。完成したカードを学校図書館に掲示して全校生に見てもらう。全校生の読書が広がるきっかけになるかもしれないという気持ちからわくわくしながら取り組めるようにしていく。自分のお気に入りの場面について紹介したり、「お手紙」と他作品との共通点や相違点を見つけたりすることを通して、同じ作者の作品を読む面白さや読書の楽しさを味わえるようにしたい。 そのため、単元を通して本文中の会話や行動などの叙述を基に、感じたことや考えたことを直接書き込めるワークシートを活用して「自分読み」の時間を取る。素直に感じたことや気づいたことを言葉にする練習を重ね、自分の考えを構築する手掛かりとする。

第3次で作成するお話紹介カードでは、「お気に入りの場面」と「『お手紙』と比べて気づいたこと」を書かせる。まず「お気に入りの場面」では、本文中の好きな場面の様子や会話文を抜き出し、お気に入りの理由を書く力を段階的に身に付けさせる。叙述や言葉から想像したことを交流することで、心情理解を深めていく。次に「『お手紙』と比べて気づいたこと」では、登場人物の心情・行動・二人の関係性を観点として、共通点を探させていく。例えば『お手紙』では、悲しむがまくんを思いやって行動したかえるくんの手紙によって、二人とも幸せな気持ちになる「お互いを大切に思い合う関係」が描かれている。『おちば』では、お互いに内緒で相手の庭の落ち葉を掃除する「相手を思って自ら行動するお互いの姿」が描かれており、「お手紙」と共通するお互いを大切に思い合う関係を読みとることができる。このように、同じ登場人物であっても作品によって行動や心情が異なり、新た

な魅力に出会ったり、文学を深く読んだりする面白さに気づかせたい。第3次の冒頭では教科書掲載の『おちば』を用いてカードの書き方や比較の観点を全体で確認してから、児童が選んだ作品の読み深めへとつなげていく。

また、本校の研究テーマである「支え合い　高め合う　仲間づくり～言葉を増やし、言葉にこだわり、思考を深める～」の実現に向け、本単元では次の2点に取り組む。１点目は、学習の中で出てきた大切な語彙や表現を「言葉の宝箱」としてホワイトボードに掲示し、いつでも参照できるようにすることである。例えば「親愛なるがまくん」「大急ぎで」「窓をのぞきました」など、人物の様子や行動を具体的にイメージできる言葉に着目させ、それらを手がかりに音読の工夫を考えたり心情を想像したりさせたい。２点目は、すべての時間において「叙述から行動をイメージし、そこから心情を想像する」という思考のプロセスを定着させることである。書きこみ用のワークシートを活用し、がまくんが悲しい気分になったわけは、どこから分かるだろうと問い、叙述からわかるところに線を引かせる。「〇ページの〇行目に 「毎日、ぼくのゆうびんうけが空っぽさ。お手紙をまっているときがかなしいのは、そのためなのさ。」と書いているからがまくんは悲しい気持ちだと思います。」というように、叙述を根拠に自分の意見を述べることができるようにしたい。

本時では、まずがまくんの気持ちが、不幸せな気持ちから幸せな気持ちに変わったことを確かめ、変わった理由を、本文の叙述を元に考えさせる。かえるくんががまくんのために手紙を書いてくれたことやかえるくんの書いた手紙の内容、２場面でのかえるくんの行動などを根拠にあげることが予想される。意見を交流することで、がまくんの心情の変化が、かえるくんのがまくんを思いやる行動や手紙によるものであることを確かめる。そして、「気持ちが変わったのは、がまくんだけなのか」と問うことで、「ふたりとも」「ふたりは」というかえるくんも幸せな気持ちになっていることがわかる言葉に気づかせ、かえるくんは親友であるがまくんが喜んでくれたこと自体を自分の幸せと感じていることを読み取れるようにしたい。最後には、読み深めたことを音読で表現する時間を取る。ふたりが不幸せな気持ちから幸せな気持ちに変わったことがわかるように読むように声をかけ、心情に合わせて声を大きくしたり小さくしたり、ゆっくり読んだり早く読んだりしている児童を評価し、児童の学びを見取っていく。

お話紹介カードを書く際には、「お手紙」と比較することで、どの作品にも共通する二人のお互いを大切に思う関係をより深く感じさせ、読書の面白さを味合わせたい。

4. 単元目標と評価

<table>
<tr><td>単元目標</td><td colspan="2">〇主語と述語の関係に気づきながら読み、場面の様子に着目して、叙述から登場人物の行動を読み取り、心情を具体的に想像することができる。【思 C（1）エ】
〇お話紹介カードを、お気に入りの場面、「お手紙」との共通点や相違点などの観点に沿って書くことができる。【思 B（2）イ】</td></tr>
<tr><td rowspan="5">評価規準</td><td colspan="2">知識・技能</td><td>〇場面、登場人物の会話や行動の叙述から心情を想像し、中心人物の変容に気づいている。【（1）オ】
〇文の中における主語と述語との関係に気づいている。【（1）カ】</td></tr>
<tr><td rowspan="3">思考力
判断力
表現力
等</td><td>話すこと
聞くこと</td><td>〇自分の考えと比べながら、友だちの意見を聞いている。
〇自分の意見について根拠を挙げながら、話している。</td></tr>
<tr><td>書くこと</td><td>〇アーノルド・ローベルの他作品を紹介する文章を本文中から根拠をあげながら書いている。【B（1）エ】
◯教材文を読んで気づいたことや考えたことを書いている。</td></tr>
<tr><td>読むこと</td><td>〇場面の様子に着目して、登場人物の行動や様子から、心情を具体的に想像している。【C（1）エ】
〇「お手紙」と他作品を比較し、物語の構造や登場人物の心情について共通点や相違点に気づいている。</td></tr>
<tr><td colspan="2">主体的に学習に取り組む態度</td><td>〇叙述から読み取った様子や心情を音読で表現しようとしている。
〇「お手紙」と比べながら、共通していることや違うことをに気づき、お話紹介カードを書こうとしている。</td></tr>
</table>

5. 単元構想（13時間）

	単元の流れ	指導上の留意点	評価
アーノルド・ローベル作品を多読し、二人の関係を読みとろう	**〈みつける・みとおす〉 3時間** 1.「お手紙」を読み、初発の感想を書く。 2. 感想を交流し、問いを確かめる。 問いを元に学習計画を立てる。 アーノルド・ローベルの作品紹介カードを作り、学級で紹介しあい、図書館で掲示してもらうというゴールを共有する。 「おちば」と「ふたりは～」シリーズのお話を読む。 3. 物語の全体構成を捉える。場面を分け、誰が、どこで、何をしたり、言ったりしたかを確かめる。	○感想を書く観点を示す。 ・不思議だなと思ったこと ・心に残ったこと ・みんなで考えたいこと ○児童の感想から問いを立て、学習計画に組み込むようにする。 ○教師が作成したお話紹介カードを例示し、具体的なイメージを持てるようにする。	・お話紹介カードの作成に意欲を持って取り組もうとしている。（記述）
	〈ふかめる・ひろげる〉 5時間 4. なぜがまくんが悲しい気分になっているのか考える。 ・気づいたことを書きこむ。 ・がまくんが悲しい気分である理由を確かめ、かえるくんも悲しんでいることに気づく。 5. かえるくんの行動の様子から、かえるくんのがまくんへの思いを捉える。 ・気づいたことを書きこむ。 ・かえるくんの大急ぎで手紙を書く行動から、がまくんに対する優しさに気づく。 ・気持ちを想像して音読する。 6. 3 回もまどの外を見るかえるくんの心情を捉える。 ・気づいたことを書きこむ。 ・かえるくんの 3 回窓から外を見る行動から、かえるくんのがまくんに喜んでもらいたい気持ちを想像する。 ・気持ちを想像して音読する。 7.【本時7/13時間】 ・がまくんの気もちがかえるくんの行動や手紙の内容について変わったことを確かめ、本文の叙述からふたりとも幸せな気持ちになったことに気づく。 ・気持ちを想像して音読する。 8. 4 日間二人は、どんなことを話しながらお手紙を待っていたか想像し、手紙はすぐ届いた方がよかったのか考える。	○文章中の言葉から、気づいたことや思ったことを素直に書くように促す。 ○「大急ぎで」と「急いで」では、どう違うのか考えさせ、かえるくんが、がまくんのために行動していることに気づき、二人の関係を捉えさせる。 ○「窓を見た」「窓をのぞく」の言葉の違いに注目させ、動作化することで、言葉からかえるくんの心情を想像できるようにする。 ○がまくんが幸せな気持ちに変化した理由を確かめ、かえるくんも幸せな気持ちになった理由を考えることで、ふたりのお互いを大切に思う気持ちに気づくことができる。 ○本文の言葉や文を根拠に、想像できるように、行動や会話文に注目させる。	・ 文の中の主語と述語の関係に気づいている。（発言・記述） ・場面、登場人物の会話や行動の叙述から心情を想像し、中心人物の変容に気づいている。 （発言・記述） ・読むことにおいて、登場人物の行動から具体的に心情を想像している。（発言・記述） ・友だちの意見と自分の意見を比べながら、聞いている。（発言） ・自分の意見について、根拠となる箇所を示しながら話している。（発言） ・叙述から読み取った様子や心情を音読で表現しようとしている。 （音読・記述）
	〈ふりかえる〉 5時間 9.「おちば」を読み、「お気に入りの場面」、「お手紙と比べて」の観点でお話紹介カードを書く。	○教師の書いた見本を提示することで、書く観点がわかるようにする。 ○書き方の話型を示し、書き方がわかるようにする。 「（本文から抜き出す）がお気に入りです。わけは、～だからです。」	

	10.紹介する作品を選び、伝えたいことをワークシートにメモする。 「よていひょう」「なくしたボタン」 「たこ」「クッキー」 11.メモを元に、カードに文章と絵を書く。 12.発表の練習 13.学級で交流して、ふり返りをする。	○「よていひょう」「たこ」「クッキー」「なくしたボタン」の4つの物語から選ぶことで、同じお話を選んだ友だちと協力しながら取り組めるようにする。	・「お手紙」と比べ、共通点にに気づき、お話紹介カードを書こうとしている。(記述) ・「お手紙」と他作品を比較し、物語の構造や登場人物の心情、二人の関係について共通点に気づくことができる。(記述)

6.本時の学習(〈 7〉 ／ 13時間)

(1)　本時の目標

・かえるくんも幸せな気持ちになった理由を考えることで、ふたりのお互いを大切に思う気持ちに気づくことができる。

(2)本時の展開

学習活動	指導上の留意点	評価
1.音読をする。 **2.がまくんの心情の変化を捉える。**	○がまくんの心情の変化が捉えやすいように1場面と3場面の後半を読む。 ○挿絵と文章からがまくんが悲しい気持ちから幸せな気持ちに変化していることを確かめる。	
なぜ がまくんの気もちが かわったのか考えよう。		
3.なぜがまくんの気もちが変わったのかについて、自分の意見をノートに書き、交流する ・かえるくんが手紙を書いてくれたからです。 ・かえるくんが手紙に親友だと書いてくれたからです。 ・2 場面でおおいそぎでがまくんに手紙を書くために家に帰っていたからです。 (ペア→全体)	○根拠となる部分に、線を引かせることで、自分の意見についての根拠を示しやすいようにする。 ○意見を言う際には、話型を示して、本文から根拠をあげて話すように伝える。 「わたしは～と思います。わけは○ページの○行目に～と書いてあるからです。」 ○手紙の内容の文章にも注目できるように、黒板に掲示しておく。 ○自分の考えを持つのが難しい児童には、3 場面のがまくんの手紙をもらう前と後の会話文に注目させ、その間の出来事を一緒に確かめる。	・本文の叙述を根拠にして、意見を書いている。(記述) ・友だちの意見と比べながら聞いている。(発言、様子、メモ) ・友だちの意見とつなげて発言している。(発言)
4.変わったのは、がまくんだけなのか考える。 ・いや、かえるくんも変わっているよ。 ・「ふたりとも、しあわせな気もちで、そこにすわっていました。」と書いているから、かえるくんも変わった。	○手紙をもらったのはがまくんなのに、なぜかえるくんも含めて、ふたりがしあわせな気持ちになったのか問うことで、かえるくんはがまくんが幸せな気持ちになったことが嬉しく、ふたりで幸せな気持ちになったことに気づかせる。 ○「ふたりとも」「ふたり」という言葉に注目させることで、1場面から3場面にかけて、ふたりともかなしい気分からしあわせな気持ちに変化したことに気づかせる。 ○「お手紙」がどんなお話か尋ねることで、二人のお互いを大切に思い合う関係に気づかせる。	・がまくんだけでなく、かえるくんもしあわせな気持ちになっていることに気づいている。(発言) ・二人の心情の変化に気づいている。(発言)
5.二人の気もちの変化がわかるようにペアで音読して、聞き合う。	○本時で確かめた悲しい気持ちから幸せな気持ちの変化がわかるように音読するために、声の大きさや読む速さを工夫すればよいことを確かめておく。 ○工夫が難しい児童には、気もちの変わったがまくんの「ああ。」「いいお手紙だ。」の会話文をどのように読んだらいいか考えさせる。	・二人の幸せな気持ちや関係性を、声の大きさやトーンなどの工夫に込めて音読しようとしている。(音読・様子)

7.討議の柱

○言葉を増やし、言葉にこだわり、思考を深める子どもを育てるために、気持ちが変わったのは、がまくんだけなのか問うことは有効であったか。

○児童一人一人にどのような学びがあったのか。

第２学年　国語科　全校研究会　事後研究会記録

Ｉ．授業者より

・この教材を学習するにあたり、二人の関係性をきちんと捉えることを大事にしていた。そこが今後の学習にも重要だと思っている。そうした上で、今日は「かえるくんの気持ちも変わったか」と問うた。これが有効であったか否か、考えてもらいたい。
・実は、手紙の内容を知ったがまくんが「あぁ。」と言うところに着目させて、音読で表現するという内容をしたかったが、台詞としてあまりに短く難しいのではないかと、本日の内容に変更した。最後の音読が長すぎたので、絞っても良かった。ふり返りとして音読をすることは良かったのか、意見を聞きたい。
・授業中に児童一人一人を見とることが難しいのが、自分の課題。児童一人一人がどのように学んでいたのか、成長していたのかを知りたい。

２．グループ交流

・「気持ちが変わったのは、がまくんだけ？」と問うたのが教師からだったので、子供から意見が出ると良かった。挿絵に気付かせるところも、先生が見るように言っていた。
・ノートに考えたことを書く際、「何ページの何行目に～とある」と書くのはしんどいので、根拠となる箇所に線を引き、ノートには考えたことだけを書かせると良かった。
・「気持ちが変わったのは、かえるくんもである」というところは、取り扱って良かった。がまくんとかえるくんの「どちらが、より大きく変わった？」と問うても良かった。
・「二人とも」か「二人は」の違いは、もう少し確認しても良かった。
・がまくんが変わった根拠を探す際に、Ｉ場面と４場面ではなく、Ｉ場面と３場面で比べたら良かった。
・音読が上手な子供が多かった。音読でふり返りをということだったが、子供が考えたことなどが反映されていたかは分からなかった。
・最後のふり返り音読は、やや長かった。あの時間を短くして、子供が発表したら良かった。
・最後のふり返り音読は、厳選した部分を読ませたら良かった。ふり返り音読が場面読みだったので、「あぁ。」を読めない子が「自分もそこを読みたかった」と呟いていた。また子供から「これがふり返りになるのかな…」という声もあった。

３．吉川先生より

・子供たちは、よく頑張っていた。音読の声が良かった。書くこともしっかりできていた。ペアでの話し合いも、しっかり話し合えていた。ふり返りの音読も、４人で読むという活動自体は良くできていた。

＜授業内容について＞

・低学年の文学教材なのに、抽象的で説明的だった。もっと楽しませてイメージさせて欲しい。
この物語の楽しさを感じて「面白かったなぁ」と子供たちが言えるようにして欲しい。
・先生の表情がかたい。笑顔が欲しい。子供たちとの相乗効果で、笑顔溢れる授業にして欲しい。

音読

初めの音読は指名読みだった。指名されていない子の中に、きちんと読めていない子がたくさんいた。先生は、そうしたことを見逃さないことが重要。やらせないと読めるようにならない。聞いている子の中には、文章を指でなぞっている子がいた。その読み方はやめさせる。
その読み方をしていると、単語レベルでしか内容を捉えられない。まとまりを捉えながら読ませていく。
きちんとした音読の仕方を徹底して、できたら笑顔で褒める。

発問について

・「なぜ、がまくんの気持ちが変わったのか考えよう。」という主発問は、「手紙をもらったから」で終わる。大事なのは手紙の中身。これだけの分量が書ける子供たちなのだから、「なぜ、このお手紙が良いのか」ということをもっと考えさせるべきだった。考えた内容を書かせたかった。
・「私は…と思いました。それは〇ページの△行目に～と書いているからです。」と子供たちは頑張って話していた。しかし、深い読みが全くできていない。「教科書のここに書いてあります」と見つけただけ。「～と書いてあるから…と思います。」の続きに、「なぜなら―――だからです。」と続けさせることが重要。
本文からどういう解釈をしたのかを子供たちに言わせなくてはいけない。
「ここに書いてある」ことから、「自分は～と考えた」をセットにして話せるように育てる。
・「何ページの何行目に…」と言わず「何場面に…」と言えば良い。友達がそう言ったら、すぐにどこのことか分かるくらいには鍛えておく。

＜考えさせポイント例＞

（１）「親愛なる　がまがえるくん」の「親愛なる」について、他の言い方を３つ考えてみよう。

→　大好きな／大切な／仲良しの／特別な／親しい・・・

⇩

T「その言葉を入れて、音読してみよう。どうしてそんな読み方をしたのかも伝えよう。」

POINT 誤読していない限り、自由に考えて音読して良い。

聞いた子供は、相手が言ったことに納得できなくて良い。

「そんな考えもあるのか」と感じることが大事。

（２）「きみの親友　かえる」の「きみの」がなかったら、だめなのか？

→　教師Ａ「がまくんが自信を失っているので、「きみの」とつけたのだと思います。」

（３）かえるくんは、手紙の内容をがまくんに伝える時、どんな風（どこを見て？　動作は？）に伝えたのだと思う？

→　教師Ｂ「手を握って、見つめながら伝えたと思います。」

教師Ｃ「がまくんがずっと欲しがっていた手紙の初めてが自分で良いか自信がないから、少し下を見ながら伝えたと思います。」

教師Ｄ「手紙の内容をきちんと伝えようと、思い出しながら言ったと思うので、少し上を見ながら言ったのではないかと思います。」

教師Ｅ「自分が親友だと思っているがまくんが目の前でとても悲しんでいて、言葉で励ましても届かないから、もどかしく思っている。だから目をしっかり見つめて、これだけ大事に思っていることが届いてくれ～という思いで伝えたと思う。」

どんな風に伝えたかは、どこにも記載されていないから、想像するしかない。

「なぜそんな風に想像したのか」を共有できることが大切。

（４）「とても いいお手紙だ」の続きに、どんな言葉を言っただろう？

（５）「ふたりとも、とても、幸せな気持ちで、そこに座っていました。」と書いてあるけれど、どんな風に過ごしていたのかな？　ずっと黙っていたのかな？　歌を歌ったりしたのかな？　話していたのかな？　どうしてそう思ったのかも話しましょう。

２年生なりにいろいろな解釈ができるように、イメージを膨らませることが大切。

子供たちが２人の関係を概念的に説明するのは、年齢的に苦しい。

ふり返りとしての音読について

・最後に音読する範囲を、限定すれば良かった。

・授業の終了時刻を超過しても最後まで読ませていたが、チャイムが鳴ったところで終わるのが良い。

・今日は、はじめとふり返りに音読していた。

はじめの音読は、いわば確認読み。読み取ったことを反映させた読み方を最後にふり返りとしたいのなら、授業の中でも、考えたことを音読する時間を設けた方が良い。

板書について

・板書は、最後に子供たちが考えをまとめるために使うもの。

・板書は、本文の言葉と子供の意見を区別して書く。

今日は、白チョーク一色で全部が書いてあった。色で分ける。

・子供の意見を板書する時は、キーワードを書く。

‖

大切な言葉が際立つようにする。

・たとえば「がまくんも」「かえるくんも」だけを書き、子供が言った解釈は書かない。

板書で、本日の学びが分かる子に育てる。

４．質疑応答

Ｑ：板書に子供の解釈は書かないと教えていただいたが、どの程度書くのか？

吉川先生Ａ：たくさん板書して授業をした気になるのは、教師の自己満足。

たとえば「１５単語に絞って板書する」などをめあてにして、授業しても良い。

出てきた言葉を何でも板書できるわけではなくなるので、どの言葉を選べば子供たちの理解の整理に役立つかという視点が必要＝事前の教材研究が必須となる。

第1学年1組 国語科学習指導案

指導者　濵田 梨乃

1. 日時　2026年10月21日 水曜日　第1校時
2. 単元名 くじらぐも
3. 授業づくりの視点
（1）教材分析

本教材は、1 年生の児童にとって身近な雲や運動場を舞台に、空を飛ぶという空想の体験が描かれた物語である。「天まで とどけ、一、二、三。」といった声の繰り返しや、「ジャンプした」「手をつないだ」などの身体的・躍動的な表現が豊かに用いられており、1 年生が音読や動作化を通して物語の世界観を実感しやすい特徴をもっている。第 4 場面では、くじらぐもに乗って空から学校や街を見下ろしながら、空に浮かぶ解放感を味わう。自分たちの暮らす身近な風景と結びつけながら、想像を広げて気持ちや言葉を表現するのに極めて適した場面である。

（2）児童の実態

児童はこれまでに、物語の音読や動作化を楽しんだり、登場人物の台詞や気持ちを考えたりする学習に取り組んできている。明るく元気に声を出したり、身体を使って表現したりすることに意欲的な児童が多い。

一方で、場面の状況や登場人物の気持ちを言葉だけで具体的に想像することがまだ難しい児童もいる。そのため、板書の工夫や、動作化・役割演技を取り入れることで、すべての児童が物語の世界に入り込み、自分の言葉で豊かに表現できるように取り組んでいるところである。

（3）指導にあたって

物語の場面の状況や登場人物の気持ちを豊かに想像し、表現する力を育むため、言葉の響きや会話文「 」の働きに着目させながら叙述を基に想像を深められるようにする。また、動作化や音読、役割演技などの言語活動を積極的に取り入れ、身体表現を通して物語の世界に入り込み、友達と一緒に表現する楽しさや一体感を味わえるように工夫して指導する。

4. 単元目標と評価

<table>
<tr><td>単元目標</td><td colspan="3">○言葉の響きや繰り返しの面白さに気付き、場面の様子を表す言葉の意味を理解することができる。【知1ウ】
○場面の様子や登場人物の気持ちを想像し、自分ならどのような言葉をかけるか考えたり、気持ちをこめて表現したりすることができる。【思 C1 イ、ウ】</td></tr>
<tr><td rowspan="4">評価規準</td><td colspan="2">知識・技能</td><td>言葉の響きや繰り返しの面白さに気づき、場面の様子を表す言葉の意味を理解して読んでいる。【知1ウ】</td></tr>
<tr><td rowspan="2">思考力
判断力
表現力
等</td><td>書くこと</td><td>空からの景色の様子や登場人物の気持ちを想像し、くじらに乗っている気持ちになって、自分が言いたい一言台詞や伝えたい言葉を書き表している。【思 B1イ】</td></tr>
<tr><td>読むこと</td><td>場面の様子や登場人物の行動・気持ちを叙述から想像し、言葉の繰り返しや場面の移り変わりに着目して内容を捉えている。【思 C1イ、ウ】</td></tr>
<tr><td colspan="2">主体的に学習に取り組む態度</td><td>登場人物になりきって、動作化を楽しみ、友達と協力して元気に音読や発表をしようとしている。</td></tr>
</table>

5. 単元の流れ（全16時間）
〈みつける・みとおす〉「くじらぐも」を読み、大まかなお話の内容を捉え、学習の見通しをもつ。
〈ふかめる・ひろげる〉場面の様子や登場人物の気持ちを想像し、言葉の工夫や動作化を通して考えたことを表現する。
〈ふりかえる〉役割を決めて音読劇をし、学習全体をふり返る。

6. 本時の学習（〈ふかめる・ひろげる〉 7／10時間）

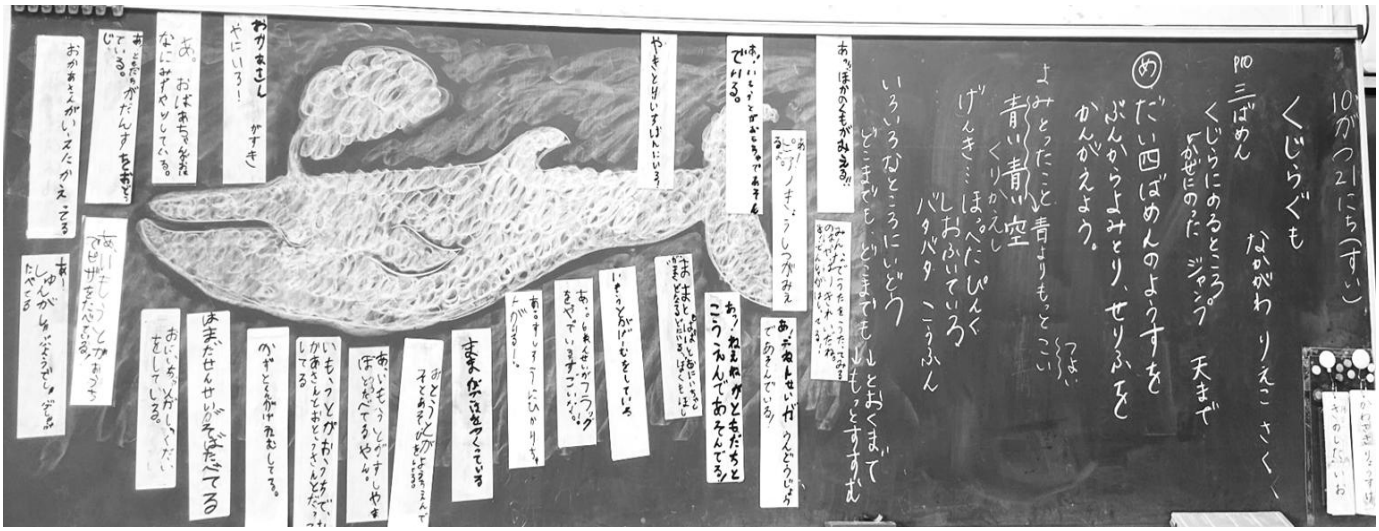
（1）本時の目標

・くじらの背中に乗って空から街を見ている様子や気持ちを想像し、言葉の意味や繰り返しの効果を感じることができる。

・くじらに乗っている気持ちになり、自分ならどんな言葉を言うか短冊に入る文章を考え、班で動作とともに気持ちをこめて表現することができる。
ことができる。

（2）本時の展開

学習活動	指導上の留意点	評価
1. 前時の学習をふり返り、第4場面を音読する。	○くじらに乗った子どもたちのわくわくした気持ちを思い起こさせ、本時の学習への意欲を高める。	・空を飛んでいる場面の様子や気持ちを思い出しながら音読している。
	第4場面の様子を文から読み取り、台詞を考えよう。	
2. 動作化や発問を通して、言葉の意味や繰り返しの表現を確認する。	○繰り返しの言葉に注目させたり、さし絵を参考に何が見えるかを発表させたり、下をのぞきこんだりする動作をしたりして、高い空の上からの景色の見え方や高揚感を実感させる。	・動作や発問を通して、空からの景色の見え方や言葉のリズム・楽しさを捉えている。
3. くじらに乗って海や街を見ている時の「自分の一言台詞」を考える。	○学校や街の様子を自由に思い浮かべられるよう、机間巡視し、声をかける。 ○「～だ！」「～が見えるよ！」など、一言で短く気持ちを込めやすい例を示して助言する。	・くじらに乗っている場面を想像し、自分が言いたい台詞を考えて書いている。
4. 前に出て、くじらに乗っている気持ちで一言台詞を発表する。	○場所を特定し、主語と述語を意識させる。 ○班ごとに前に出て発表させることで、班のみんなで一緒に空を飛んでいる一体感をもって楽しんで表現できるようにする。 ○聞いている児童には、友達が見つけたものや台詞の面白さに着目して聞くように声をかける。	・くじらに乗っている気持ちになり、動作を交えて自分の考えた台詞を発表している。



第3学年1組 国語科学習指導案

指導者 小西 哲也

1. 日時　2026年11月4日 水曜日　第1校時

2. 単元名 ちいちゃんのかげおくり

3. 授業づくりの視点

（1）教材分析

本教材は、登場人物（ちいちゃん）が自分と同年代（あるいはやや下）であるため、感情移入しやすい作品である。「戦争」の直接体験がない子どもたちにとって、情景描写や登場人物の行動・会話の叙述を手がかりに、状況や心情を膨らませ戦争の悲惨さを読み取る学習に適している。

（2）児童の実態

ペアやグループでの交流活動には意欲的で、友達の意見に耳を傾けたり、お互いのワークシートを見せ合ったりして学習を進められている。

しかし、情景描写（空の色や場所の様子など）や言葉の対比（第１場面と第４場面の違いなど）が、登場人物の置かれた状況や心情とどのように結びついているかを捉えることには、まだ慣れていない。

自分の考えを述べる際に、「～と書いてあるから」「～という言葉から」といった文中の具体的な叙述を根拠として挙げることに苦手意識がある。

（3）指導にあたって

本時は、第１場面と第４場面の「時・場所・登場人物」や「会話文」の対比関係に着目し、第１場面の「家族４人での温かいかげおくり」と、第４場面の「たった１人で行う幻のかげおくり」という２つの場面の対比を通して、単に「かわいそう」という表面的な感想にとどまらず、教科書の言葉（叙述）を根拠にしながら、戦争がもたらした悲惨さと理不尽さを深く考えさせることを目的とする。

4. 単元目標と評価

<table>
<tr><td>単元目標</td><td colspan="3">〇場面の移り変わりを表す言葉や、時や場所の描写に着目して正しく読むことができる。【思 C（1）オ】
〇場面ごとの「かげおくり」の様子や「空」の描写、ちいちゃんの行動・言葉を比較・整理し、ちいちゃんの心情や状況の変化を捉えることができる。【思 C（1）エ】</td></tr>
<tr><td rowspan="4">評価規準</td><td colspan="2">知識・技能</td><td>友達と感想や考えを共有し合い、互いの読みの深まりや多様な捉え方を理解している。【（1）オ】</td></tr>
<tr><td rowspan="2">思考力
判断力
表現力
等</td><td>書くこと</td><td>登場人物の行動や情景を表す言葉を根拠に、ちいちゃんの気持ちの変化や作品の主題について考え、自分の考えを分かりやすくまとめている。【B（1）ア】</td></tr>
<tr><td>読むこと</td><td>登場人物の行動や情景を表す表現（対比）を根拠に、ちいちゃんの気持ちの変化や作品の主題（平和・家族の愛）について考え、自分の言葉で表現している。【C（1）エ】</td></tr>
<tr><td colspan="2">主体的に学習に取り組む態度</td><td>場面の対比や表現の工夫に着目しながら進んで物語を読み、友達と自分の読みや感じたことを共有して自分の考えを広げようとしている。</td></tr>
</table>

5. 単元の流れ（全12時間）

〈みつける・みとおす〉「ちいちゃんのかげおくり」を読んで初めの感想を書き、これからの学習課題や計画を立てる。

〈ふかめる・ひろげる〉「対比」や「情景描写」に着目し、ちいちゃんの気持ちや作品の背景を深く読み取る。

〈ふりかえる〉「単元の最初（第１時）」と「学習の最後（第８時）」を比べ、作品に対する捉え方や心情の読み取りがどう変わったか、作者が伝えたかったことは何かについて、文章にまとめ、交流する。

6. 本時の学習（〈ふかめる・ひろげる〉 4／10時間）

（1）本時の目標

・ 第 1 場面と第 4 場面の「時・場所・人物」の記述を比較し、対比から戦争の悲惨さを読み取ることができる。

（2）本時の展開

学習活動	指導上の留意点	評価
第 1 場面と第 4 場面の「かげおくり」の様子を比べ、一文にまとめよう。		
1. 前時のふりかえり。		
2. めあてを確認し、ペアで「かげおくり」の同じところやちがうところを見つけ、ワークシートに書き込む。	○人の数・声・姿・場所など着目する視点を絞って声をかける。	・友達との意見交流に進んで参加している。
3. ペアで話し合ったことを、全体で交流する。	○特に人物（ちいちゃん）の様子や地の文に着目させた交流をおこなう。 ○会話文だけの読みをおこない、1場面と4場面での違いにも気づかせる。 ・家族4人→たった1人 ・白いかげぼうしが四つ→白いかげが四つ ・手をつないで→ふらふらする足をふみしめて ・体の弱いお父さんが教えてくれた→もういない ・大きな記念写真→白いかげが四つ	・自分の意見と比べながら聞いている。
4. ペアで場面ごとに「○○のかげおくり」と一文を書く。	○担任が例文を出す。様々な視点で書いてよいことを伝える。 ○どの文章から、そのように考えたかを聞きながら、進める。	・場面を比べることで気づいたことや、変わったり深まったりした考えについて、物語のどこからそう感じたのかを明らかにしながらまとめている。
5. 学んだことを生かして音読する。	○くらべて分かったことや戦争について、文章を手がかりにふり返りながら、音読させる。	

第５学年１組 国語科学習指導案

指導者 小嶋 宏典

１.日時　　2026年 11月 17日(火曜日)　第３校時

２.単元名　「固有種が教えてくれること」 「自然環境を守るために」

３.授業づくりの視点

(１)教材分析

本教材は、児童が興味関心を持ちやすい動物についての説明文である。児童にとって「固有種」という言葉はなじみのない言葉である。しかし、筆者は、固有種が日本の豊かで多様な自然環境のすばらしさを伝えてくれる存在であることを、様々な工夫を用いて伝えている。双括型の文章構成となっており、筆者の主張が繰り返し明確に伝えられている。また、様々な統計資料を効果的に用いた説明文である。図表やグラフ、写真などの資料を用いることで理解を補ったり、説明していることを確かめさせたり、説明を裏付ける根拠としたりしており、資料の目的や効果を理解しやすい。本教材で学んだことを生かして、自分の意見を資料を用いて表現することにつなげていきたい。

(２)児童の実態

１学期の説明文「見立てる」「言葉の意味が分かること」では、筆者の考えや事例の示し方に対する自分の考えを「納得できるか、できないか」を明確にして書いた。双括型の構成や原因と結果の関係で事例を挙げることで伝えたいことに説得力がうまれることを理解している。

しかし、「書く」ことに苦手意識をもち、手が止まる児童も少なくない。自分の意見はあるが、その根拠や理由を自分の意見とつなげて論理的に書くことは難しい。学んだ説明の仕方を生かして書くことには課題がある。

(３)指導にあたって

本単元では、「固有種が教えてくれること」で書きぶりの工夫や資料の効果を読み取らせていく。そして読み取ったことを生かして、自然環境についての統計資料を使って意見文を書く学習を設定している。

本単元では、主に2つの力をつけることをねらいとしている。

１つ目は、筆者の書きぶりの工夫に気づき、その効果を理解し読む力である。そのために文章全体の構成「はじめ・中・終わり」を押さえ、内容を読み取らせていく。そして文章と図表などの資料を結び付けながら読み、論の進め方や図表の効果について話し合わせる。

2つ目は、図表やグラフを使って自分が考えて伝えたいことを意見文に書く力である。「固有種が教えてくれたこと」で学習した書きぶりの工夫や、資料の効果を意識させながら、段落構成を予め示し、論の進め方をイメージさせやすいようにする。自分の伝えたいことに合わせて資料を選び、説得力のある意見文を書けることを目指したい。

４.単元目標と評価

<table>
<tr><td>単元目標</td><td colspan="2">○原因と結果など情報と情報の関係について理解することができる。【知(2)ア】
○引用したり、図表やグラフなどを用いたりして、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することができる。【思B(１)エ】
○目的に応じて、文章と図表などを結び付けるなどして必要な情報を見つけたり、論の進め方について考えたりすることができる。【思 C(１)ウ】</td></tr>
<tr><td rowspan="3">評価規準</td><td colspan="2">知識及び技能</td><td>原因と結果など情報と情報との関係について理解している。【(2)ア】</td></tr>
<tr><td>思考力
判断力
表現力
等</td><td>書くこと

読むこと</td><td>・引用したり、図表やグラフなどを用いたりして、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫している。【B(１)エ】
・目的に応じて、文章と図表などを結び付けるなどして必要な情報を見つけたり、論の進め方について考えたりしている。【C(１)ウ】</td></tr>
<tr><td colspan="2">主体的に学習に取り組む態度</td><td>粘り強く文章と図表などを結び付けて読み、学習の見通しをもって、読み取った筆者の工夫を生かして、統計資料を用いた意見文を書こうとしている。</td></tr>
</table>

5. 単元の流れ（全11時間）

〈みつける・みとおす〉全文を読み、筆者の主張や説明の工夫について捉える。（5時間）

〈ふかめる・ひろげる〉統計資料を用いる目的や効果を生かしながら、自分で選んだテーマの意見文を考えて書く。（4時間）

〈ふりかえる〉意見文を交流し、それぞれの感じ方の違いに気づかせる。（2時間）

6. 本時の学習（〈みつける・みとおす〉5／5時間）

（1）　本時の目標

・筆者が用いた資料の中で一番必要なものはどれかを考えることを通して、資料があることで説明文のどこが、わかりやすくなっているのか、その効果に気づくことができる。

・友だちと交流する中で、考えを広げ深めることができる。

学習活動	指導上の留意点	評価
1. 前時までの学習を確認する。	○「はじめ」の1・2段落を読み、筆者の主張を確かめられるようにする。 ○筆者が用いた資料は、どんなものがあったかをふり返り、確認できるようにする。	
説明文に資料があることで何がわかりやすくなっているのかを考えよう。		
2. 資料の中で1枚減らすとしたらどれかを考える。 ・ニホンオオカミやニホンカワウソの資料は、なくても本文で分からなくなるところはない。	○なぜその資料を選んだのか、本文とつなげて理由を考えるように声かけする。 ○写真の資料は、具体的なイメージを補う効果があることをおさえる。	・資料の目的や効果を、具体的な理由を挙げながら考えている。
3. 資料の中で一番必要な資料はどれかを考える。 1人→グループ→全体 ・資料2は、知らない言葉も多くて文だけでは想像できないから1番必要だと思う。 ・資料3がないと、日本のなかでどれだけ気候がちがうのかが文だけでは分からない。	○本文を読むときに資料があることで「なるほど」、「そういうことか」と分かりやすくなるのはどれかという視点で考えられるようにする。 ○どの本文の説明を補足するために必要な資料かを明確にできるようにする。 ○同じ資料を選んだ人でグループをつくり意見を交流することで、必要な理由を深められるようにする。 ○選ばれない資料があるときに、なぜ筆者がその資料を選んだのかと発問し、その資料の効果についても考えられるようにする。	・資料が必要な理由を本文のどこを補足するものか明確にして書いている。
4. 自分が意見文を書くときにどのように資料を選ぶと良いか、学んだことを生かしてふり返りを書く。	○意見文を書くときに用いる資料を提示することで、より具体的に考えながら、ふり返りができるようにする。	・筆者が用いた資料の効果を元に別の資料を選ぶ根拠を明確にしてまとめている。

ふたば Ⅰ　　一二三　琢磨

不思議（？）発見（！）型指導案

11月 2日 2校時	学年	ふたば Ⅰ 5年	教科	自立活動	単元	体の清潔を意識しよう

本時の学習　体からでるものの役割を知り、体を清潔に保てるようにしよう

教えたいことを学びたいことに転化する手立て

①　子どものめあて・問題意識
（学びたいこと）

活動Ⅰ
ティッシュの使い方を練習する

活動２
鼻水やよだれなど体から出るものの役割を知る

活動３
近くにティッシュやハンカチがない時にどうしたらいいか考える

もし手を使ってしまったらどうしたらいいだろう

②考え・ノート

○ティッシュがないときや、とっさの時にどうしたらいいか考える

服の袖を使う
トイレに行く
手を洗う

どんなふうに清潔を保てるだろう

③　話し合い・交流

○ロールプレイでやってみよう

・鼻を手でほじるとき
・鼻をティッシュでほじるとき
それぞれやってみてどう見えるか交流する

④　ふりかえり

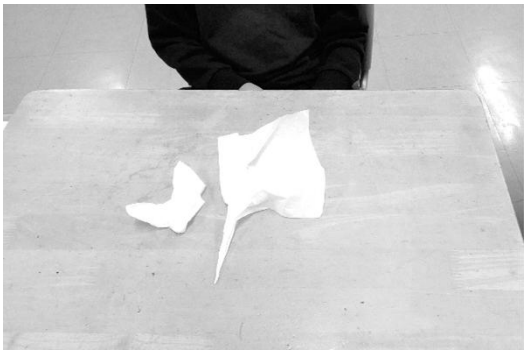
○鼻水やくしゃみはティッシュやハンカチでおさえよう
○手を使ってしまったときはどうしたらいいだろう

○振り返りを発表する。

特活とリンクする部分
くしゃみや鼻をかむときにどうしたらいいか考えることによって生活を振り返り、よりよく生きようとする力を培う。

教師のねらい（教えたいこと）

鼻水や唾液は他者にとっては清潔に見えないことを知り、体を清潔に保つことの必要性に気づく。





【実践をふりかえって】

本学級の児童が授業中に、指で鼻をほじっている姿を見て今回の授業を設定した。対象児はまだ清潔に対する意識が幼く、他者からどう見られるかということをあまり気にしていない。しかし高学年になり、自ら清潔を保持できることと他者からどのように見られているか意識して行動することは、今後重要なスキルであると考えた。

今回の授業では、鼻くそや唾液について正しく理解するため、①その機能について　②それらに含まれる菌の数を示した。唾液内にいる菌の数は、大きな数で学習した「億」という単位に相当していたので、子どもたちは、たくさんいるということが理解できた。鼻をほじる際、指を使う場合とティッシュペーパーを使う場合では印象が異なることを、ロールプレイで考えた。周囲の人からどのように見えているか、互いに確認しながら考えることができた。そして、授業の最後には手を洗い、清潔にする行為は自分も気持ちが良いことを実感した。

今後、日常生活においても学んだ内容を実行していけるよう促していきたい。

ふたば２－Ｉ　池内　純

不思議（？）発見（！）型指導案

６月１日５校時　学年 ふたば２－Ｉ　教科 自立活動　単元 謝るこつを知ろう

本時の学習 仲直りの魔法「ごめんね」のこつを　はっけんしよう！

教えたいことを学びたいことに転化する手立て

①　子どものめあて・問題意識

(学びたいこと)

「友達を嫌な気持ちにさせちゃった時、どうすればまた仲良くなれるかな？」

「『ごめんね』って言うとき、どんな『こつ』があるのかな？」

「みんながすぐに仲直りできる『にこにこ笑顔』にするにはどうすればいい？」

②考え・ノート

○場面の確認：謝るべき場面（ぶつかった、物を壊した、押した等）をイラストで確認する。
○選択肢カードから選んで貼ったりして意思表示をする。
○教師によるロールプレイ（良い例・悪い例）を見て、何が違うか考える。

謝るこつの発見（スキルの教示）
1．相手の方を向く
2．「ごめんね」と謝る
3．説明や理由を言う（「わざとじゃないよ」等）
4．次の約束（「次は気をつけるね」等）

③　話し合い・交流

○ペア練習：　役割を交代しながら、こつを使って謝る練習をする。
○相手がこつを使えたら「いいよ」と返し、その時の気持ち（安心した、うれしかった等）を伝え合う。
○練習して気づいた「仲直りのために大切なこと」を出し合う。

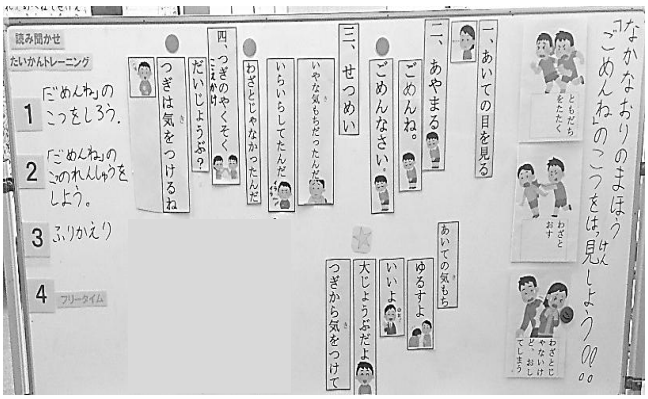
特活とリンクする部分
学級活動における「よりよい人間関係の形成」につながる。

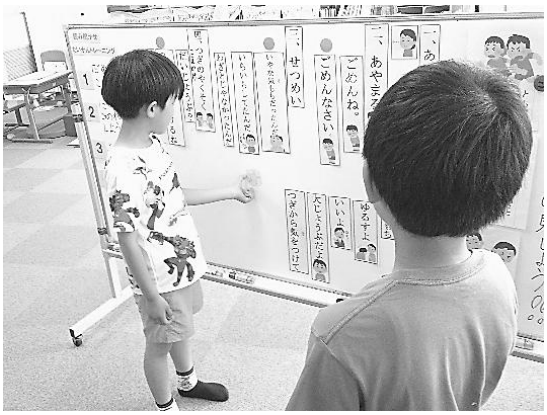
④　ふりかえり

！「目を見て謝ったら、友達がにこにこしてくれて、自分も安心したことを発見した！」
！「『わざとじゃないよ』と説明をすると、友達が納得してくれることが分かった」
！「みんなで、このこつを使えば、もっと仲良しになれそう！」

教師のねらい（教えたいこと）

○他者への関心やコミュニケーションへの前向きな意欲と態度を育てる。
○「相手の顔を見る」「理由を添えて謝る」といった具体的なスキルのこつを教示し、練習を通して「できた」という成功体験を積ませる。
○互いを尊重し合いながら協力して集団生活をより良くしようとする態度を形成する。





〈実践をふり返って〉

２年生の３名は、人とかかわることが好きである。しかし、接し方に戸惑う場面も見られる。個別であれば思いを伝えられても、集団での発表や気持ちの表現には、まだ苦手意識があるように感じる。

授業では「ごめんねのこつ」を熱心に学び、ロールプレイでは緊張しつつも、視覚支援（台詞や選択肢）を活用して前向きに取り組むことができた。ふり返りでは、「目を見て言うことができた。」「説明をすることが大事だと分かった。」と発表することができた。

今後は、この学びを日常で自ら実践できるよう、支援を続けていきたい。

ふたば２－２　栗之池　陽子

不思議（？）発見（！）型指導案

7月15日(水)2校時	学年	ふたば２－２（５年）	教科	自立活動	単元	敬語を使おう

本時の学習　日常生活の中で、相手に応じた言葉を使い分けよう

教えたいことを学びたいことに転化する手立て

①　子どものめあて・問題意識

（学びたいこと）

○作文を読んで言葉の使い方がおかしいところを見つけよう
「校長先生は、今、いるか。」
「あんただれ。」
「ちょっとまってろ。」
○言葉のおかしいところをどのように直したらよいだろう
「校長先生は、今、いらっしゃいますか。」
「どちら様ですか。」
「少しお待ちください。」
○敬語の種類を知ろう
・ていねい語
・尊敬語
・けんじょう語

②考え・ノート

・作文を読んで、正しいと思ったら○、間違っていると思ったら×をつける。

・誰が話しているのか、誰に向かって話をしているのか想像しながら考える。

特活とリンクする部分
自分の考えを持って、意見をまとめることができる。

③　話し合い・交流

・友達の発表を聞きながら、自分の考えと比べる。

・友達の考えを聞いて、自分の意見をまとめる。

・実際にロールプレイをして友達と会話をする。

特活とリンクする部分
相手に伝わるように話すことができたり、友達の考えを聞いたりすることができる。

④　ふりかえり

・相手や場所に応じて、言葉を使い分けることが大切だと分かった。

・同じ意味でも使う言葉によって、相手を嫌な気持ちにさせてしまうことがある。

・その場面にあった言葉を使いたい。

・もっと敬語の勉強がしたい。

教師のねらい（教えたいこと）※児童が主語となるように書く。（～～について気づく、～～について理解する）

言葉の正しい使い方について学び、適切な敬語を使うことができる。その場に応じた言葉を使うことができる。

【実践をふり返って】



本学級の児童は普段の会話の中で敬語を使うことはほとんどないが、これから様々な人と関わる中で自然と敬語を使えるようになってほしいと思い、この単元を設定した。敬語にも種類があること、使う場面や相手によって敬語を使い分けることなど、初めて知ったことも多く、自分なりに敬語を使おうとする姿が見られたのは良かった。相手が嫌な気持ちにならないような言葉遣いをしようとする姿も見ることもできた。

今回の授業では、ワークシートに記入して学習する活動が多かったので、実際に会話をしたり、ロールプレイをしたりすることで、もっと学習に意欲的に取り組むことができたのではないかと感じた。書くことが苦手なので、ワークシートに記入することで書く練習になると思ったが、実際に声に出して話すことの方が敬語を正しく使う力が身につくのではないかと考えられる。これからもその場に応じた言葉遣いや振る舞いをしようとする態度を意識して生活してほしいと願っている。

音楽　　中村　美那

不思議（？）発見（！）型指導案

6月18日(木)1校時	学年	4年生	教科	音楽	題材	いろいろなリズムを感じ取ろう

本時の学習　リズムばんそうのおもしろさを生かすための工夫を考えよう。

教えたいことを学びたいことに転化する手立て

①　子どものめあて・問題意識（学びたいこと）

【学習①】
「楽しいマーチ」を演奏し、強弱記号や音の重なり方についてふりかえろう。

【学習②】
グループで「いろんな木の実」のリズムばんそうを考えよう。
リズムばんそうのおもしろさを生かすために、どうすればよいか工夫を考えよう。

②考え・ノート

○グループでリズムばんそうを考える。

・自分の担当する楽器のリズムを復習する。
・旋律Ａと旋律Ｂの曲想の違いを確認する。
・Ａ、Ｂそれぞれに合う楽器を選ぶ。
「強弱のつけかたはどうしよう」
「リズムの重なり方の工夫はできるかな。」
「ＡとＢで違いが出るように、楽器の組み合わせを考えよう。」

③話し合い・交流

○作ったリズムばんそうを発表する。

・工夫を言ってから発表をする。
・終わった後に聞いていた他のグループにアドバイスをもらう。
・よりそれぞれの楽器のリズムや音色のおもしろさが伝わるようにするための工夫を考えよう。

特活とリンクする部分
自分の意見を伝える。演奏を聴いたり、自分で演奏したりすることで友達の意見に対して自分の考えをもつ。

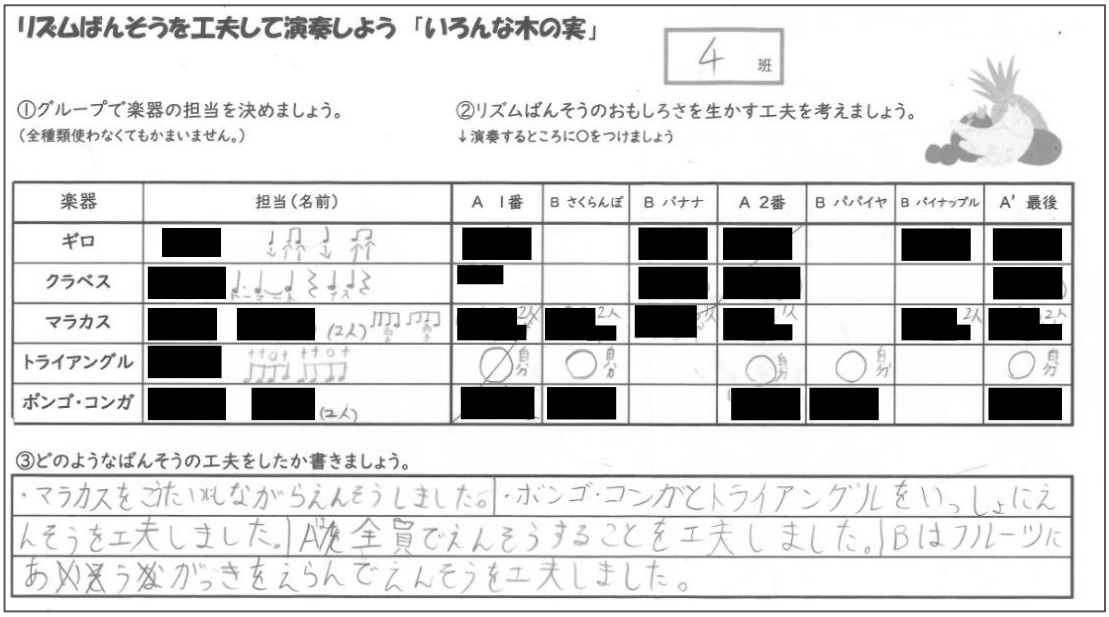
④　ふりかえり

○ふりかえりを発表する。

・楽器の組み合わせを考えて、リズム伴奏を考えることができた。
・強弱をつけるために演奏する楽器の数を工夫することができた。
・楽器の音色やリズムを目立たせるために1人ずつ演奏するところをつくった。

教師のねらい（教えたいこと）
楽器の組み合わせや強弱などを工夫することで、リズム伴奏のおもしろさをより感じることができる。

（例）児童のワークシート



リズムばんそうを工夫して演奏しよう「いろんな木の実」

4 班

①グループで楽器の担当を決めましょう。
（全種類使わなくてもかまいません。）

②リズムばんそうのおもしろさを生かす工夫を考えましょう。
↓演奏するところに○をつけましょう

楽器	担当（名前）	A 1番	B さくらんぼ	B バナナ	A 2番	B パパイヤ	B パイナップル	A' 最後
ギロ	[redacted]	[redacted]		[redacted]	[redacted]		[redacted]	[redacted]
クラベス	[redacted]	[redacted]		[redacted]	[redacted]			[redacted]
マラカス	[redacted] (2人)	[redacted] 2人	[redacted] 2人	[redacted]	[redacted]		[redacted] 2人	[redacted] 2人
トライアングル	[redacted]	○ 自分	○ 自分		○ 自分	○ 自分		○ 自分
ボンゴ・コンガ	[redacted] [redacted] (2人)	[redacted]	[redacted]		[redacted]	[redacted]		[redacted]

③どのようなばんそうの工夫をしたか書きましょう。

・マラカスをこたいれながらえんそうしました。・ボンゴ・コンガとトライアングルをいっしょにえんそうを工夫しました。Aは全員でえんそうすることを工夫しました。Bはフルーツにあ[illegible]そうながっきをえらんでえんそうを工夫しました。

【実践をふり返って】

児童は７人１班で話し合い、リズム伴奏の楽器の組み合わせを考えた。上のワークシートの班は、旋律Ａを全員で演奏し、Ｂは少ない楽器の組み合わせを考える工夫をしていた。他の班では、終わりに向けて楽器を増やす、強弱を考えるなどの工夫が見られた。練習後に中間発表会をして他の班からアドバイスをもらい、再度それぞれの班で工夫を考え練習し、最終発表会をしたことで、子どもたちは納得のいく演奏ができたようだ。今後は自分たちの演奏をタブレットで撮って客観的に見るなどの工夫も取り入れてみたい。

学校生活支援員　古谷　那奈

不思議（？）発見（！）型指導案

10月21日 2校時　　**学年** **通級**　　**教科** **自立活動**　**題材** **気持ちの伝え方を工夫しよう**

本時の学習　**Aさんの「本当の気持ち」と、相手への「正しいたのみかた・話しかけ方」をみつけよう。**

教えたいことを学びたいことに転化する手立て

① 子どものめあて・問題意識

（学びたいこと）

友だちに話しかけたい時や、うっかりぶつかった時、どうすればけんかにならないで気持ちを伝えられるかな？

【学習①】場面の確認

・イラストをみて、Aさんと Bさんの状況を確認する。

【学習②】Aさんの気持ちを想像する

・Aさんはなぜ Bさんの方へ走って行ったのかな。

どう伝えたら、けんかにならなかったのかな。

②考え・ノート

○A さんの「本当の気持ち」と「伝え方」を考える。

<本当の気持ち>

・選択肢をカードに書き、選ばせる

① うっかりぶつかった。

② いっしょに遊びたい。

③ びっくりさせようとした。

<伝え方>

① うっかりぶつかった時「ごめんね、前を見ていなかった。」

② いっしょに遊びたい時「いっしょに遊ぼう。」

③話し合い・交流

○1 対1のロールプレイ。

・役設定：児童=A さん、教師=B さん

・先ほど考えたせりふを実際に声と動きを出して練習する。

・パターン A

素直にあやまる。

・パターン B

名前を呼んでから声をかける。

④ ふりかえり

○ふりかえりを発表する。

・友だちに話しかけたい時は、ぶつかったりちょっかいをかけたりするのではなく、言葉でつたえる。

特活とリンクする部分

注目を集めたい時に体でぶつかってしまう行動を、適切な動作や「ごめんね」の言葉へ置き換え、自分から相手によいアプローチができるようにする。

教師のねらい（教えたいこと）

イラストに描かれている場面を通して、相手の気持ちや状況を正しく読み取り、適切な声かけや動作で自分から関わるコミュニケーションの力を育てる。



<実践をふり返って>

イラストに描かれている場面を通して、児童は「本当は一緒に遊びたかった」という Aさんの行動の裏にある意図を読み取ることができた。ぶつかることによって話すきっかけをつくるのでは喧嘩になると納得した。後ろを向いている相手への伝え方についても「誰に言っているか分からないよ」と声をかけると、「トントンってやって『一緒に遊ぼう』って言う」と適切な行動に気づくことができた。また、B さん側の言い方の例を示した際には「そう言えばいいんや」と納得し、相手の気持ちや会話の流れを意識して練習に臨んでいた。知識としては理解できているので、実際の休み時間など気分が高まった場面でも学んだ行動ができるよう、引き続き温かく見守っていきたい。

３ 研究のふり返りと
これから



研究のふり返りとこれから

1．集会について

実施した集会　　★印はロング集会（45 分授業で実施）。他の集会は、金曜日朝のきらきらタイム(8:30～8:45)で実施。

日　時	集　会　名	め　あ　て
4／24	はじめまして！たてわり班で自己紹介集会	①たてわり班のメンバーの顔と名前を覚えよう。 ②たてわり班で声をかけ合い、絆を深めよう。
5／　1 ★	一年生をむかえる会	1年生が安心して学校生活ができるよう、たてわり班の絆を深めよう。
6／ 3 ★	クラブ活動決め　※4～6年のみ	
6／ 5 ★	歌声コンテスト	①たてわり班で歌って踊って、仲を深めよう。 ②しっかり練習して、全校生の前で踊れるようにしよう。
6／12	光明の有る無しクイズ集会	①班のメンバーと交流する。 ②1年生にこの学校の事をもっと知ってもらう。
6／19	まねを出来るかな。だるまさんが○○した集会	班の人と協力して、仲を深めよう。
7／ 3	正しいそうじの仕方を覚えようクイズ集会	光明小学校のみんなが正しい掃除の仕方を知り、学校をぴかぴかにしよう。
7／10	みんなで探そう　ウォークラリー集会	班で話しやすい雰囲気を作って協力して、学校に隠された言葉を見つけよう。
9／11	器具を見つけて本物を見分ける器具探し集会	①班の人と、もっと仲を深めよう。 ②放送器具について知ろう。
9／25	石を集めて1位になろう 石拾い集会	班の人と協力して、安心安全な運動場を作ろう。
10／ 2	光明音頭集会	全校生で音と心を一つにして、光明音頭を踊れるように練習しよう。
10／ 7	転がせ！大玉ドライブ集会	運動場でするので練習する。
11／ 6	協力して絆を示せ、本の内容当て集会	班の人と協力して絆を深め、本について知ろう。
12／ 7★（予定）	光明ショウ店街	見通しを持って準備をし、自分の役割に責任を持とう。たてわり班の絆をさらに深めよう。

上記のように、今年度前半も集会を実施した。児童は、計画した内容を月1回実施している代表委員会で周知するとともに、各委員会の常時活動時やハーフ委員会の時間を活用して、集会の準備を進める。実際に全校生が集まっておこなう集会もあれば、テレビ放送を利用して各教室に分かれておこなう集会もある。計画した集会は、どの形態で実施することが良いのかということも含めて、自分たちで考えている。

集会の運営は4～6年生がおこなうが、本校はこうした活動を長年おこなってきているので、自分たちが高学年になった際に、集会がどんなものであるのかイメージを共有した上で考えられることは、継続して取り組んできた強みである。とはいえ参加者と運営側では、その動きは全く異なる。各委員会活動の高学年は、各担当教員に相談しながら実施している。

集会を運営する児童に各教員が徹底していることは、「時間を大切にすること」「集会をつくる姿勢（静かに始めようとする姿勢）」、そして何より「やりきること」だ。例えば、前に立ってパフォーマンスの例を示す時、照れて笑ってしまったり動きが小さかったりすると、見ている児童は何をすれば良いか分からないばかりでなく、白けてしまう。それでは集会が成立しない。児童自身が自分の得手不得手を踏まえて役割を担っているが、普段は内気な児童もそのことを理解して前に立つ役割に挑戦する際には、やりきろうとしている。

また集会で前に立つ高学年が、「発表の仕方」の手本となることも多い。昨年度、当時の4年生がふり返りを言う際に、みんながマイクを用いて話していた中、マイクを通さない地声でも堂々と体育館全体に聞こえる声で話したことをきっかけに、多くの集会でふり返る際に、マイクを用いることがなくなった。自分が考えたことや感じたことを伝えるためには、相手に聞こえる声の大きさが必須であることが、日々の教科授業の中でも積み上げられてきている。そのため、マイ

クがなくても伝えることが常となっている。ある集会では、委員会活動の児童が前に出てくる際の所作（歩き方、お辞儀の仕方）が丁寧だった。その集会のふり返りで教員からそのことが評価されたこともあり、その後の集会に踏襲された。

本年度、集会における児童の様子を、時間を設けて教員全員でふり返るようにしたことは前述のとおりである。これは、集会を単発な活動で終わらせるのではなく、年間を通して力を育む取組とするため「つなげていく」際、教員の共通理解が重要だと考えたからである。

以下は４５分枠で実施した活動について、教員によってふり返った内容である。

（１）１年生を迎える会

集会最後のふり返り

＜児童代表＞　１年　みんなと遊べて楽しかった。
今日みんなと一緒に頑張った。
２年　２年生になってから集会が久しぶりだった。
集会を開いてくれた人も、「みんなが楽しんでほしいな」と思ってやってくれた。
３年　班の人と少しでも仲を深められたので、良かった。
４年　仲が深まったから良かったと思った。
５年　自分の班では、１年生だけでなく新しい班のメンバーとたくさん話したり交流したりすることができたので、これからもこういう集会を通して仲良くなりたい。
６年　みんななかよし委員会が工夫をたくさん考えていたところが良かった。
１年生は元気いっぱい歌って踊っていたので、そこが良かった。

＜教師代表＞　委員会の人は、新しいアイデアを生み出していくことにチャレンジした。
拍手の送り方、目の向け方、思いやりのある聞き方ができていた。
誰かが頑張っていたら、一生懸命聞くことが大切だと思う。
「静かにして」という声掛けをなくしていきたい。
何のために集会をしているのか、そのために自分は何を頑張ろうと思っていたかということを意識することが大切だと思う。

教員でおこなったふり返り

①内容について
・光明太鼓を始める前に、なぜ演奏をするのか１年生にメッセージがあったほうが良かった。
・光明レンジャーはとても楽しい雰囲気で、子供が堂々とやりきる姿が良かった。
・光明レンジャーが内容を一番届けたい１年生が、背中越しの出し物になっていた。出し物や発表の際には、相手意識を持たせ、演技をする立ち位置等の工夫をさせることが必要だと思う。
・１年生を迎える会でレクリエーションをすることは初めてだったが、班の中で交流が生まれるので素敵な会だと感じた。
・全校生が１年生を迎え入れようという雰囲気が良かった。
②子供同士のかかわり（各学年の役割、子供の評価したいポイント、共有したい出来事）
・６年Ａさん　１年生に声をかける姿が見られた。
・３年Ｂさん　静かにしてという声かけを自分からしていた。
③子供たちの話し方、聞き方
・６年生が主体となって各学年に声掛けを行い、並べる姿は良かった。
・始まる前の体育館の雰囲気作りが必要だと感じた。
・声掛けをしながら、"今は聞く時"と意識できていると思った。
・年度始めの集会にもかかわらず、自分たちで聞こうとする姿勢を作っていたと思う。
④子供たちのふり返りについて　（言葉や文について）
・３年生は、教室を出る前に聞くことを大切に今回の集会に参加させた。
・ふり返りでは、聞くことを大切に行動できたか、最後のふり返りを行おうと手を挙げていたか、教室の戻り方についての３点をふり返った。
・ふたばの児童には、ふりかえりを頭に置きながら会に参加するように伝えていた。３年生Ｃさん、Ｄさんが挙手をすることができた。指名されなかったのでＣさんは頭を抱え、Ｄさんは泣いていたが、挙手したその姿勢と思いを誉めた。今後に生かしていきたいと思う。

⑤その他
・３年生は教室に戻る際に階段を走って戻っていたと、学級の児童から報告を受けた。

（２）クラブ活動決め

教員でおこなったふり返り

①内容について
・クラブ活動を宣伝する時に「入ってください。」という言葉が多かった。もっと多様な言葉を用いてクラブ活動の魅力を伝えられるよう、言葉の指導をしていきたい。
・自分のやりたいことを元にクラブ活動を決めるよう話していたが、最後に譲った子供たちは本当に自分のやりたい活動を選んだのかが気になった。
・１つのクラブ活動に４、５、６年生全学年が揃うことを条件にしなくても良いのではないかと思う。特定の児童に過度な負担がかかっているのではないかと感じた。
・自分たちで決めたクラブ活動だから責任を持って成立させるために、４、５、６年生全学年が揃うことを条件にしたい。
・同じクラブ活動を選んだ児童で自己紹介をする時間があったが、その際に話す内容を指導する方が良い。自分の名前、「よろしくお願いします。」という挨拶、好きな食べ物を伝えていた。クラブ活動でどんな活動をしたいのか、みんなでどんなクラブ活動にしていきたいのか等、目的に合う内容を話せる子どもに育てるために、教師による指導が必要だと思う。

②子供たちの話し方、聞き方
・司会進行の児童は、会を進めるための言葉だけなので、原稿を見ずに話をさせたい。

③その他
・光明小学校が大切にしたいと考える６年生を中心とした児童主体のクラブ活動決めについて、課題が見えてきた。
・4、５年生は事前にどのような指導をすれば良いかも含めて、クラブ活動決めの進め方を検討していく必要がある。
・誰が６年生を担任しても進められるように、指導の仕方を決めていきたい。

（３）歌声コンテスト

代表委員会でのふり返り

＜児童代表＞
１年　みんなで協力して賞を取ることができた。笑顔一杯で楽しかった。
２年　みんなで協力できた。去年より踊ることができた。仲を深めることができた。
３年　練習を頑張ったが、本番のステージで大きな声が出せなかった。
４年　役割を果たせた。班の絆や仲を深められた。待っている時、静かに聞くことができた。帰る時、教室まで静かに帰ることが課題だ。
５年　低学年に優しくできた。しかし、教えることはあまりできなかった。６年生が低学年に関わっている姿を見たので、来年は頑張る。
６年　笑顔で気持ちを一つにしてやりきった。練習の取り組み方、声のかけ方や時間の使い方が課題である。

教員でおこなったふり返り

①事前練習について
・今年度、６年生にとっては準備期間が短かったが、練習が続けてあったので、低学年は覚えやすかったのではないかと思った。次年度、短期間の練習にしても良いかと思った。

②内容について
・賞の発表後に、たてわり班毎にふり返りをおこなったら良かった。金賞を取れなくてかなり落ち込んでいた児童がいたので、子供たち同士で互いに「頑張ったよね」と認め合える時間を取っても良かった。
・審査員が審査をして賞を決める際、審査の観点を示し、当日までにどこかで共有されていると良い。審査の観点が明確であれば、それを意識した練習でき、ふり返りの中心も明確になる。

・表彰する時に審査員から「どこがどうだったから○賞にした」と説明があると良い。審査員の伝える力や言葉の力が問われるが、審査基準を明確にしていると、話しやすいと思う。

③児童代表のふり返りについて　（言葉や文について）

・ふり返りで、ふたばの子供たちが挙手する姿が多く見られた。発表の内容については、言葉遣いなどの指導をしていきたいと思った。挙手する姿勢は良かった。

④その他

・振り付けを子供たちが考えているのが、とても良い。子供たちは歌詞を基に振り付けを考えているように見えたが、多くの班が上半身だけを動かすので、結果的に似たような振り付けが多かったと感じた。金賞を獲った黄班は、全身を動かしたり横に走ったり、他グループより工夫していたところが評価につながったのではないかと感じる。どんなことでも、子供が自由に発想するには、様々な方法を知っておく必要があると思う。子供の創意工夫を引き出すために、日常的に指導者側がどのような物を見せ、語り、体験させておくべきかということを考える必要がある。

２．研究のこれから

小学校学習指導要領第６章に「学級活動、児童会活動及びクラブ活動の指導については、指導内容の特質に応じて、教師の適切な指導の下に、児童の自発的、自主的な活動が効果的に展開されるようにすること。」とある。私達教員は日々の学習や生活の中で、子供の自主性を育てていきたいと考え、取り組んでいる。それは、学習指導要領にもあるように、児童任せにするということではなく、児童が主体的に動けるように、教師が具体的かつ適切な指導をしていくということである。

そのために、次の３点を取り組んでいきたい。

（１）活動内容に適している「めあて」なのかという視点を持たせる。

高学年を中心に、ふり返りの際には「良かった」「楽しかった」「凄かった」というような言葉を用いないことを意識させるようになって３年目となる。その集会や学びに参加していなくても言えるような大雑把な感想ではなく、その場にいたからこそ考えたことや感じたことを具体的に言える力をつけたいと願った取組が、少しずつ定着してきたと感じる。高学年のふり返りでは「良かった」「楽しかった」「凄かった」というような言葉が激減した。また、発言する際には、なぜそう感じたり考えたりしたのかという根拠や理由を、具体的に話すようになってきている。教員が日々の授業において意識させてきたことが集会の場で生かされていることから、教員のかかわりや指導、評価が重要であることを痛感している。

次は、めあての設定について取り組みたい。現在のめあてには「絆を深める」「仲を深める」という言葉が多用されている。子供たちが特別活動をとおして、たてわり班をそのような良い関係にしたいと願っていることは大いに理解できる。しかしもしかすると、その思いや願いは全ての学校生活の土台となるもので、あえて活動のめあてにあげる必要はないのかもしれない。にもかかわらず、教員も子供もそうした言葉が出てきた際に「良い事を言っているな」となんとなく終わっていないだろうか。

運動会前に実施した石拾い集会で「班の人と仲を深めることができた」とふり返った児童がいた。その集会は、班毎に分けられた運動場の範囲内にある石を個人で黙々と拾い、最後に班全員が拾った石を集めて何 kg だったかを競うものだった。そのため、班で相談したり交流したりするというような「仲を深められる」場面はなかった。児童がそのようなふり返りをした時に、何人の教員・児童が「どこでそう感じたの？」と疑問に感じたのだろう。

そうした視点で今年度実施した集会のめあてを捉えた時、内容とめあてが一致しているのか検討すべきものがいくつかあった。教員も児童も「絆を深める」「仲を深める」とはどういう状況を想定しているのかということを踏まえて、めあてを設定していたのか。今年度初回の全校研究会では杉田先生から「めあてが理想やふわっとしたものに留まっている。キーワードを絞り込み、実施できているか否か確認することができる行動や方法にまで具体的に落とし込む必要がある」と、助言していただいていた。会の内容によらず、めあてに「絆を深める」「仲を深める」を多用しているのであれば、集会や学びに参加していなくても言える「良かった」「楽しかった」「凄かった」というふり返りと同じである。

したがって集会を計画する際には、活動内容に適しためあてであるかを考えさせていく必要がある。その前には、集団の実態に応じた活動なのかという視点も必要かもしれない。まずは

日々の授業や活動の中で、内容と合った言葉（めあて）になっているかどうかという視点を児童が持てるよう、働きかけていく。

（２）豊かな言葉を使えるよう、言葉の力を鍛える。

上記のように子供に働きかけていく際、思考力や言語力を鍛えることが不可欠である。子供たちの語彙を増やし、言葉を正しく使う力をつけるために、国語科を中心とした各教科学習や日々の生活の中で迫っていきたい。

今年度は国語科の研究をおこない、言葉の力をつけることに取り組んだ。９月の代表委員会で、運動会のスローガンについて話し合った際のことである。ある児童が「例年、入っているから」と話したことをきっかけに、今年度のスローガンに「光明」を入れるのか入れないのか話し合われた。最終的には、毎年使われているからこそ今年度は使わないという結論に至ったが、１つの単語について児童が着目し、代表委員会の場で議論になることはこれまでになかったので、言葉にこだわろうとする力が育まれつつあると感じた。だからこそ今後は、言葉の意味を考えながら「どちらの言葉を使う方がみんなと集会の様子を共有しやすいか」とか「どちらの語順の方が、他学年にも意味が伝わるか」などといった視点を持てるようにしていきたい。言葉の言い換えや表現内容にこだわる姿が見られた際には評価し、日常的に使えるようにしていく。

子供たちが豊かに言葉を使っていけるようになるには、それを導いていくための言葉の力が教師に求められる。それを意識して今年度の教科部会には、教員が実際に書いたり話したりする活動を取り入れたところ、言い換えたり適切な表現をしたりすることが難しいという私達教員の課題が明確になった。

読書週間では、朝学習の時間に全学級で読書をした。子供だけが読書をするのではなく、学級に特別支援学級担任や専科教員も行き、子供たちと同じ空間で読書をした。これは身近な大人が読書をする姿を見せ、子供たちの読書意欲を高めるためである。読書による効果は多々あるが、知らない言葉や文学的な表現に触れること、洗練された言葉が自分の想像力を大いに広げることを体感するなどの効果を狙っている。言葉に触れる楽しみを味わい合えるような学校にしていきたい。読書週間はあくまでも一例であるが、子供も大人も良い言葉や表現に触れ、豊かな言葉を使っていけるような取組を、今後も継続していく。まずは大人が活字に親しみ、言葉にこだわることを意識して生活することが鍵である。そして子供が集会内容に合うめあてを設定できた時、めあてに基づいて充実した活動ができた時、次につながるふり返りを丁寧に行えた時などを逃さず捉えて価値づけし、集会の質を高めていきたい。

子供の意見をつなげていく大切さについても共有してきた。話型を示しながら意見をつなげる取組をした学級もある。話型はあくまで「型」であり、意見のどの部分をつなげて深めたり広めたりするのかという内容こそが重要であるが、話合いが不得手な児童でも参加していく手立てとして有効だ。全校で意見をつなげる取組を強化していく際には、国語科「話すこと・聞くこと」領域の「話し合う」単元に再注目したい。この単元は以前の教科書に比べて充実していることからも、子供たちに大切な力として位置づけられていることが分かる。話合うことの基礎となる事柄を系統立てて学ぶことによって、低学年から話し合う力を育めていれば、高学年での話合い活動が、より充実してくるだろう。国語科での学びを特別活動の場で生かすこと、教科との往還にしっかり取り組んでいく。

（３）自分たちが学校づくりの主役であることを認識させる。

本校は、令和１０年４月に学校統合を控えている。その際、大いに活用されるのが、特別活動で育んだ力である。これまで培ってきた学校生活を楽しくする特別活動だけではなく、自分たちの学校をつくっていくという意識を持たせていきたい。

学級活動、委員会活動、たてわり活動等、全ての特別活動が自分たちの学校をつくるための大切な時間である。「自分たちの学校を自分たちの手でより良くしていく。」「学校づくりの主役は自分たちである。」という意識は、学校統合に向けてだけではなく、日々の学習や生活の中でも大切なものだ。高学年はもちろん、低学年でも「どんな学校をつくっていきたいか。」「自分にはどんなことができるのか。」ということを子供たち一人一人が考え、主体的に行動していくことができたら、間違いなく素晴らしい学校となる。

学校統合に取り組むのではなく、日々の取組を積み重ねた先に学校統合がある。学校統合までの日々も、より一層学びに向かう力を育てていきたい。

４　全体会・講演



◆事後研究会◆　１４：４５～１５：３０

【１年・２年：1-1　　３年・4年：4-1　　５年・６年：6-1　　ふたば：学校図書館】

～メモ～

◆ 全　体　会 ◆　１５：４５～　【多目的室】

教育長あいさつ　　宝塚市教育委員会　　教育長　　赤井　稔

講評・講演　　**國學院大學人間開発学部　教授　　杉田　洋　先生**

演題　「これからの特別活動の在り方について

～次期学習指導要領を踏まえた取組に向けて～　」

閉会あいさつ　　宝塚市立光明小学校長　　福本　徳子

杉田　洋（すぎた　ひろし）



國學院大學 人間開発学部 教授

元文部科学省　　初等中等教育局　　視学官
日本特別活動学会 理事　　全国特別活動研究会 顧問
NHK「でーきた」番組委員

教職・ 委員歴等

○学生時代に青少年の健全育成のためのボランティア活動に没頭する。
　このことにより埼玉県からｱﾒﾘｶ･ｶﾅﾀﾞに派遣される。（これらの経験から教職を目指すことに…）

○埼玉県浦和市立小学校　（昭和55.4～平成10.3 4校を経験）　18年間
○浦和市教育委員会指導主事（平成10.4～平成13.3）
○さいたま市教育委員会主任指導主事（平成13.4～平成16.3）　} 6年間
○文部科学省初等中等教育局 教育課程課 教科調査官（平成16.4～）
○文部科学省初等中等教育局 視学官(平成25.4～)　} 11年間
○國學院大學教授（平成27.4～）

○文部省刊行「小学校特別活動指導資料」作成協力者 ---------- (平成6年)
○小学校学習指導要領特別活動編・解説　作成協力者 ---------- (平成10年)
○小学校学習指導要領特別活動編・解説　教科調査官として ---------- (平成20年)
○文部省国立教育政策研究所 特別活動教師用指導資料 視学官として ---------- (平成25～26年)
　楽しく豊かな学級・学校生活をつくる特別活動(小学校編)
○モンゴル国へのTOKKATSUの導入に関わる(ﾓﾝｺﾞﾙ教育大学客員教授【**令和2年まで**】) (平成27～28年)
○エジプト共和国へのTOKKATSUの導入に専門家として関わる　(平成28年～現在)
　「人間作りtokkatsu」net公開(令和５年7月) NHKｸﾛｰｽﾞｱｯﾌﾟ現代に出演(令和５年12月2日)
○中央教育審議会教育課程部会特別活動ﾜｰｷﾝｸﾞｸﾞﾙｰﾌﾟ委員 ---------- (平成27年11月～平成28年6月)
○小学校学習指導要領解説特別活動編 作成協力者 ---------- (平成28年7月～平成29年5月)
○文科省国立教育政策研究所 特別活動教師用指導資料 作成協力者 主査---------- (平成29～30年)
　みんなでよりよい学級・学校生活をつくる特別活動(小学校編)
○評価規準，評価方法等の工夫改善に関する調査研究（小学校特別活動) ------- (平成31～令和元年)
　（文科省国立教育政策研究所） 協力者会議主査
○小学校・特別活動映像資料協力者会議主査 ---------- (令和２～３年)
○小学校・特別活動映像資料児童会･ｸﾗﾌﾞ活動編作成に関する協力者会議主査------ (令和４～５年)
○小学校学習指導要領実施状況調査に係る問題作成委員会(小特別活動) 主査----- (令和４～５年)
○小学校学習指導要領実施状況調査に係る分析委員会(小特別活動) 主査--------- (令和５～６年)
○兵庫県 兵庫型「体験教育」魅力発信検討会議 主査 ---------- (令和6年7月)
○JICAチェアにて、イラク国への日本式教育Tokkatsuの啓発 ---------- (令和7年2月)
○品川区市民科検討委員会委員 ---------- (令和7年～)

主な著書

■よりよい人間関係を築く特別活動・・・・・・・・・・・・・・・・・・　図書文化
■特別活動の教育技術・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　小学館
■学級活動指導法ｾﾐﾅｰ(中学年) 子どもがもえる活動づくり・・・・・・・・・・　明治図書

主な編著書・ 共著・ 監修書

■特別活動で、日本の教育が変わる・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　小学館
■特別活動・ｷｬﾘｱ教育 児童用教材「楽しい学校生活」1年～6年・　文溪堂
■平成29年度版 小学校新学習指導要領の展開 特別活動編・・・・・・・・・・　明治図書
■平成29年度版 小学校新学習指導要領ﾎﾟｲﾝﾄ総整理 特別活動・・・・・・・・　東洋館
■子どもの心を育て つなぐ特別活動 - 道徳的実践へのｱﾌﾟﾛｰﾁ - ・・・・・・・・・　文溪堂
■特別活動で子どもが変わる！ ～新しい評価と指導のモデル集～ ・・・・・・・・・　小学館
■CONPACT64 教室環境づくり・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　小学館
■担任がしなければならない学級づくりの仕事12か月・・・・・・・・・・・　明治図書
（小学校低学年・ 中学年・ 高学年編）
■改訂対応小学校学級活動のファックス資料集・・・・・・・・・・・・・・　明治図書
（低学年・ 中学年・ 高学年編）
■担任がしなければならない授業づくりの仕事12か月・・・・・・・・・・・　明治図書
（小学校低学年・ 中学年・ 高学年編）
■担任がしなければならない保護者対応の仕事・・・・・・・・・・・・・・　明治図書
■小学校教師のための生徒指導提要実践ガイド・・・・・・・・・・・・・・　明治図書
■クラブ活動ｱｲﾃﾞｨｱﾌﾞｯｸ1巻～5巻（卓球・科学･ｻｯｶｰ・料理･ﾊﾞﾄﾞﾐﾝﾄﾝ）・・・・・・・・・　ﾌﾚｰﾍﾞﾙ館

◆ メ　モ ◆

お わ り に

本日はご多用の中、本校の研究発表会へご参会いただき誠にありがとうございます。

本校は、特別活動の研究に13年間取り組んできました。そのため、どの児童も縦割り班活動を通して「学年を超えてかかわること」を自然とおこなっています。先日、異臭のため避難することがありました。その際、心配そうな表情を浮かべた1年生が同じ縦割り班の6年生のそばにそっと近寄りました。6年生は1年生の手を握り、もう片方の手で肩を撫でながら、落ち着くように声をかけていました。トライやるウィークで来校した中学生と「同じ縦割り班だったから」と親しく会話する様子もありました。このように縦割り班活動の取組により、学年を超えた交流が盛んで、全校生のつながりが強いことは本校の強みです。

今年度は、集会の時間を楽しいレクリェーションの時間で終わらせるのではなく、取組を通して何を感じ学ぶのかという「めあて」を明確にした上で参加する大切さを子供に意識させることに力を入れました。また国語科で「言葉」の力を育む研究もしているので、ふり返りの際に「楽しかった」「良かった」というような、あらゆる場面に使える平易な言葉ではなく、より具体的に話すことを意識させました。そうした成果でしょうか。毎週水曜日に実施している縦割り班での清掃活動のふり返りでは、6年生が班員の様子について、以前より集合が早くなったことやふり返りの内容が具体的になったことの具体例を挙げ、「成長していると感じた。」と丁寧に伝えていました。また別の班では、4年生が1年生の教室に行き「私の雑巾はこれだけしか汚れていないけれど、1年生の○○さんはこんなに汚れている。どれほど掃除を頑張ったのか伝えたかった。」と担任に話したので、1年生は担任からうんと褒められました。このように子供たちの仲間を認める目・言葉・方法が、多様で豊かになってきていることは、誇らしく嬉しいことです。

本研究紀要にはその研究の一端をとりまとめました。ご覧くださった皆さまには今後のために、私たちの取組に対する忌憚のないご意見・ご感想をぜひお聞かせいただきますようお願い申し上げます。

最後になりましたが、ご指導ご助言いただきました國學院大學教授 杉田 洋 先生、神戸女子大学教授 吉川 芳則 先生、元本校教員 富岡 淑佳 先生、宝塚市教育委員会をはじめ、日頃より本校教育活動の取組を温かく見守り、ご協力いただいております学校運営協議会、学校ボランティア、保護者、地域の皆様に心より感謝申し上げます。

宝塚市立光明小学校　教頭　島谷　恵子

令和8年度（2026年度）　研究同人

校　　長	福本　徳子	兵庫型学習システム	吉谷　史子
教　　頭	島谷　恵子	兵庫型学習システム	片井　照代
1年1組	濵田　梨乃	主幹マネジメント	後藤　仁子
2年1組	澤田　強志	介　　助	木下　摩由
3年1組	小西　哲也	調　　理	多田　清智
4年1組	成迫　由起	調　　理	山田　由季
5年1組	小嶋　宏典	調　　理	小川　貴美子
6年1組	永樂　俊樹	事　　務	武司　淳子
ふたば学級1	一二三　琢磨	用　　務	小川　敦史
ふたば学級2－1	池内　純		
ふたば学級2－2	栗之池　陽子	＜協　　力＞	
通級指導	古谷　那奈	学校図書館司書	小谷　緑
音楽科・家庭科	中村　美那	子ども支援ｻﾎﾟｰﾀｰ	宮浦　永子
外国語科・外国語活動	澤田　理加		
養　　護	川上　紗季		